

研究紀要

第29集

行事を通じての仲間づくりについて — 中2 スキー行事を中心に —	平塚智 原田美智子 勝山元照	1
スポーツルール (I) — “LOVE”、その解釈をめぐって— (II) — “トラック走”、その回転方向をめぐって—	奈良重幸	9
昭和62年度高2 選択講座「現代文」のあゆみ	谷本文男	27
選択制男女共学による体育の授業について	渡辺幸子	48
地方都市と中心商店街 (IV)	寅貝和男	57
今年の研究活動	研究調査部	104

1988

奈良女子大学文学部
附属中・高等学校

行事を通じての仲間づくりについて

— 中2 スキー行事を中心に —

平塚 智・原田美知子・勝山元照

はじめに

今年度の中学2年生(61年4月入学生)は中学生活の3年間に、中一の一泊行事、中三の水泳訓練の2大宿泊行事とこの学年に特別認めていただいた中二のスキー行事のあわせて三つの宿泊行事にとりくんだ。毎年春秋実施の全校レクリエーション(遠足)を含めて、これらの行事のおやつや服装のルールについてや全校レクの行き先について積極的に担任3人と学年と話し合いの時間を持って班、クラス、学年の仲間作りに役立ててきた。

話し合いや活動については次の点について気をつけている。

1. 行事だけの班づくりにならないように、日々のクラス活動の班と一致させている。
行事の数週間前より意識的にその行事にむけた班を作る。この前行なわれたスキー行事においては1月31日の行事に向け、二学期中に班を決め三学期からその班編成にした。
2. 全校レクの行き先やルールの決定については各班の案から各クラスで1,2の意見にしぼって、最終決定は必ず大教室などで学年HRを行い、決定した。目的は学年集会を開く力をつけることと、学年全体で討論できる力をつけてほしいからである。おやつや服装問題などについては、ホームルーム委員(時には実行委員)に司会をさせて、担任案について話し合いを行う。
教師の力を借りずに、秩序のある討論ができない時は、みんなが問題について関心がないものと判断して生徒の意見を受け入れない。
3. 行事前は話し合いが、短時間ですむようにアンケートをとり入れ、行事後は、決めたルールの総括のためのアンケートを、ホームルーム委員や係がまとめ、次の行事に生かせるようにしている。
以下、スキー行事に至るまでの学年のとりくみを概括し、行事の意義と、行事を活かした仲間づくりの方法についての私達の見解を述べたい。

I. スキー行事までのとりくみについて

中1から中2までのとりくみは、以下の表(1)のとおりであるが、服装・おやつ・班編成などのルールが、行事ごとにかわっているのが特色といえる。これは、教師の方から一方的にルールを決めるのではなく、前回の行事の反省の上に立って、生徒と教師の話し合いをもち、次回のルールを決めるという方法を用いてきたことによる。たとえば、中2春のレクリエーションでは、生徒の要望を入れて、私服(校章をつけること、活動しやすいもの—という条件つき)としたが、およそ活動的とはいえない服を着用してきた生徒が一部にあり、生徒内部からも批判が出たために、秋のレクリエーションでは制服ということになった。服装・おやつ・班編成といった問題は、教師の想像以上に、生徒にとっては「身近かで重要」な問題であり、関心も高く、ルール決定にあたっては意見も活発に出される。生徒の過半数=ルールの決定ということにはしていないが、自分達の問題は自分達が主体的に意見を述べあって決定していくという、自治能力育成の基礎訓練の場になってきたと、

私達は考えている。

<表1> 中1・中2での行事

学年	行事名	服装	おやつ	班編成	活動前後の記録
1 年	一泊行事 (5/1・2) 曾爾高原	体そう服	400円 以 内 (2日)	名列順の班 (8人)	おやつの問題 (4/24 学年集会) アンケート (5/6→5/8 学年集会発表) 係ごとの集会 (5/8 学年集会発表)
	秋の全レク (10/27) 上野公園	(活動的な) 私 服 (ズボン) 運動ぐつ	300円 以 内	クジの班 (6～7人)	行き先の決定 (各班の案10/8→クラスの) 案2つ10/11→学年集会10/15) 服装・おやつについて (10/23学年集会) 反省(11/19 各HR)
2 年	春の全レク (5/6) 飛鳥サイク リング	(活動的な) 私 服 (校章必着)	300円 以 内	好きな者同志 ただ男女の組 合せはクジ	行き先の決定 (クラス案→学年集会4/15) 服装・おやつについて (4/30 学年集会) アンケート (5/10→5/15 学年集会発表) <生徒より行事前からアンケ ート取るべきと>
	秋の全レク (11/6) 京都・迷路	制 服 (前回違反より)	良識の範囲 内で	クラスの枠を はずして好き な者同志 (8～12人)	行き先の決定 服装・おやつ問題 (アンケート アンケート (11/12→11/13 学年集会発表)
	スキー行事 滋賀・栃木	私 服	600円 以 内 (3日)	クラス内で好 きな者同志 (8人)	次のページ参照

II. スキー行事の実施にあたって

レクリエーションや学園祭、体育大会などを通して、仲間づくりを進めてきたわけだが、その徹底のためにも、中2で校外宿泊行事を実施したいと考えた。本校では、学校行事縮少の方向が確認さ

れており、入学期の一泊行事と中3の水泳訓練のみが制度化されている。ただ、一泊行事は入学まもないことで、生徒の自主性を育てるには、年齢的にも時期的にもムリがある（教師主導の仲間づくりになる—これでよいのだが）。また、水泳訓練は“訓練”という側面が強く、各種ルールを生徒が創造的に決定していくという点では制約も多い。以上のような理由から宿泊行事を考えていたところ、平塚先生より“クロスカントリースキー”案が出され、担任、保護者、生徒の意見の一致をみた上で、職員会議に諮られ決定した。また“クロスカントリースキー”は①“冬の自然—とくに雪”に親しめる。②経費も安く“ゲレンデスキー”より安定で体力もつかう。③滋賀県比良山系に適当な施設（朝日の森自然研修所）がある—近くて経済的—。などの点でメリットも多く、宿泊行事として適当と判断した。生徒自身のとりくみは、学園祭の終了後から本格化した。実行委員会にHR代表を含むかどうかで議論が白熱したが、結局HR代表と選挙で選ばれた委員を含む実行委員会が誕生し、行事のとりくみの“中心”となっていった。

＜表2＞ スキー行事の取り組みについて

	教 師	実行委員(H R)委員会	HR・道徳の時間	P T A・広報
62年 10月 まで	2.10 父兄アンケート配布—集計 2.27 現地下見打合せ 3.19 職員会議承諾 10.20 打合せ(大阪)			7月20日ごろ ¥10,000徴収 (面談時)
11月	下旬 くつサイズ表を送る	17日 実行委員選出の原案 24日 実行委員決定	13日・全校レクの反省アンケート発表 ・スキー行事要項配布 ・くつサイズ表記 20日 実行委員の選出について 26日 班わけについて(クラスの枠) 27日 クラスでの班の決め方	26日 新聞No 1 27日 新聞No 2
12月	17日 服装についての原案発表 24日 ウインドブレーカー注文(希望者分)	12日 アンケート配布 13日 アンケート集計 (おやつ・レク・食事について) 20日 しおり作成ごろ 開始	3日 各係のリーダーについて(実行委員を1人追加) 4日 班で係の決定 14日 おやつ・服装・部屋わりの生徒希望をまとめる、 16日 係ごとの集会(アンケート結果を参考に) 17日 部屋わりの決定 各係からの連絡	3日 新聞No 3 4日 新聞No 4 14日 新聞No 5 17日 ウインドブレーカー 希望調査とPTA予定プリント 23日 ¥10,000徴収ごろ (面談時)

	教 師	実行委員(H R) 委員会	H R・道徳の時間	P T A・広報
63年 1月	8日 服装おやつ最終決定	10日 ウインドブレーカー配布 26日 雪のないプロを検討 29日 雪のないプロ決定	9日 服装最終案決定、カメラ、ドライバーの持ち物について	15日 健康調査表ごろ 配布 19日 学年P T A (保険証コピー) (健康調査表回) 収 健康管理プ リ配布 26日 新聞No 6
	14日 会議で要項説明		14日 おやつとトランプ問題について	
	18日 ウインドブレーカー費用送金		21日 レク、入浴美化より説明	
	22日 しおり原稿印刷		22日 しおり作成(H Rで)	
	26日 雪のないプロを検討		28日 係ごとの集会(打合せ)	
	29日 引卒者打合せ健康診断(生徒)		29日 各係からの連絡 30日 歌集作成(H Rで)	
2月	上旬 会計請算 中旬 記録の整理	10日 先生と学年へ までの意見まとめ	4日 アンケート 5日 係ごとの感想・反省	上旬 写真申込 V T R編集

＜表3＞ ゲレンデスキーと歩くスキー(クロスカントリースキー)のちがい

ス キ ー 名	発 祥 の 地	用 具
(ゲレンデ)スキー	アルプス山岳(アルペンスキー)	板の巾が広く足首、かかとの固定
歩くスキー(クロカンスキー)	北欧(ノルディックスキー)	板の巾がせまく、つまみだけ固定

Ⅲ. 雪がないなかでの「スキー」行事

準備は順調に進んだが(表2)、最大の誤算は、暖冬で雪がないということであった。急きょ無雪時のプログラムを組む必要に迫られた。研修所員の方の力をお借りして、何とか「つじつま」をあわせたものの、後述するようにプログラム上でいくつかの問題点を生むことになった。あらゆる事態を予測した事前の準備が必要であったと反省している。

以下、行事中の実施プログラムと予定していた計画プログラムを記す。

＜表4＞ 中2スキー行事活動プログラム

		活 動 内 容	歩くスキーの予定
1 日 目 (1/31)	昼のプログラム (13:00～16:00)	《樹木観察ハイキング》 班ごとにハイキングマップを持って2つの好きな方のハイキングコース(山か谷)を選んで、樹木名をしらべる。回答はマップの裏の樹木探索表に記入する。(ヒントあり。)	《基本練習》 広場にて直進、カーブの曲がり方やゆるやかな坂の登坂、下滑練習 (講師4人の予定)
	夜のプログラム (19:30～21:00)	《栃木村の話》 《歩くスキーの説明とビデオ見学》	同 左

		活 動 内 容	歩くスキーの予定
2 日 目 (2/1)	朝のプログラム (9:00~12:00)	《雪合戦》 クラス単位で雪合戦 《雪像作り》 班ごとに作品作り、かまくらやドラエモン像など	《ツア-》 林道を通してツア-に出て所々で雪山の観賞と観察 天気よければ、ツア-の途中で運んでもらった弁当を食べる。天気がよくなければ、セントラルロッジにもどって昼食を取る。
	昼のプログラム (13:30~16:00)	《スコアオリエンテーリング》 限られた時間内(14:30~15:45)にコンパスとOLマップを持ってできるだけ多くのポイントチェックを行い、得点を競う。得点は近いポイントほど低く、山の頂上など、遠いポイントほど高い。実際は走る雪山登りでたいへんつかれた。	
	夜のプログラム (19:00~21:00)	《オリエンテーリングの成績発表》 《レクリエーション》 ウルトラクイズ ジャンケントーナメント 歌 原田先生〇〇才誕生パーティ	《レクリエーション》 ウルトラクイズ 歌
3 日 目 (2/2)	朝のプログラム (9:00~12:00)	《森林作業の見学と丸太を切る実演》 年輪の話(森林環境研究所員の説明) 人による枝打ち作業と間伐作業(3本)の見学 間伐した木を一クラス一本わりあてて、班ごとに分けて一人一人分のこぎりで切断。自由な大きさに切っておみやげに	《クロカンスキー》 栃木村ゴルフ場の3km、5km、10kmの3つのコースから走力にあわせて選りコースを縦断する。 終了後、修了証をもらう
	費 用	12,083 円	約 16,000円(貸スキー代) 講師代)

いくつかの問題点は出たが、急造プログラムにもかかわらず、生徒はかなり積極的に行事に参加したし「ハイキング」や「雪像づくり」「スコアオリエンテーリング」などの各種とりくみでは、班員同士の相互協力がかなりみられた。男女間の助けあいがかうまくいったところもあった。仲間づくりという点からは、かなりの目標が達成されたといえる。また、これらのとりくみの実施にあたっては、所修所員の受称「トンボさん」の企画力・指導力に助けられることが多かった。

IV. 行事の小括 — アンケート結果より

生徒のアンケート結果及び感想をもとに、スキー行事についての簡単な小括を述べておきたい。

まず、行事については、生徒が全体として5段階中4.0の自己評価をしていることから、まずまず良かったと受けとめられている。「ハイキング」や「木の伐採」の評価が低かったのは、急ぎょ決定したことや炊飯計画が変更になったことによると思われる。

また雪上レクも、雪合戦のルールがかうまくいかず、準備不足がたたった。雪像づくりは好評で、「すべり台」「かまくら」「イグルー」「木口君の像」など数々の傑作が生まれた。

ルールについては、就寝時間をのぞいておおむね守れたようである。これも、自分達で話し合っ
て決めたこと（就寝時間は別）が大きかったと思
われる。

以下、生徒の声を列挙し、まとめと今後の課題
にかえたい。

<班 長>・健康調査表の提出時間が早い
・就寝時間を班長が責任をもつのは
無理

<食 事>・A、Bの当番に分ける必要はなか
ったのではないか
・席にみんなつくと、すぐ号令をか
けてほしかった。

<入浴美化>・ねぶくろとシーツ係を別につく
てほしかった
・そうじがたいへんだった、ミーテ
ィングはいやだった。

<レ ク>・計画をちゃんとすべきだった
(雪合戦)

・歌集はみんなでやればよかった。
・スキーがなかったので楽だった。

<実 行 委>・実行委員だけでやろうとしすぎた。
・先生におされっぱなしだった。

<自 由 に>・おやつを食べる場所、服をもっと自由に。
・ゲーム、ラジオ、ウォークマンなどもっと

<ゆとりを>・自由時間をふやす、就寝時間をおそく
・ゆとりあるスケジュールを

<調 整 を>・係の人数をちゃんと、係の数をふやす

<実 行 委>・先生は生徒の話し合いに、口をはさまない
・また、実行委員をつくった方がよい<中3水泳訓練>
・無雪時のスケジュールなど、事前にもっと丁寧に

<アンケート結果>

生徒の自己評価の平均点(5点満点)

1. 行事は楽しかったか (105名中)

(1) 全体として	4.0
(2) ハイキング	2.8
(3) 雪上レク	3.4
(4) オリエンテーリング	3.7
(5) ウルトラクイズ	3.7
(6) 木の伐採	2.8
(7) 食 事	3.8
(8) キャビン生活	4.2

2. ルールは守れたか (105名中)

(1) 全体として	4.2
(2) 集合時間	4.4
(3) 就寝時間	3.0
(4) おやつ(値段)	4.5
(5) おやつ(場所)	4.3
(6) 持物(ゲームなど)	4.7
(7) 服 装	4.8
(8) キャビン生活	4.3

V. 感想文より

歩くスキー行事感想文
 と、ても楽しい(笑)毎日
 増澤 里奈
 雪が積もるなかつたけど、中々充実した毎日だった。
 それにしても、一日目、二日目とも、オリエンテーションは何ともいえないから、一日目は少しおぞれまじりの雨が降るし、くつは「布」だったし、悲慘だった。二日目からは、くつはドロドロ、ひちよひちよのまま走らないといけないし、でも二日目のオリエンテーションで「五位」だったのは、やっぱりうれしい。くつが冷えたまま、まあ、たかいたかあった。
 一番うれしかったのは、「ウルトラクイズ」が成功したこと。正直言って、失敗するかと思ってた。雪合戦は、ルールがころころ変わるからわけわからめになつて失敗したし、二日目のレクリエーションでつかれていたら、時

ら、在当にどうなるかと思つた。
 敗者ふ、かつの、ほうまきクイズのとき、わりかしみんな真剣になつて走ってきたとき、「あ、こくま」として、みんななかなか、ノックされて、ありかとう、ビヤンナト、ナメントのとき、応援する人もいないのが、ホーンとして、いる人や、寝ている人がいたのは、少し残念だけど、私達のへい、私達は、クの実行委員)計画があまか、たか、な、と、反省。なんにしても、もりあがった、と思う途中でのどが痛くて、声かでなくなつた。ただ、なんだか、それだけがんばれたんだなと、今では、いいように勝手に、解してくしている。
 もし、今度また、あることがあつたら、司会者じゃなく、する側に、なつておたいな(へても、もう一回司会者をしてほしいような気がする)

スポーツルール (I)

— “LOVE”、その解釈をめぐる —

奈良 重幸

1. はじめに

テニスのスコアのなかに“LOVE”という言葉があります。私ごとながらテニスをはじめた当初は、このLOVEに馴染めず、口にするたびに恥かしさを覚えたものです。誰はばかることのない審判のときですらそうでした。

ボールを追いはじめて5年、10年となりますと、それもすっかり心地良い響きにかわり「テニスは愛（LOVE）のスポーツだ」、「Zero や Nothing などという冷たいコールと違い敗者へのいたわりの表現だ」などと恥かしげもなく口にするようになりました。

その間、⁽¹⁾本当にLOVEはこれでいいのだろうかと思いつき首をかき思い悩むことも幾度となくありましたが動きのさいのめくるめく感動、一汗かいたあとの爽かさにかまけ「LOVEはやはりLOVEなんだ」との解釈（納得）に至りました。

それが、この2年ほどテニスから離れ、“不惑”をむかえるこのごろになって「一体、あのLOVEは何だったのだろうか」との思いしきりでLOVE総括への思い止まず、文献調べ、図書館通いが始まりました。

2. ジュ・ド・ポーム

近代テニスの先行形態としてしばしばジュ・ド・ポーム（Jeu de Paume）があげられます。このジュ・ド・ポーム（以下ポーム）は、11世紀にフランス修道院ではじまり、やがて王侯・貴族の好むところとなり、16世紀はじめから19世紀末にかけ全盛期をむかえたといわれています。現在でもポームは時代の波に洗われ、もまれながらも命脈を保っています。

さて、このポームの先行形となると諸説紛紛、どの地方のどの遊戯（球戯）がポームに引き継がれたのか、私など皆目、見当が付きません。H. ギルマイスターのようにポームのルーツにカアツェン（Kaatsen）とジュ・ド・タミ（Jeu de Tapis）をあげ、さらにこの2つの先行形態を古代ローマのトリゴン・シュピール（Trigon Spiel）に求める人もいれば、稲垣正浩のように、Dr. シュトロマイヤーの考え、およびH. ギルマイスターのテニス用語の言語的分析からの結論に反対しバスク民族のペロタ（Pelota）こそポームの先行形態と視座をペロタに定める研究者もいます。⁽²⁾



3. スコアリング

論をテーマに近づけるべく軌道修正致します。

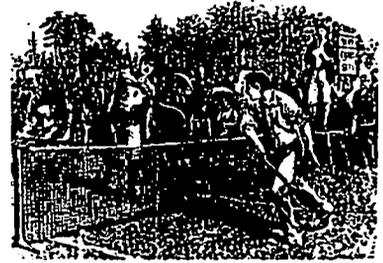
近代テニスのルールが確立されたのは、1877年創設された全英庭球選手権大会（現在のウィンブルドン大会）からである。その後、部分的な改正はあったが、コートの規模、カウント法など、その大筋は100年余りにわたって大切に継承されている。⁽³⁾

と「テニスを楽しむ」の著者、岡田瑛はいます。
ここでいうカウント法とは近代テニス特有の

<ラブ (LOVE)> カウント0のとき
<フィフティーン (Fifteen)> 1ポイントとったとき
<サーティ (Thirty)> 2ポイントとったとき
<フォーティ (Forty)> 3ポイントとったとき
<デュース (Deuce)> 3ポイントずつ両者がとったとき、すなわち、40-40になったとき⁽⁴⁾

のことです。

それでは、その先行形態といわれるボームではどうだったのでしょうか。寒川恒夫は、ボームの「得点は当時の六十進法を採用して、15・30・45と数えられた」、楠戸一彦はボームでは「攻撃に成功するとポイントとして15点が与えられた。得点は15・30・45と数えられ、どちらかが45点に達するとコートを変えて試合が進められた。勝敗の決定方法は不明であるが<ジュース>や<チェイス>の規則もあった」といい、前掲の岡田は⁽⁶⁾



テニスにはさらに前史というべきものがある。13、4世紀からフランスの王侯や宮廷貴族の間にはやった（修道院では11世紀から——筆者註）ボームという、てのひらでボールを打ちあう遊びが源流であるというのが定説になっている。ギリシア・ローマ時代にも行なわれたといわれ、0（ラブ）、15（フィフティーン）、30（サーティ）、40（フォーティ）というカウント法はそのころの賭けの単位ではないかという説がある。⁽⁷⁾

といます。

ボームのスコアリングに関して寒川と楠戸の論にはゼロ（0）およびLOVEの言葉はみあたりません。岡田はフランスのボームもさることながら、ギリシア・ローマ時代に既にこの類いの遊戯（球戯）には0（ラブ）のカウント方法があったようだとしています。

ところで、ボームより古いとされるカアツェン（Kaatsen）、ジュ・ド・タミ（Jeu de Tamis）、それにトリゴン・シュピール（Trigon Spiel）でのスコアリングはどうだったのでしょうか。

この3つの遊戯（球戯）に関しては一通りしらべはしましたが判然とした手掛りは得られません。最初の意気込みもどこへやら、私自身すっかり消沈してしまいました。ですから、私の今回の「LOVE」論はボームが盛んに行われた時代に立ち、過去を垣間み、そして想像するという極めて大雑把なものになっています。

4. ゼロ(0)、およびLOVE

テニスにおいて、ゼロ(0)とLOVEは語源的にはどのように扱われているでしょう。代表的なものを示してみますと

- ① フランス文字の中にLuff という Nothing の意味の言葉がある。これがLoveに転化した。
- ② テニスコートでゼロのスコアるとき卵形の丸をつけた。すなわち、卵のことをフランス語でl'oeuf (Egg) といっ、やはりゼロのことをいっている。
- ③ 英語のラブにゼロの意味があるという説。ただ、この表現法は、971年から使われた表現というから、テニスにこれをあてはめるのはとび離れている。
やはりテニスでの「ラブ」という字とか意味は、卵形の「0」をスコアのゼロのとき用いたのを「l'oeuf」からLOVEのスコアになったとかがえるのが一番テニスにかなった解釈であろう。⁽⁸⁾

- ① 0が卵の形に似ているのでフランス語で<卵>、つまり<ロエフ、l'oeuf>と呼ぶようになり、イギリスでLoveに転化、習慣化。
- ② <ラブ、Love>にはもともと<Nothing>とか<Zero>の意味があり、現在はその死語になっているにすぎないという説。したがって、当時のイギリス人はフランス語の<ロエフ>を<ラブ>と翻訳することに何の抵抗もなかったとするものである。
- ③ クリケットでもバットマンの得点が零点に終わったときは<あひる、duck>と呼ぶ習慣があるので<ラブ>はやはり<卵>=<ゼロ>のおき換えであろうとする説である。
これらの3つの説は、対立するものではなく、むしろ相補的な関係にあり、<ラブ>という英語表現がいずれも<ゼロ>のイメージにつながっていく点で納得できる説明である。⁽⁹⁾

とあります。

いずれも読み手を唖らせる内容ですが、書き手自らが3つも説を挙げている(見方をかえれば良心的)ごとく、どこかスッキリしない部分も残しています。

例えば、卵一つとってもそうです。卵を意味するフランス語l'oeufが英語のLoveに転化したということは、ヨーロッパの時代背景を考えれば容易に想像はつきます。が、どうして卵をゼロ(0)の意味でカウントの中にとり入れる必要があったのかということになると単に形が似ているという説明のみで、もう一つはっきりしません。

「零の発見」の著者、吉田洋一は次のようにいいます。

エジプト、ギリシア、ローマと時代や場所は変るとともに、形や構造の上に多少の相違はありはしたが、これらの国々では計算は多くの場合、算盤でおこなわれたと伝えられている。……(中略)……。この間、幾千年の時は流れた。しかも、ついにこれらの国々においては位取り記数法は発見されなかった。いいかえれば、零はついに発見されなかったのである。……(中略)……。多くの学者は既に6世紀のころ、インドでは位取り記数法が行われたのではないかと推定している。……(中略)……。13世紀も終りに近づくにしたがってイタリアの諸都市においては、インド記数法がようやく日常の用に供せられたらしい。その一つの証跡をわれわれは1299年に発せられたフロレンス政府の布告においてみることができる。

………… (中略) ……………。こうした銀行業者の中には、この世紀の終りごろに至って簿記の記入にインド記数法を採用するものが現れてきた。⁽¹⁰⁾

となりますと、ポームはフランスの修道院で11世紀から、そしてゼロ(0)はイタリアの諸都市(主としてフロレンス、つまりヴェネツィアなどのイタリア北部の都市 — 筆者註)で13世紀終りからということになり、「ゼロ(0)の数字より卵が先」ということで形の類似という説明には矛盾が生じます。

寒川や楠戸のポームのスコアリング15・30・45は、この点をみこしてのことでしょう。岡田の0・15・30・45の0が数字のゼロを意味するとしたら、この方法は少くとも13世紀末以降のルールになります。いや、もっとのちのことかも知れません。なぜなら、フロレンスの銀行業者(商人)レベルの使用語を身分の高い僧、王侯・貴族が即座に取り入れるはずはないからです。いわんや自分達のステータス・シンボルともいえるポームという球戯の中においてをやです。

ただ、岡田はギリシア・ローマ時代からカウント法に0(ラブ)があったと記していますので岡田のいう0は空位をあらわす数字ではなく、その他の例えば、それこそ卵をあらわす記号の0かも知れません。何しろ「数字のゼロ(0)より卵が先」だからです。



因に、卵(l'oeuf)の同義語とされている以下の言葉の(文字としての)世の中への初出年は〔 〕の通りです。

Love〔825年〕— Nothing〔888年〕— Duck〔967年〕— Egg〔1000年〕
— Luff〔1205年〕— (No)Score〔1400年〕— Zero〔1604年〕⁽¹¹⁾

5. ab ovo

これまで他の人の説ばかりを俎上に載せてきました。これより、LOVEに関する私見を述べてみたいと思います。

インド=ヨーロッパ語族の中のゲルマン系のイギリス人、およびドイツ人、ラテン系のスペイン人、フランス人、それにイタリア人のいずれの言語にも全く同じスペル、同義で ab ovo という言葉があります。

英語： ab ovo …………… そもその、初めから⁽¹²⁾

ドイツ語： ab ovo …………… 初めから

スペイン語： ab ovo …………… 最初から、太古から⁽¹³⁾

フランス語： ab ovo …………… 初めから⁽¹⁴⁾

イタリア語： ab ovo …………… 最初から、事のおこりから⁽¹⁵⁾

どうしてこういうことが起るのでしょう。つまるところ、いずれも昔ローマ地方で使用された言語で今のイタリア語等の祖語といわれるラテン語に源を発しているからです。言葉ひとつとっても当時のローマの力が知れようというものです。

さて、ここではイタリア語の ab ovo に注目し、論を展開します。辞典をひもときますと ovo として — (名詞)、(男性名詞)、卵のこと、さらに (uovo の変形) — との説明があります。uovo をひきますと — uovo： (名詞)、(男性名詞)、鶏卵、 — とあります。参考までに両語に定冠詞をつけますと ovo は l'ovo に uovo は l'uovo になります。

ab は「～から」と解せばいいでしょうから、「最初から」を意味する ab ovo は直訳すれば「卵

から”という語義になります。それではなぜ「最初から」が「卵から」なのでしょう。

「独和言林」によりますと「ローマ人の食事は卵を食うことから始まった故」とあり、「新コンサイス英和辞典」によりますと「古代ローマの正餐で、最初に出るのが卵であったことから」とあります。卵はどうやらローマ人の正餐ではオードブルの役目をはたしていたようです。⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾

弓削達はローマ人の食事について次のようにいいます。

ケーナ（ローマの晩餐 — 筆者註）は、ふつう3コースから成っていたが時には7コースもの贅沢なものがあった。……（中略）……。コースの第一はプロムルススまたはダスターティオと呼ばれた前菜で、蜜割りワイン（ムルスス）、卵、オリーブの実、腸詰め、萵苣などであった。7コースの場合はこれに続いて、3つのアントレと2つの焼肉がくるが、3コースの第2はケーナ・プリーマと呼ばれ、魚鳥類、獣肉を主とした料理でここで金持は珍味を競った。最後のケーナ・セクンダはいわばデザートでそのまえに食卓がきれいに片付けられた。ここではリンゴ、ザクロ、ハタンキョウ、ナツメシュロの実などの果実と麦粉をミルクと油でこねて焼き、これに蜜をかけた甘い菓子などが出された。プロムルススには卵、ケーナ・セクンダにはリンゴが不可欠だったので、「初めから終わりまで」という意味で「卵からリンゴまで」という言い方が生まれた。⁽²⁰⁾

ところでローマ社会においては、これら晩餐に遊戯（球戯）はつきものだったといえます。1日の主要な食事を意味する晩餐がもちろん正餐だったのですが当時のローマの人々の晩餐は昼下がりで、ないし4時ごろでしたから明るさからいっても遊戯（球戯）は十分に可能だったというわけです。



以上のようなことから私は「最初（から）」を意味する「卵（から）」という言葉が晩餐の前に行われる遊戯（球戯）に運動用語としてとり入れられた。

そして、その後の経緯は不明ですが、これがやがてポームにとり入れられ近代テニスにひきつがれたとみなしています。

運動用語としての変遷をいえば、ovoがラテン系の人々の言葉 — 例えば、イタリア語なら l'ovo、もしかしたらフランス語では前述の3つの代表的な説に出てくる l'oeuf かも知れません — になり、やがて英語（Love）に転化していったのでしょ⁽²¹⁾う。

LOVEはゲーム開始時の「最初（から）」を意味する合図（コール）になりました。ですから〔0-15-30-40〕のスコアリングは書き改めますと、〔最初（初め）//15-30-40〕ということになります。これは後に遅れてヨーロッパ世界に入ってきた数字の0とは本来、何ら関係ないものです。何時のころからかわかりませんが、アラビア数字がヨーロッパ中に滲透した段階で卵の形「0」と数字の「0」との間に混淆、および同一視が起こったと考えられます。

6. おわりに

いつものことながら過去の点と点を無理矢理むすびつける操作に腐心しました。何とか結論は出しましたが、牽強付会の説との誘りは免れないところです。一足飛びに結論を出したがる私の悪い癖が影響しています。まだまだ今回のこの仮説にも課題が山積しています。例えば、イタリア語の l'ovo とフランス語の l'oeuf とは歴史的にどうつながるのか、ある



いはアラビア数字の0がヨーロッパに定着してからも人々は何故、卵のLoveにこだわり続けたのか— それよりも、何よりも致命的といえる裏付け資料の乏しさ、論理の飛躍— 等々です。

今後、さらに勉強を重ね、内容を深めていく所存です。自らに叱咤激励の意を込めて、乞う、ご期待!!とさせていただきます。

注

- (1) 稲垣正浩、「テニス」—「スコアリングの方法と歴史的背景」—（「最新スポーツ大事典」、日本体育協会監修、大修館書店、p. 841、1987年）
- (2) 稲垣正浩、「テニス史研究の新たなる地平を求めて」（「GAYA・GIST」、奈良教育大学、p. 23-4、1987年）
- (3) 岡田瑛、「テニスの発祥」（「テニスを楽しむ」、岩波新書、p. 16、1981年）
- (4) 結城肇、「テニス」—「テニス競技」—（「最新スポーツ大事典」、日本体育協会監修、大修館書店、p. 832、1987年）
- (5) 寒川恒夫、「球戯」—「中世の球戯」—（「最新スポーツ大事典」、日本体育協会監修、大修館書店、p. 209、1987年）
- (6) 楠戸一彦、「中世社会のスポーツ」—「中世社会のスポーツ」—（「最新スポーツ大事典」、日本体育協会監修、大修館書店、p. 797、1987年）
- (7) 岡田瑛、同上書、p. 16
- (8) 福田雅之助 他著、（「図説テニス事典」、講談社、p. 27-8、1981年）
- (9) 稲垣正浩、「テニス」—「スコアリングの方法と歴史的背景」—（大修館「同上書」、p. 841）
- (10) 吉田洋一、「アラビア数字の発見」（「零の発見」、岩波新書、p. 11-2、1939年）
- (11) 「THE COMPACT EDITION OF THE OXFORD ENGLISH DICTIONARY」（OXFORD AT THE CLARENDON PRESS、1971年）
- (12) 佐々木達、（「新コンサイス英和辞典」机上演、三省堂、p. 1-2、1976年）
- (13) 佐藤通次、（「独和言林」、白水社、p. 18、1986年）
- (14) 高橋正武、（「西和辞典」、白水社、p. 6、1986年）
- (15) 鈴木信太郎、（「スタンダード仏和辞典」、大修館書店、p. 8、1957年）
- (16) 池田廉 他著、（「伊和中辞典」、小学館、p. 7、1983年）
- (17) 池田廉 他著、（「同上書」、p. 18）
- (18) 佐藤通次、（「同上書」、p. 18）
- (19) 佐々木達、（「同上書」、p. 1-2）
- (20) 弓削達、（「歴史と史学」、出書房新社、p. 50-1、1987年）
- (21) このことを示唆するものとして、谷栄一郎はその論「英語におけるアクセントについて」（奈良県立短大商経科、研究季報、1983年）、で「Anglo-Saxon 民族がブリテン島にやってくるまでにローマ人から借用した語については全く疑いがない。……（中略）……。Anglo-Saxon 民族の侵入により、ブリテン島でのローマ文化は絶たれたのであるが597年のAugustinusの布教以来、主としてキリスト教用語を中心としてラテン語の借用が始まった。p. 375」、そして「1066年のNorman Conquest以来、フランス語が公用語となり、14世紀後半に至る約300年間宮廷で議会で法廷で英語は全く話されないという異常事態になった。このフランス語が英語に与えた影響は甚大で文法体系のゲルマン語的特徴が失われるということとはなかったが語彙的には英語のフランス語化が著しく進んだ。p. 359」、さらに「ルネッサンス期以来、古典語の学習が盛んにな

るにつれて歴大な数のギリシア語、ラテン語が英語に入ってくるようになったが、一方では既に借入していたラテン系借用語の修正も行われるようになった。 p. 376」といいます。

挿入図

- ※ F. K. Mathys、(「Die Ballspiele」— Eine Kultur— geschichte — Harenberg、S. 10、S. 50、1983年)
- ※ Konrad Gruda、u. a. m.、(「Duell auf Distanz」— 55 Lese — Abenteuer für Tennisfreunde — Limpert、S. 60、1985年)
- ※ Anne Millard、(「Das war Rom」— Ein Bild des Alltags zur Blütezeit des Römischen Reiches — Otto Maier Verlag、Ravensburg、S. 28、1981年)

スポーツルール (Ⅱ)

— “トラック走”、その回転方向をめぐる —

1. はじめに

新聞の運動欄には時折、興味をひく記事が載ります。昨年（1987年9月21日）の毎日新聞の夕刊に「スローカーブ」と称して掲載されたコラムも私にとってはその一つでした。

前回のこの欄で「野球の走者はなぜ、時計と逆回りに走る？」と蛇足を加えたら一読者から封書を頂いた。「陸上競技のトラックでも時計と逆回りやないか。アホなことをフシギそうに書くな」というおしかりだが、あの小生の文の根底には、実はすべての競技の基礎ともいべき陸上トラック走がなぜそうなのか、という疑問があった。

陸上専門の博識の運動部にただしても確たる定説は聞けなかったし不勉強で多くの書物をあさったわけではないのだが、ただひとつもっともらしいのは「人間の心臓の位置に関係がある」という説。

登山者が山中で濃霧や猛吹雪に出合ったとき、前進を強行すると知らないうちに環状に堂々巡りしていて、気がつくとも元の場所にいるという。専門用語でリングバンデリングというらしいが、この場合、フシギなことに、ほとんど例外なしに時計の逆回りに回っているそうだ。なぜそうなのか、といえば「心臓が体の中心線より左にあるから、`重み`でそうなるらしい」とある。

この説は「野球をもっと面白く見るための本」（ベースボールマガジン社）にも紹介されているが、著者の八木一郎氏は「人間の大多数が右足始動（つまり右利き）であるのにも関係があるかも知れない」とも書いている。とすると、時計回りの多い競馬はなぜ？ 馬は左利きが多いのか！? こんなことを何も知らずに書いている自分が恥ずかしい。(i)

(津)

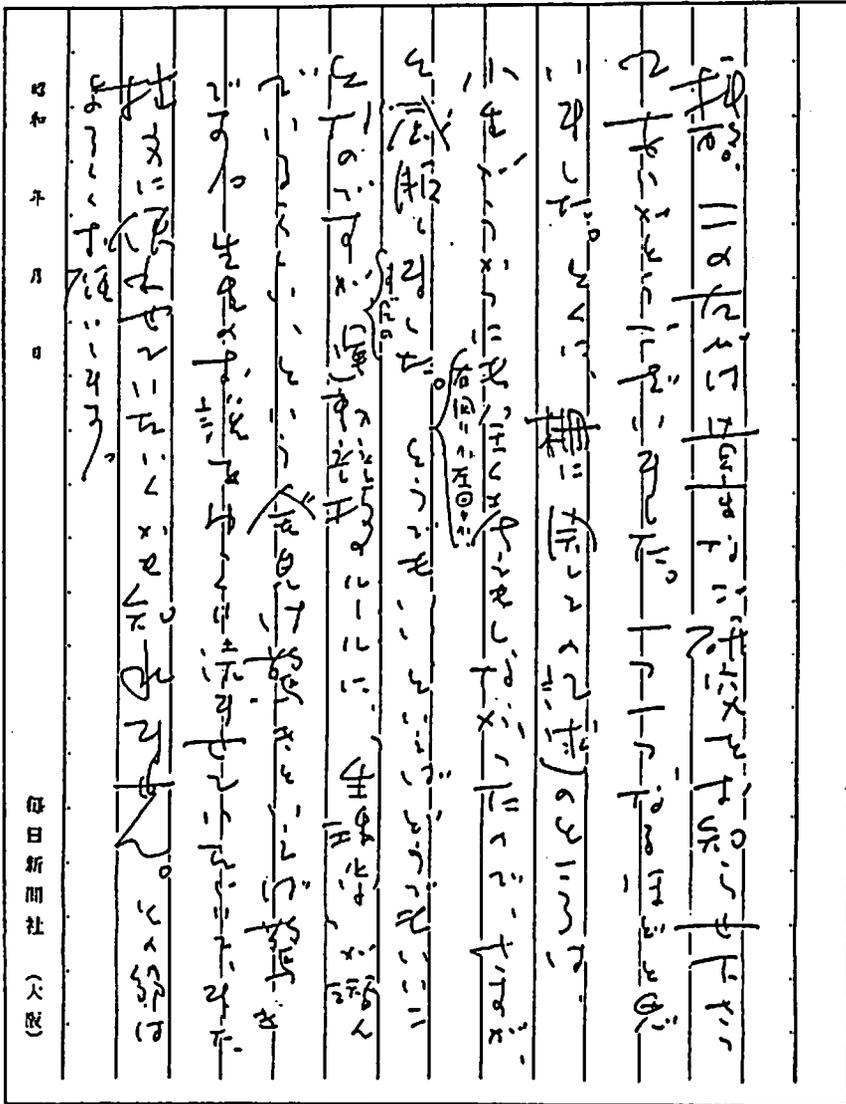
コラムニスト(津)氏は、前回の「スローカーブ」記事への抗議投書に答えるかたちで話を進め「……こんなことを何も知らずに書いている自分が恥ずかしい」としながら、「それでは、競技の基礎ともいべき陸上トラック走は何故、時計と逆回りなのか？」と問題をやんわり読者へ投げ返しています。

興味をそそられた私は早速、便箋数枚に考えをしたため、毎日新聞・大阪本社・運動部の(津)氏宛てに送りました。

このテーマには私自身いささか因縁めいたものがあり、ある時期から数年このテーマと格闘、悩み、考えあぐね、結局のところ、ただ戯れの思いつきをいたずらにふやしたに過ぎないという情けない経緯をもっているからです。

折り返しの手紙が(津)氏からありました。

以下、今回は(津)氏への手紙の内容をベースに、奈良教育大学、稲垣研究室での学習会の折に発表したことがらを加味し — 陸上競技のトラック走は何故、左回り（時計と逆回り）なのか？ — 論を、それも始末の悪いことに戯れの思いつき論を、展開します。



昭和 年 月 日

毎日新聞社 (大版)

2. 陸上競技のトラック走は、なぜ左回り？

「準備運動でさ、君は生徒を右回りに走らせたろう。あれは競馬回りといってさ、普通やんないんだけどね。何か意図があったの？」と尋ねる指導教官。1969年、初夏。私は教育実習生。もう随分古い話になりますが、私にとってこれが今回のテーマとの最初の出合いです。

「済みません《何であかんねん》。ウっかりしてました《そんなもん知るかいな。そんなんやったら、きのう指導案みたとき、さきにゆっといってくれんと。右に回っても、左に回ってもおんなしやんか》」で終ると思いきや、「心臓が左よりにあるからとか、右足の方が概して蹴りが強いから云々」。

それまで大学でおそわってきた、トータルしての割合自由な考え方（例えば）、スポーツルー

ルにこだわりすぎることはない。特に子供にそのまま押しつけることには無理がある——に反する気がして釈然としないものが心に残りました。これが冒頭で私が「このテーマには私自身いささか因縁めいたものがあり……」と述べた理由です。

その後、職を得て、仲間に連れられ競馬通い。パドックでくいているように出走前の馬を観、馬場でのレースを興奮して見つめ、ややあって「大抵の競馬場は右回りやなあ」と実感。競馬への思い入れは、名馬テンポイントの骨折、福永洋一騎手の落馬あたりから冷却……。

閑話休題。スポーツ界、その筋ではこのテーマについて、どのような解釈を下しているでしょうか。一端を「スポーツ雑学事典」に窺ってみましょう。

トラックは、なぜ左回りなのか？

トラック競技はオリンピックをはじめ運動会でもすべて左回りに走る。野球でもベースをまわるのは左だし、自転車のレースでも左まわりだ。現在、右回りがあるのは競馬ぐらいだろう。

なぜ、人間は左へ走るのだろうか。それについての確たる根拠はない。しかし、陸上競技が19世紀後半、英国で発達したころはトラックを右回りに走った例も少なくないのである。1864年から始まったオックスフォード、ケンブリッジ両大学の対抗陸上競技では右回りと左回りの2通りの走り方をしているスケッチ画が残されている。おそらく当時はどちらとも決めつける規定がなかったのだろうし、いまでもイングランドの各種の競技会には右回りの習慣が残っていることから、右回り走行が昔はかなり多かったことがうかがえる。オリンピックでも第1回と臨時大会（ともにアテネ）では右回りだった。

それがなぜ左回りになったのか。その理由として、

- ① 心臓が左にあるため、重心が左にかかりやすい。特に男性は睾丸が左の方が重いので心臓とともによけい重心が左にかかる。
- ② 手は右利きが多いが、踏み切り足は概して左の人が多く、左足で重心を支え、トラックを強く蹴ることができる。

などといわれているが、これは俗説にすぎない。

ただし、1913年（大正2年）に国際陸上競技連盟が創立された際ルールが統一されたが、そのときトラックのまわり方も左回りに規定され、以後、左回りが世界的に定着したのである。⁽³⁾

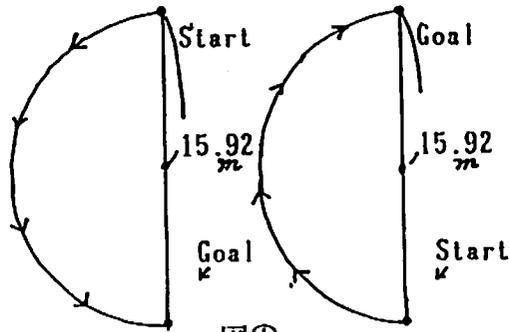
「なぜ人間は左の方へ走るのだろうか。それについての確たる根拠はない」と謳ってはいるものの、もっともらしき理由として俗説①、②をあげられますと、私などはまたしても教育実習の折あの指導教官を苦々しく思い浮かべてしまいます。

詳しいいきさつはわかりませんが1913年に国際的なルール規定がなされ、陸上のトラック走が左回りになったことは事実のようです。

3. 左回りと右回り、実際に走ってみると……

トラックを左回りで走ると右回りで駆けるのとでは、何らかの違いが生じるでしょうか。

去年（1987年）、中学1年生の男子55名に実験の趣旨を伝え、各方向2回ずつ、計4回を走ってもらいました。



図①

図①のように半径が、約15.92mの半円をグラウンドに描き、それを200mトラックの曲走路部(50m)とみなしました。当日の天候は快晴、無風状態。グラウンドコンディションは良好。グラウンドの傾斜によるハンディは無いに等しい状況でした。

その後のアンケート結果は下の表の通りです。

① 左回り、右回り、どちらの平均記録(タイム)がよかったですか。		
左回り	右回り	全く同じ
15人	29人	11人

② 4回走ったうちの最高記録(タイム)はどちら回りのときでしたか。		
左回り	右回り	全く同じ
19人	29人	7人

③ どちらが走りやすかったですか。			
左回り	右回り	どちらも同じ	無回答
27人	17人	8人	3人

④ きき手(卓球のラケットをもつ手)を教えてください。	
左手	右手
1人	54人

⑤ きき足(走り幅とびのふみきり足)を教えてください。	
左足	右足
5人	50人

これをどのように考察・分析すればよいのか資料を前に私は思索してしまいました。実験としてははなはだ不備ですし、これで結論を出すのは無茶というものだからです。それこそ、はしたない発表になってしまいます。しかし、とまれ、走る方向（左回りか右回りか）には個人の得手・不得手があり、記録（タイム）も走る方向によって違ってくるであろうということには合点がきました。

4. 攻めの構えと守りの構え

話を少し脇道にそらせます。ここで論じるのは、人間の生活場面における体勢のことです。が、本道からそれすぎないように話をスポーツに限ることにします。スポーツの場面における体勢に話を絞ります。体勢よりも構えといった方が良いかも知れません。

このスポーツ場面における構えには大きくわけて、

〔●攻めに徹する構え

〔○守りを重視した上で、機会があれば攻めに転じる構え

の2つがあると私は考えています（以下●、○とします）。

この分類は、私自身のバドミントンやテニスの実践経験からきています。●と○の違いの目安は肩の位置です。私のように手が右ききの者ならラケットを持ったときに、●では左肩が前、右肩が後ろ、○の場合は右肩が前、左肩が後ろになります。左ききの人がラケットを握ると、●は右肩が前、左肩が後ろ、○のときは左肩が前、右肩が後ろというふうになり右ききとは反対になります。状況説明の例として、生憎バドミントンとテニスの適当な挿し絵が身近に見当たりません。かわって本校の図書館で図②を見つけました。

図②



この図でいえば、上段の構えが●に該当し中段・下段の構えが○に相当します。ただ、剣道では個人のきき手に関係なく右ききの者に左ききも合わせるようなところがあって、構えは同じですから例としては不適当と思われる。とはいうものの、傍らの説明文、

構えには、それぞれの構えに適した心構えがあり、この両方が一致したときに、本当の強さをしめすのです。たとえば中段の構えは攻防一致の構えといい、相手が攻撃してきた場合は、そのまま防禦の構えとなり相手にすきができなかった場合は攻撃することができる、攻撃と防禦の両方をおこなった構えです。

上段の構えは攻撃の構え、または火の構えといい、はげしい攻撃的な精神を必要とします。

下段の構えは防禦の構えといって、相手の動きを監視しながら、必要に応じて攻撃にかわる心構えが必要です。⁽⁴⁾

を読んだときは思わず快哉を叫びました。

5. 左側通行（右ききの世界）

さて、行き掛かり上といっは何ですが、話が剣道に及びましたのでこれで続けます。剣道で●と○の構えは、場に応じ臨機の処置がとられるのですが、さらに●、○に左右の動きが加味されま

すと、有利の立場をという意識が働き、●では左方向へ、○では右方向への移動が多くなされます（多くとしましたのは、剣道の動きには相手次第というところもあるからです）。場所を路上に移し、このことを考えてみますと、●は道の左側に位置しようとし（左側通行となり）、○は右側に位置しようとする（右側通行となる）といえます。

このあたりを樋口潜之著「日本風俗の謎」にみてみましょう。

大体において人間は右ききですから、当然、武器は左の方にさげてさすのが便利です。ピストルなどはもちろん右ですが、長さを持った武器の場合、ことに日本では刀が主体ですから左にさすのは理にかなっているのです。刀はそっているため、あのカーブを利用して抜くわけですから、左横にささざるをえないということなのです。これが左側を歩く決定的な理由になっているのです。

たとえば右側を歩くとします。すると、刀の鐙が後ろのほうに出ていますから、すれ違う時に鐙がぶつかり合う危険性がでてくる。相手の武器を傷つけたり、衝撃を与えることは、これは一種の侮辱の意味をもつわけです。

このことをさけるためと、もうひとつは、相手を警戒する必要があるために刀は左にさします。もし敵が自分の左側から来た時、左に武器があるとなかなか抜けません。だが、自分が左側の端にいて、相手が右側から来た時は、すぐさま刀を抜いて攻撃できます。ということで、これらのことが考慮されて左側を歩く習慣が定着したのです。

江戸時代からは作法として、左側を歩くことがきめられてきました。⁽⁵⁾

ニュアンスは違いますが、右ききの者が多い世界では攻撃をしかける場合は左側通行をした方が有利だといっています。（私は●ではこの考えですが○のときは右側通行になると考えています）。世界の人々の傾向を調べたわけではありませんが樋口がいうように「大体において人間は右きき」というのは信頼できるでしょう。⁽⁶⁾

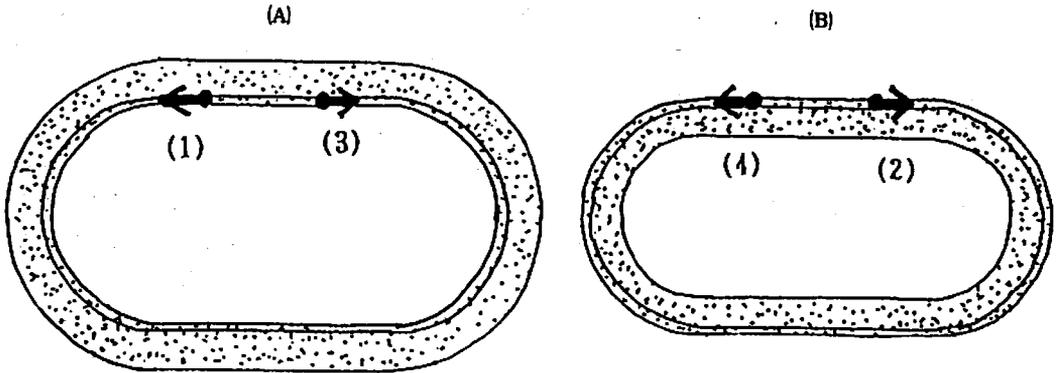
繰り返しになりますが、世の中の大多数を占める右ききの世界では傾向として、攻撃だけを考えればよい場面においては●をとり、道の左側を通行する。そして、防禦を考慮した上での攻撃となったら、○をとり道の右側を通行する、と私は結論付け、さらにこの有利な位置を占めようとする意識は、闘いの（技術）の場から普段の生活の（心理）の場にまで幅広くおよぶと解釈しています。

6. 右回り、左回り

剣道絡みで道の左側通行、右側通行のことを話してきましたが話を本道に戻し、ここではフィールドを囲む道ともいえる陸上競技のトラックに言及します。

またまた例え話で恐縮ですが、ランナー（Rとする）が図③のようにトラックを1周（400m走）するとします。もちろんRは世の大多数を占める右ききです。現行の国際ルールにとらわれず、しかも道の左側通行、右側通行の考えを適用し、400m走の条件を満たすとしたら、Rには次の(1)～(4)の4種類の走りが可能です。

図③



〔トラックの  上を走ると 400 m とする〕

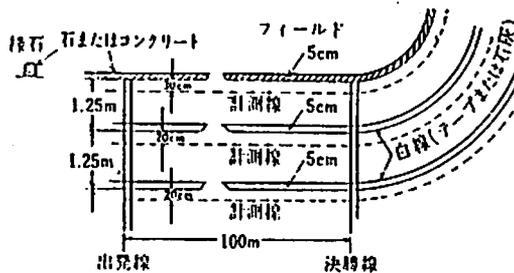
- (1)は 400 m 走、トラックを左側通行、左回り、トラック 1 周最短コース
- (2)は 400 m 走、トラックを左側通行、右回り、トラック 1 周最長コース
- (3)は 400 m 走、トラックを右側通行、右回り、トラック 1 周最短コース
- (4)は 400 m 走、トラックを右側通行、左回り、トラック 1 周最長コース

それに前述の構えを拡大解釈してここに当てはめると、

- (1)は 400 m 走、トラックを左側通行、左回り、トラック 1 周最短コース、●
- (2)は 400 m 走、トラックを左側通行、右回り、トラック 1 周最長コース、●
- (3)は 400 m 走、トラックを右側通行、右回り、トラック 1 周最短コース、○
- (4)は 400 m 走、トラックを右側通行、左回り、トラック 1 周最長コース、○

となります。

図④



さらに現実の問題として陸上競技のトラックは、図④のようにセパレーターコースになっていますので、とりわけ曲走路における走りを考え、これを()付きでここに加えますと、

- (1)は 400 m 走、トラックを左側通行、左回り、トラック 1 周最短コース、●、(セパレーターコース左側通行)
- (2)は 400 m 走、トラックを左側通行、右回り、トラック 1 周最長コース、●、(セパレーターコース右側通行)

- (3)は 400 m走、トラックを右側通行、右回り、トラック1周最短コース、○、(セパレーターコース右側通行)
- (4)は 400 m走、トラックを右側通行、左回り、トラック1周最長コース、○、(セパレーターコース左側通行)

がいえます。

7. トラックの成り立ちをめぐって

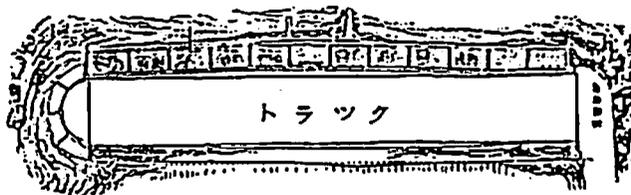
結局のところRがどう走るかは(1)~(4)のどれを選択するかにあるのですが、ここで1つ問題にしたくなるのが一体トラックとは前ページのトラックの図でいえば、外周が400mのフィールドの外側につくられたものなのか(A)、内側につくられたものなのか(B)ということです。言葉をかえれば、トラックはフィールドとは別のものとして発展していき、やがてトラック&フィールドとして統合されたのか(A)、はじめてフィールドの中に取り入れられて発展してきたのか(B)ということです。

話が一層冗長になるのを憂えますが、(A)・(B)を解決する手掛かりとしてトラックの歴史を概観してみましょう。

一般的にいて、古代スポーツ史に登場する最初のトラックは、何といてもオリンピアの祭典に代表され、ギリシャ各都市(ポリス)の競技会にみられるスタディオンでしょう。ここで行われた競技に関して村川堅太郎は次のようにいいます。

(オリンピアでは) 競技のうち、単にスタディオンと呼ばれた短距離は、スタディオンの一方から一方に走るわけで……(中略)……中距離はスタディオンの往復、長距離はスタディオンを12往復するのであったらしい。これは4,614mとなり、これ以上の長距離はなかった⁽⁷⁾

図⑤



ギリシャのスタディオンの中・長距離は折り返し走というもので現在のように曲走路つきのトラックを走ったものではないことがわかります。この方式は393年(第293回)まで、つまりローマ皇帝のテオドシウス帝(位379~395)の治世にキリスト教が国教に等しいものになり古代オリンピックが終焉をみるまで、継承されたとみてほぼ間違いありません。

続く中世ではどうでしょう。稲垣正浩は、

中世前期のスポーツ施設は常設的なものはなく、ほとんどが即興的であり仮設的なものであった。つまり、それらは道路・広場・緑地・川などである……(中略)……中世後期に入ると少しずつ常設のスポーツ施設が姿を現わすが、それでもなお中心は広場や緑地であった⁽⁸⁾

といえます。

中世前期からはクロスカントリーレースのイメージは沸々としませんが、曲走路つきトラックを持つ陸上競技場までは浮かんでできません。しかし、「中世後期に入ると少しずつ常設のスポーツ施設が姿を現わす」ということで、もしかしたらの存在をおおわせます。このことについては以前幾つかの文献にあたったことがあります。その時は、その存在を人間の競走（レース）には見いだせませんでした。動物を用いての競走（レース）以外にはです。

思い起こせば、体育専門雑誌、体育科教育の中で「バリオをめぐる」と題し、野々宮徹氏が1289年来の、つまり中世後期に始まった「競馬」のことを論じておられます（詳細は野々宮徹——バリオをめぐる——、体育科教育10月号、1987年を参照）。この中で、

（バリオの）競技のコースは、内側の扇形広場と宮殿などの建物とによってつくられた周囲約300 mの台形型でふだんは石畳であるが、祭りの日々はコースにトゥッフォと呼ばれる凝灰岩の粉が敷きつめられる。⁽⁹⁾

と記しておられます。

これは、中世後期に既に競馬場として曲走路つきのトラックがあったことの証明とっていいでしょう。ただ、この仮設競馬場は、建物で四方を囲まれた広場（フィールド）内にとり込まれる形でつくられたトラックということですから、いってみれば(A)というより(B)の印象に近いものです。

この(B)という印象は、例え場所を変え、トラックが広場からフィールド（牧場など）に移ったとしても、競馬に限っては該当します。それはフィールドという限られたスペース、一定の高い柵（たいていは2重柵）の中での競走だからです。

さて、時を近代に移します。所はイングランド。

1660年、王政復古。ピューリタン政府の崩壊は身体活動抑圧からの人間解放にもつながりました。路上では人々の競走が盛んに行われ注目を集めるようになりました。それは、100年後の産業革命の時代に入っても変わらず、競走といえばイングランドでは路上での走行を意味しました。

1840年代に至り、ようやく競走が大学やパブリックスクール内に導入されるに及んで、校庭を用いて競技会を行い、距離によっては何周をもするという発想が生まれました。このあたりを（何年とは判然としませんが）曲走路つきトラックの萌芽期と私はみなしています。

イングランドが走行中心ということは、フィールド種目は他の地方で盛んであったことを示唆しています。事実、現在に伝わる数多くのフィールド種目は、アイルランド及びスコットランドの伝統スポーツに源を発し、その地で流行ったものです。

極めて雑なとらえ方になりますが、イングランドのトラック競技とアイルランド、それにスコットランド発生のフィールド競技とが合体し、統合されたのが近代の陸上競技（陸上競技場）といえます。となりますと、陸上競技の曲走路つきトラックのなりたちは、(A)に相当することになります。

8. トラックの左回りと近代合理主義

時代を大雑把に3区分しトラックの成立をみてきました。ここでいえることは、中世後期に既に曲走路つきトラックを備えていた競馬場にくらべ、陸上競技のそれは近代の産物であるという点です。競馬が古い時代から各地域固有のしきたりに則り、長い伝統に培われてきたのに対し、近代の陸上競技はイギリスにおいて、揺籃期より資本主義システムのもと、近代合理主義の波に洗われ成長を遂げたものです。発祥の時代にずれがあり両者共現在になお存続するという事実は、より古い方の競馬場感覚が、陸上競技場をつくるにあたり少なからぬ影響を与えたのは否めないところでこ

それが1913年に国際的なルールとなるまで陸上競技の左回り、右回りを世界的レベルの大会においてすら混淆させた大きな理由だと私は判断しています。

さて、何時までも迷路を徘徊しているわけにはいきません。無理にでも出口を捜し出さねばなりません。

話を前に戻して、ランナーのRは(1)~(4)の走りのどれを選択するのかということですが、テニス、バドミントン、それに剣道と違って、“守り”を考えなくても済むこの場合、Rは(1)を選ぶだろうと私はみなしています。これまで話してきました構え、通行、それにトラックの成り立ちからみれば、(2)でもなければ(3)、(4)でもない、(1)こそRの選択すべきコースなのです。

世の中の大半は右きき。スポーツ・運動の世界ではままだ、この右きき世界の論理、言い方をかえれば多勢に無勢論が、幅をきかし、少数の左ききを従わせることがあります。多勢が、世の理に合うという理屈でルールをつくった、つまり、陸上競技・トラック走の左回りを義務づけたというのが私の見解です。攻めに徹する構え、道の左側通行、資本主義システム下でのトラックの成り立ちこれらすべては近代合理主義がもっとも走り易いと認知した陸上競技なのです。

蛇足ながら、それでは何故競馬も今となっては(1)を選ばないのか、ということになりますが、それは1つには長い慣行が邪魔をしてきたということ、2つには柵内での競走ということ、3つにはすべてがオープンコースであるということ、4つには回転方向については、馬そのものより騎手のきき手が決め手となるということ等、陸上競技とはちがった要素が微妙に絡んでいるからです。
(ここでは騎手として柵の中にいる右ききの人間が攻めに徹する場合、柵に沿って左側通行をす
る傾向にある、ということだけを言うにとどめて詳細は省略します。)

9. おわりに

トラックの左回りを例えば、①コース：それはプライベートイズム、つまり個の自立、②時間の測定：それは世俗化、つまり人間が神の世界から引きずりおろしたもの、③決められた距離の走行：それは管理、つまり排除と監視、などとアレン・グートマン (Allen Guttmann) ばりにメタファーの視角で論じてみたかっただけなのですが、いかんせん実力がゆるしません。それどころか、毎日新聞社編の「スポーツ雑学事典」の俗説を打ち消す力とてありません。もしかしたら俗説が本当かも知れないと思いつつの今回の自説です。私がこの論の“はじめに”のところで記しました——ただ戯れの思いつきをいたずらにふやしたに過ぎないという情けない経緯——というのはこの辺りのことです。曖昧ゆえかなりの消化不良をきたしています。

多分に意地で作文をしあげました。仕様もないレポートは“何かと社会の迷惑”になると知りつつです。ですから今回の結びは“乞う、お許しを!!”となります。

注

- (1) 毎日新聞、夕刊、9月21日付、1987年
- (2) 津田 康、毎日新聞社(大阪)編集委員、9月25日付の手紙、1987年
- (3) 「スポーツ雑学事典」、毎日新聞社編、毎日新聞社発行、P.58~60、1978年
- (4) 中野八十二 他著、少年少女体育全集「すもう・柔道・剣道」ポプラ社、P.177、19年
- (5) 樋口清之、「日本の風俗の謎」、大和書房、P.30、1984年
- (6) M. ガードナーはその著「自然界における左と右」、(坪井忠二、小島弘 共訳、紀伊國屋書店、1971年)で、「一体、現在、全人口の左ききの割合は、どのくらいなのであろうか。これはごく簡単明瞭な質問のように思われるが、実は殆ど無意味だといってよい位曖昧な質問なのであ

る。……(中略)……。第一に、左利きの割合は、調査を行なう時期によってかわってくる。第二に、そもそも「左利き」というものを正確に定義することは、容易なことではないのである。殆どすべての人が右利きであるというのは正しい。……(中略)……。専門家の多くは生まれてくる子供の約25%は左利きだが右利きの世界の環境の力によって、「少数派の左利き」の数が減ってしまうのだ、と考えている。P.107～9」といいます。

(7) 村川堅太郎、「オリンピア」、中央公論社、P.153～4、1964年

(8) 稲垣正浩、「スポーツ施設の発展史」、(「最新スポーツ大事典」、日本体育協会監修大修館書店、P.585、1987年)

(9) 野々宮 徹、スポーツウォーラム「バリオをめぐる」、(「体育科教育」10月号、大修館書店、1987年)

挿入図

図② 注の(4)に同じ

図④ 大島録吉、金原 勇 他著、図説「陸上競技事典」上巻、講談社、P.147、1971年

図⑥ 今村嘉雄 他著、図説世界体育史、新思潮社、P.16、1964年

昭和62年度 高二選択講座「現代文」のあゆみ

谷本文男

〔1〕はじめに

昭和62年度において、私が担当した高校二年生の選択講座「現代文」の一年間の授業の記録をまとめるにあたって、まず、生徒の感想を見えることにしたい。私にとっては耳の痛いこともたくさん書いてあって反省の意味もこめてであるが、それよりもこの選択講座「現代文」の性格、彼らにとっての位置づけ等、私が授業として行なった内容の可否はもちろんであるが、問題点が浮き彫りにされているからである。

「現代文」講座選択者12名のうち、6名の感想を次ぎに紹介する。

〔2〕生徒の感想

この講座の感想といわれても、あまりないので書くのは困難である。授業といってもあまり授業らしくなくて、まあ、わりと気楽に受けられたし、面白くないわけではなかったが、国語の力のプラスになったとはあまり思えない。けっこうよかったのは、漢字テストとか本を読んだぐらいだった。でも星新一は、いまひとつだった。いやだったのは新聞づくりで、後半は、ずっと星占いの十二星座を一つ一つ紹介していっておわってしまった。はっきり言って自分でも手抜きだったと思い、反省している。もっと他にも書くことはあったが、あまり他人に自分の考えや趣味等を公表しない主義なので、（と言いつつ、あちこちでばらしてしまっているような気がする）書かなかったわけである。現代文は、テストがないというのは、たいへんよかったが普段の授業は、お遊びに近いという感じがなくはなかった。この一年間、現代文で得たものというのは、あまりに少ないような気がする。何がよかったかとか、言われても先程書いた、定期テストがなく、息抜きができる授業で、あのやっかいな代数・幾何を選択してテストで四苦八苦するよりはよかったけれど、授業で得たものという、あまり思いつかない。似たようなことの繰り返しになるので、もうおわりたいが結局、現代文の講座は数学の嫌いな奴のたまり場だったというだけだった。 (A組 女子)

なぜか現代文をとるはめになって、一年。なにをやってきたのかなあという気もします。テストなかったし楽なことは楽だったけど、別に国語力が養えたって感じはしません。文章書くのが、嫌いで、各班レポートはいつになっても嫌いでした。

漢字のテストは、ちょっとおもしろかったです。今もう一回やったらたぶんできないと思うけど、その時はいろいろ教えてもらったりしながら、変わった読み方とか結構楽しみながらやりました。あと個人的に言うと、「サラダ記念日」とか「極限の民族」とか印象にのこっています。普段あんまり本を読まないからわからなかったんだけど、ちょっと本の面白さとかわかったような気がして、いろんな本読んでみたいなあと思うようになりました。この気持ちだけでおわりそうな気がするのでそうならないことを願います。

でも国語っていうのはやっぱりあんまり好きじゃないんです……。昔から好きじゃなかったから

急に好きになる方が無理だと思うけど12人っていう少ないクラスだったし、授業っていう感じも少なかった気がします。

(A組 女子)

高一の最後に、英ⅡCを取るはずだったのが急キョ、変更して谷本先生を講師とする現代文になった。とにかく、この現代文の授業は、いろんな授業の中で一番予想に反したものであった。なぜなら、授業のようで授業でなかったのである。その現代文の中でも一番印象に残っているのは、芥川さんの小説を読むのを屋上で風に吹かれてしたことだ。こればかりは授業というより、先生と遊んだという感じ。

こんな授業が週に三回もあったのを、僕は誇りに思う。高校生活のあわただしい受験生活にあのような、あせている自分の肩をポンポンとたたいてくれるような授業が一つだけあったことを。(二つもあればどうかと思うが。)

これから僕の進むべき道を考え、確かめ、悩んでみたらまだまだ先は長い、今のところはその道を正しく歩いている自分に気がついた。

一年間の学習が終わったこの時期にもう一度、自分を見直してみたことを書きました。

(B組 男子)

一年間この現代文の授業を受けて、何をしたかということを出しても、漢字のテストをして、新聞を書いて、その他……といったような断片的なことしか思い出せず、一年間授業を通して全体的に何か現代文についての大きなこと(知識ではなくて、文の本質的なこと)を修得したという実感がわいてこないのが残念です。

授業に対する不満は山ほどあるけど、今さらここに書いても仕方がないので、今後は、この授業について否定的な考え方をせずに、肯定的に考えて、自分が一年間通して何を修得したかということを見つけ出してゆきたい。

(C組 男子)

英語ⅡCと現代文のどちらを先に選択するか悩んで英語ⅡCをとり、先生にすすめられて現代文をとりなおした。現代文という講座をどうしても作りたいようだったので、変更した。私は現代文が弱く、12人しかいなかったらあてられたら困ると大変不安でした。その反面、これで現代文の読み方も分かるだろうと期待していました。

新聞を書くということはどう役に立つのかと疑問に思い、先生に聞きにいったこともありました。私は今でも「あれでよかったのか」と思っています。確かに文章を書くことは難しいことだと思います。しかし新聞を書いて上手になれるとも思いません。

読書はいつも私が読まないような本を読み、私もいろんな種類の本を読もうという気になりました。これは楽しかったです。

やっぱり小論文を書くようなことをしたり、受験に向けてのこともして欲しかったです。先生の考えている事は私には分かりません。勝手に解釈したりもしましたが、私はこの授業を受けてみて、最初の期待がうらぎられた気分です。

(C組 女子)

この一年間、現代文の授業で何をしたかを思い出してみると、新聞・漢字・小説を読むこと、の3つが頭に浮かぶが、新聞はいまいちのり気でなかったが、まあ、退屈しなかった。漢字は本来、まじめにやったらためになると思うのだが、なんせ量が多くてあまり覚えられなかった。でも漢字は結構おもしろかった。小説はいろいろ読んだ。第二芸術論は本格的な文章で、難解だった。その他、本多勝一や星新一をはじめの方に読んだ古典などを覚えている。一度、童心に返ったつもりで童話

を読んできたかった。それと、日本文学は芥川龍之介のをいくつか読んだが、外国文学の短編とか詩とかを読んでも良かったかと思う。何はともあれ、一年間どうもごくろうさまでした。

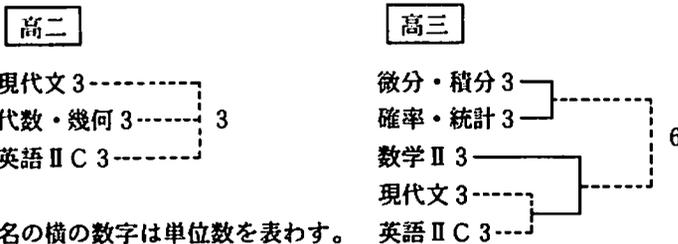
(C組 女子)

生徒なりに一年間を振り返って授業の内容を思いだしたり、不満を述べたり、さまざまなことを書いている。内容についてはあとでまとめたいが、その前に、生徒の感想の中にあった「結局、現代文の講座は、数学の嫌いな奴のたまり場だったというだけだった。」や「英語ⅡCと現代文のどちらを先にするか悩んで英語ⅡCをとり、先生にすすめられて現代文をとりなおした。」ということについて説明しておきたい。

〔3〕本校のカリキュラムと現代文

ここで言う「現代文」とは、もちろん教科としての国語の中であって、「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」「古典」「国語表現」となるが、科目としての「現代文」である。

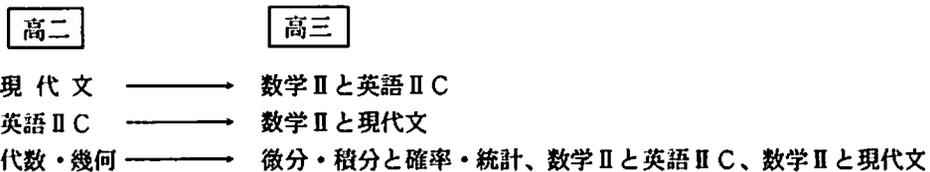
本校では、「現代文」は高二または高三において選択科目として位置づけられている。



科目名の横の数字は単位数を表わす。

-----はいずれか一つの科目を選択することを示す。——は必ず選択することを表わす。

高三で「微分・積分」「確率・統計」を選択するためには高二で「代数・幾何」を選択しておかねばならない。また、高二、高三と続いて「現代文」あるいは「英語ⅡC」を選択することはできない。高二で三科目のうち何を選んだかによって、高三で選択できる科目というのは次のようになっている。



つまり、高二で「代数・幾何」を選べば、高三においては三通りの選択が可能であるが、高二で「現代文」あるいは「英語ⅡC」を選択すると高三で履修する科目が決定されてしまうのである。高二で「代数・幾何」を選択しない生徒にとっては、「現代文」「英語ⅡC」は高二、高三にわたって必ず学習するものであり、そこで問題なのは、どちらを先に選択するかということである。過去4年間の「現代文」「英語ⅡC」両講座の成立状況を示す。

1ないし2の数字は講座数を示す。×は講座不成立を示す。なお、本校における1講座成立のための最低人数は10人である。また、1講座の人数は45人を超えないこととしている。

次の表を見て、次の二つのことが注目される。

- ① 高三において、どの年度も「英語ⅡC」は2講座成立している。

- ② 高二において、「現代文」「英語ⅡC」が両方とも成立したのは昭和62年度がはじめてである。

	62年度	61年度	60年度	59年度
高二 現代文	1	×	1	×
高二 英語ⅡC	1	1	×	×
高三 現代文	1	×	1	1
高三 英語ⅡC	2	2	2	2

以上二つのことから、高二において「現代文」あるいは「英語ⅡC」を選択するものは少数であって、大多数は「代数・幾何」を選択すること、そして高二で「代数・幾何」を選択したもののうち、相当数が「微分・積分」と「確率・統計」を選ばずに、主として「英語ⅡC」に流れていることがわかる。

なぜ、昭和62年度だけ、「現代文」「英語ⅡC」の両方が成立したのだろうか。実は、該当学年の担任の意向が反映されているのである。生徒の感想に「先生にすすめられて現代文をとりなおした。」とあったのは、まさにそのことを指している。

ここで、本校における科目選択のシステムについて略述しておく。

- ① 1月上旬に教務より科目選択について説明。
- ② 説明後1週間程後に科目選択カードを担任に提出。
- ③ 担任はクラスの生徒の科目選択カードを教務に提出。
- ④ 次年度4月に科目選択変更申し出期間をもうける。

以上の①～④がおおまかな科目選択の流れである。昭和61年度の高一の生徒が次年度、高二の履修科目を選択した最初の段階では、「現代文」選択者は一人もいなかったのである。上記の③まで済んで、教務で科目選択一覧表を作成した段階で、担任がその一覧表を見て、動きだしたわけである。教務としては事務的に仕事を進める上ではあまり好ましくないのであるが、担任の強い意向があったので黙認した。教務の担当者は実は私であった。

「英語ⅡC」の選択者の中から10名を超える生徒を「現代文」の方へ移す作業を担任がどのようにして行なったのか詳しくは知らない。一人一人呼んで説得でもしたのであろうか。そもそも「現代文」に変更させる生徒をどのようにして選び出したのかわからない。

ともあれ、担任のすすめに応じて変更する者が10名いて、講座は成立することになった。それに加えて、留学のため休学中の生徒が二名4月から講座に加わることになり、前述のように12名で出発することになった。担任にすすめられて変更した生徒の中には受験に役立つことを期待していたものも当然いるであろうし、わざわざ先生がすすめるのだから何か面白いことがあるのかも知れないと思った生徒がいたかもしれない。「授業に対する不満は山ほどあるけど」「最初の期待が裏切られた思いです。」という感想はそのあたりのことを物語るのかも知れない。

〔4〕週刊「現代文」創刊

とにかく、創刊号の開講のことばと、第2号・第3号を見てほしい。

高二の選択講座「現代文」を担当することになって、一年間どのように進めていこうかまだ模索中であるが、受講者が12名と少ないので、大学におけるゼミのような形式で進めるのを基本とした

い。

そこで、テーマであるが、一口に現代文と言っても非常に間口が広くて漠然としている。それならば担当者の方からテーマを与えるのではなく、こちらからは枠組みを提供して中身は受講者に創造してもらうこととしたい。

具体的には週刊「現代文」なるものを創刊して、受講者にその記者になってもらおうというのが一つである。高二というのは学園祭その他学校行事の中心となる学年であり、また修学旅行もあり、もし「現代文」選択者でそれらの中で何らかの役割を担う者があって「現代文」的に意義のある内容を記事とするのであれば、この週刊「現代文」をそのPRの場として提供してもよいと考えている。

勿論、上に書いたことは一例であって、内容については受講者全員の衆知を結集したいと思っている。

最後に、如何にしても逃れられない問題として評価の問題がある。担当者として、講座の性質上、中間・期末の定期考査においてペーパーテストでは評価しにくいのではないかと考えている。したがって、何を評価の基準とするかということ、普通の授業における取り組みの姿勢、あるいは週刊「現代文」の記者としての記事の出来栄え、その他、小テストの成績等によるものを考えている。

いずれにしても、今焦眉の急となっているのは、週刊「現代文」を軌道に載せることである。記者諸君の健闘を祈る！

〔谷本〕

週刊◇◇現代文◇◇ 第1号 1987年 4月16日



発行所

奈良女子大学文学部附属高等学校
 二年「現代文」講座
 館六三〇 奈良市東紀寺町一丁目
 六〇番一号
 〒 〇七四二 二六 二五七一

連載計画！

一 班
 一：ちおう予定として海外レポートは全7回になる。各テーマを紹介すると、

- 第一回：天気のことについて
- 第二回：学校生活のこと(1)
- 第三回：学校生活のこと(2)
- 第四回：生活習慣・人について(1)
- 第五回：生活習慣・人について(2)
- 第六回：街の雰囲気のこと
- 第七回：英語のこと

- 二 班
 ●二班 テーマ「音楽」
 ○日本の音楽のルーツについて
 一：GSについて(六十年代の音楽界の相に近づく)
 二：続・GSについて
 三：一九七〇年代の日本の音楽(アイドルの誕生)
 四：現在の日本の音楽
 その後は未定
- 三 班
 我が学園の野球部を追う我々とし

ては、部員の紹介をはじめ野球部のかくされた魅力をみんなにわかってもらい、ひいては学園全体の雰囲気盛り上げ一気に甲子園へなだれ込もうと行動するものである。であるから、野球部の夏のドラマがつきるまで追い求めるものである。：、さあ次の週刊「現代文」は、その夏のドラマの主人公達、女子大附属の野球部員の紹介です。

今のところ、テーマはずっとかえないつもりです。これから、このテーマにそって、その時々季節や、行事、又は日常生活で気付いたこと、話題となつていふことを書いていきたいと思つています。その話によつて、長さは多少異なると思いますが、とにかくみんなにおもしろく読んでもらえるように書きたいと思つています。

下段の漢字読めますか？

27	七夕	〜	〜
26	太刀	〜	〜
25	山車	〜	〜
24	草履	〜	〜
23	辨人	〜	〜
22	上手	〜	〜
21	数珠	〜	〜
20	三味線	〜	〜
19	芝生	〜	〜
18	竹刀	〜	〜
17	時雨	〜	〜
16	五月雨	〜	〜
15	早苗	〜	〜
14	浅敷	〜	〜
13	鱧魚	〜	〜
12	早乙女	〜	〜
11	玄人	〜	〜
10	為替	〜	〜
9	蚊帳	〜	〜
8	河岸	〜	〜
7	神楽	〜	〜
6	母家	〜	〜
5	お神酒	〜	〜
4	乙女	〜	〜
3	一言居士	〜	〜
2	磯黄	〜	〜
1	小豆	〜	〜

四月二一日 漢字の読みのテスト
 括弧の中に書け、

28	足袋	〜
29	種児	〜
30	梅雨	〜
31	凸凹	〜
32	伝馬船	〜
33	投網	〜
34	十重二十重	〜
35	親柱	〜
36	名残	〜
37	雷崩	〜
38	祝詞	〜
39	日和	〜
40	吹替	〜
41	下手	〜
42	土産	〜
43	眼鏡	〜
44	猛者	〜
45	紅葉	〜
46	木綿	〜
47	最寄り	〜
48	八百長	〜
49	浴衣	〜
50	行方	〜



〔5〕「現代文」の授業と週刊「現代文」

12名という少人数の講座を担当することになってまず考えたことの第一は、少人数であることを生かした小回りのきく内容にしたいということ。第二は、決まったテキストというものは特に用意せずやりたいということ。この二つだけである。それがどうして「週刊「現代文」」を作ることにつながっていくのか、自分でもよく思い出せないが、次の二つのことがおそらくその理由であると思われる。その一つは、なるべく生徒が能動的に参加できるようにしたい。二つめは、授業の一年間の記録を残したい、ということである。

「現代文」の授業は週3時間ある。昭和62年度高2の「現代文」は、月曜日、火曜日、木曜日にあった。それぞれの曜日に次のような内容で行った。

- ① 月曜日……何かまとまりのあるものを読む。結果的にはずいぶん雑多なものになった。
- ② 火曜日……漢字のテスト等、あるいは月曜日の続きを読む。
- ③ 木曜日……生徒の各班によるレポート（記事）の作成。

週刊「現代文」には、③の生徒による記事以外に、①②のこともすべて載せた。①は、読む文章そのものは載せなかったが、生徒の感想等、できるだけ載せた。②の漢字のテストも、週刊「現代文」の内容とした。答えは次号に載せた。1987年4月16日の第1号から1988年3月8日の71号まで発行して終わった。

〔6〕「現代文」の内容・その1 — 各班レポート —

一年間にわたって各班が記事にした内容のあらまし。

- <一班>・留学生の海外レポート（前述の二名の留学帰りの生徒は両方ともこの班になった）
 - ・季節に応じた話題
 - ・音楽のこと
- <二班>・音楽の話題
 - ・高2の生徒の横顔紹介
- <三班>・本校野球部の素顔（この班に野球部の女子マネージャーがいた）
 - ・本校教師のプロフィール
- <四班>・季節の話題
 - ・奈良の「おいしい店」
 - ・星占い

以上の中から、<一班>「留学生の海外レポート」<二班>「音楽の話題」<三班>「本校野球部の素顔」<四班>「星占い」の、それぞれ一部を紹介する。

<一班>「留学生の海外レポート」

日本は日に日に暖かくなっていますが、ここで私がカナダで経験した一番寒い日を紹介합니다。その日は二月中旬、私達は留学生の旅行でカナダの首都オタワでスケートをしていました。オタワ川が凍ってできた10キロ以上に及ぶ世界一長いスケートリンクです。でも風が強くて気温はマイナス40℃近かったということ。鼻の中も凍ってましたっ。

オーストラリアの気候は、日本と正反対です。つまり、今、冬に向かっていきます。オーストラリアと言っても場所によって異なりますが、私のいた所は、一年中わりと温かかったです。夏は、気温はあまり変わりませんが、空気が乾いていて、動くのもしんどいです。冬は、セーター二枚あれば大丈夫です。雨は、めったに降りません。雪はとんでもない。

というのが今回の海外レポートです。ちょっと短い気もしますが、第一回目なので、ウォーミング・アップ程度で、といったところでしょう。まあ、回を重ねるごとに、内容も充実して行くと思しますので、楽しみにしていってください！

(第5号)

学校生活について

【オーストラリア編】

学校には校則はあんまりないし、あってもほとんど守られてません。1・2時間40分授業で15分間のおやつ時間。3・4・5時間は45分授業です。それが終わると1時間の昼休み。そこから後2時間してやっとお家に帰れます。はっきり言って生徒の態度は最悪。授業中は、本当に遊んでるし、行儀も悪い。学校から体育しに移動する時は、たばこ片手に行くし。何かお腹がちょっとばかしく大きい子もいるし。日本だと不良なことも、あっちじゃ当たり前だもん。自由というのか、のんびりしてるというのか……。

【カナダ編】

校風はむちゃ自由。日本に帰ってきて学校って死ぬほどしんどい。私がカナダで一年間通ったハイスクールは5年制で14才から18才までぐらい。制服なし。みんな化粧して車乗って学校くるし。たばこすう。まれですが子供いる人います。授業は日本に比べて簡単だけど授業中みんな真剣で質問もいっぱい。遠足、身体測定、修学旅行なし。夏休みは三ヶ月弱。こんなもんです。1・2ヶ月に1回ぐらいの割合でスクールダンス。体育館をディスコみたいにして11時半ごろまでみんなで踊るの。日本じゃできないよね。

というのが今回の海外レポートです。

これを読んで、まず、外国の学生はハンパやない！行くところまで行っとる！と感じた。いくら風習・習慣の違いはあるとはいえひどい。タバコ片手に学校を歩く！車で通学する！そして、子供がいる奴がおる！外国の先生は何を教えとんねんと言いたくなってくる。まあ、こんな風な大胆な行動をすることで外国の特徴なのかもしれない。ここまで、外国の学生はあまり感心しないみたいを書いたが、一ついいなと思うところがあった。それは、学校をディスコにして11時半ぐらいまで踊るということなんです。時間的には、あまり感心しないけど月に1回、みんなと気楽なふれあいみたいなものがあって良いと思います。こういう面で外国の大胆な行動をしようっていう特徴は良いかもしれませんね！

(第9号)

【カナダ編】

留学して私の性格変わったっていう話もあります。でもむこうではひたすらおとなしい子だったみたいです。特に最初のころ。泣きたいぐらい英語わからなかったし。はじめの1・2ヶ月YES、NO、しか話してなかったんちゃうかな。～してもかまいませんか、と英語で聞かれて自分がよければNO！と答えなければいけないんです。それが私にはどうしてもわからなくて…。やっとわかったのだいぶしてからでした。今考えるとばかだったな。だけどホストの人達苦労しただろうなって思います。感謝いっぱいです。

【オーストラリア編】

着いてすぐは、英語はあんまり分かりませんでした。知ってる単語の数なんて知れてるし、話すのも聞くのも、本当に適当でした。しばらくたったら、普段の会話なんて似た様な物だから、

日がたつ程、楽になりました。でも、帰る頃になって日本語を話すようには、話せないです。時々くやしいこともありました。でも、ケンカもできるようになります。日本で英会話習うくらいだったら、思い切って留学の方が力になります。色々と、勉強になることも楽しいこともあるし。でも帰ってきたら、しんどいことばっかしよ。

(第16号)

今回は特別ゲストのマイケル君に日本についての質問に答えてもらいました。まず留学としてなぜ日本を選んだかという質問です。彼は本当はタイ又は南アフリカに行きたかったということです。それはカナダと違った文化を知りたかったからとか、でもロータリーの留学でそれらの国はだめで日本と決まったそうです。ヨーロッパは行ったことあるしアジアの方へ行きたかったそうです。はじめ日本への留学が決まった時はいやだったみたいですが、だんだん楽しみになって今は大阪の摂津で楽しんでいるようです。

〔マイケルの自己紹介〕

マイケル・コンテです。カナダからです。18さいです。rotary こうかんりゅうがくせい。TINAさんといっしょに日本へきた。摂津高校へいく。日本のかぞくといっしょにすんでいます。日本はたのしいです。

(第25号)

この記事は、文中にあるTINAという女子生徒が本校にカナダから留学して来ていて、その友人のマイケル君が私の授業にとび入り参加したときのものである。

<二班>「音楽の話題」

◎ 1970年代の日本の音について— ようやく、この頃からアイドルと呼ばれる人物が登場してくる。アイドルの年齢の相場といえ、当時は20前後だった。歌唱力も今のアイドルのようではなく、かなりうまかった。服装は派手で、みんな同じ格好をしていた。

当時、人気のあったアイドルに、「ザ・ピーナッツ」がいた。歌が上手だったし双子という事で話題性もあった。他には「ピンキーとキラーズ」。「恋の季節」でヒットした。あと、「ジャーニーズ」、「フォーリーブス」、「フィンガー5」、「ずうとるび」等がいた。

余談だが、フォーリーブスにいたおりも政夫氏は、今は「アイドル水泳大会」の司会をやり、ずうとるびの山田たかお氏は、某番組「笑点」の座布団はこびをやっている……。山しよは小つぶでひりりとからい。

話は戻るが、これらと同時に「御三家」と言われる人達が出てきた。御三家とは「郷ひろみ、西城秀樹、野口五郎」の三人である。今の音楽は、アイドルの人気が高いが、そのルーツは1970年代にある。今の音楽は彼らなしではありえなかっただろう。

☆今週の推薦曲

ラ・イスラ・ボニータ

マドンナ

LP「トゥルー・ブルー」の中からの5曲目のシングル。スペイン調の曲で、地味だけど異国の情緒が漂っていて、私はマドンナの曲では一番好きです。もうすぐマドンナが来日しますが、この一曲を聞くためだけにコンサートに行きたいと思っている私です。

(第9号)

現在の音楽のチャートには必ずといっていい程、アイドル歌手が入っている。オーディションに受かれればすぐに芸能界入りして歌手デビューするケースが多い。中には、たまたまスカウトされて……なんて人もいる。この人達の何人かが、本当に歌手になりたかったのだろうか？ 日本の音楽界の裏側には、無数のバンドがひしめいている。ライブハウスで地道な活動を行いながら、自分達の音ってやつを追求している……世界一を夢見て。

このような芸能界に引き裂くように出現したのは、あの「おニャン子クラブ」である。これを支持している須藤氏にお話をうかがってみた。

「昭和60年9月、柴田君が、『おニャン子クラブ』と叫んでいました。

僕は、その年の夏に初めて『おニャン子クラブ』を見たんですが、偏差値60以上の娘がいっぱい。ほんで団体になって『セーラー服……』などという歌を歌っている。でも、その娘達を好きだなんて言ったら恥だと思い『お前アホか』と言ってました。

しかし、後に、柴田君の時代先取り、最先端流行感覚に感心して『師匠』と呼ぶようになるとは、夢にも思いませんでした。

なぜあのようなブームになったのか。（下段参照）

結局、おニャン子ブームというのは、世間の男たちのハーレム願望を満たすための代償きせいにより、なりたっていたものなのです。

その男たちは、歌を聞くことにより、まるでおニャン子に囲まれているよう想像し、YAPPYな気分になっていたのです。やはり、団体と普通ぼさが一番の魅力だったのでしょう。」

このようなグループの出現に社会の男共の鼻の下はゆるんだのである。現代の音楽、それは、聞かせる歌手から見せる歌手に変わってきたのである。そして我々、二班は予告する。もう一度、バンド・グループサウンズなどの聞かせる音がやって来ると。 <完>

次週は、心機一転でスタートするはずです。

① あれだけたくさんのかわいい子 → 個人的に好きな子ができる。

② かざりけがなくてまるで → たくさんのかわいい女の子が
一つのクラスみたい → 身近に感じる

夕やけニャンニャン
③ 毎日放送 うら番組 → 毎日会える → ハーレム
は再放送

その他 プラスα
TV番組づくり等

D. S.
(ダル・セーニョ)
(第16号)

<三班>「本校野球部の素顔」

20連敗にそろそろ手が届くだろう我が奈良女子大附属高等学校野球部。彼らのみなぎるパワーもこれで終わりかと思われた…が、しかし！

5月3日、憲法記念日、空はあいにくの荒れ模様。彼らの行く末を暗示しているかのようだ。中止と思われたが、1時5分、アンパイアーのプレーボールの合図が宣告された。

一回裏、3番 キャッチャー 多田が痛烈なセンター前ヒットをはなち、続く日浦もレフト前ヒット、そして5番松村が左中間になんと二塁打を打ち一気に2点をはじき出した。そうなればもうこっちのものだ。二回に2点、五回に1点をもぎとり、九回の表に2点を取られたものの5対3のX勝ち、今年初めての勝利を得た。ここに彼らの努力がみのったのだ。さあ、彼らの甲子園へのドラマが一層胸熱くくりひろげられるだろう。彼らのこれからの活躍に注目したい。

(第13号)

市体優勝、インターハイ県予選団体優勝その他もろもろの賞状とメダル……それはもちろん野球部の記録ではない。

今回から、インターハイに向けて獅子奮迅と躍進している硬式テニス部にスポットをあてることにしたいが、決して野球部を見捨てたわけではない。……とにかく今回はテニス部だ！

……今、何と言っても花形はテニスだ。それが、うまいときているから我が学園テニス部、もてること間違いなし。

高三、玉永・加治、高二、中村・原田・岡田。彼らは、八月に奈良県代表として北海道へたつ。

彼らはきっとやるだろう。いや、必ずやりとげてみせる。彼らの未来は明るい。その燦然と輝く光に、目がつぶれそうな、野球部の応援歌をのせる。みんなもはやく覚えて応援しよう！

(第27号)

7月2日、運命の抽選日。この抽選がうまくいけば、我が野球部の最終目的である甲子園出場も夢ではない。

主将日浦大輔のふるえる手が抽選箱に伸びた。かたずを飲んで見守る部長だが、あのスマイルは絶やさない。

くじを引いた。第1回戦の敵は、奈良工業高等専門学校、強いとも弱いとも形容しきれぬ謎めいたチームだ。しかし、過去一度練習試合をし、我が野球部が惨敗したという苦い経験がある。何としても、あの屈辱をはらすべく、次回は勝利したい。その試合は、7月22日、市営郡山球場、第二試合だ。

みんな、応援に行こう！ 前売券はマネージャーへ。おっと、それから応援団とチアガールになりたい人も……。

(第36号)

<四班>「星占い」

今回で、ちょうどラストの魚座(2/19~3/20生まれ)です。魚座の人は、順応性に富んだやさしい性格で幻想的なものや、神秘的なものに強い興味を示す傾向があります。そしてこの星座の人は、内面に二面性をひめています。それは、神性と魔性の両面といえるでしょう。そのはざまをゆれ動いているのが魚座生まれの心情ということが出来ます。この星座の人は、本当は喜怒哀楽の落差が激しいのですが、それを顔に現さないという傾向があります。ですから、表情から内面の心の動きを読み取るのが難しいひとです。それは、努めて感情をおし殺しているというよりは、その内部に夢幻的なもの、不透明な要素を秘めているからです。しかし、しばしば、空想の世界におぼれてしまうこともあり、また、決断力に欠ける面もあります。これらのことは注意すべきことでしょう。

これで12星座全て終わったわけですが、みなさん、どうでしたか。当たっている所が少しはあ

ったでしょうか。まあ、占いが、すべてではありませんから、全然当たってなくてもおかしくないと思います。信じるのも信じないのも好きすぎだと思うので、参考になれば幸いです。

(第69号)

〔7〕「現代文」の内容・その2 — 一年間に12名+1名(谷本)で読んだもの —

一年の間に様々なものを読んだ。一定の方針にしたがって選んだものではなく、生徒の要望によって選んだものもあるが、私の好みによるところが大きかったかも知れない。「サラダ記念日」などは、教師がうれしがっていたと言われても仕方がない面もある。しかし、芥川や、「アラビア遊牧民」(後で本校に藤木高嶺氏が講演に来られた。本講座で読んでいるときには予期しなかったことである。)など、まともなものも読んだのである。確か、「アラビア遊牧民」は、ある社の中学の教科書に一部が載っていたと記憶している。

いささか読みっぱなしの感がないこともなかった。読んだものについてみんなの意見を聞いて議論をするという点は不十分であったことを認めざるを得ない。あるいは私一人が好きなきことをしゃべっていたこともあったかもしれない。この点では、生徒が主体的に授業に参加する姿勢を引き出せなかったことを反省しなければならないだろう。

読んだものを順に挙げる。

・文庫日記(田辺聖子)より

「額田女王の恋」「むかしはものを」「あつもり」「北浜の米市」「少女と物語」
「あね・おとうと」

・第二芸術論(桑原武夫)

・サラダ記念日(俵万智)より「八月の朝」

・アラビア遊牧民(本多勝一)より

「親切で慎み深いベドウィンの正体」「ベドウィンの方が普遍的で、日本人こそ特殊なのだ」

・芥川龍之介の「藪の中」「芋粥」

・星新一の「ツキ計画」「生活維持省」「診断」「意気投合」「鏡」「冬の蝶」

・ハニホヘト音楽説法(岩城宏之)より「音楽教育はこれでよいのか」

・岩城宏之のからむこらむ(岩城宏之)より

「夏はやっぱり甲子園」「身勝手な嫌煙権運動」「もやしだらけになる日本が心配だ」
「カーレース事故の奇妙な報道」

この中から「第二芸術論」と「サラダ記念日」について、生徒と一緒にどのように読んでいったかを紹介しておく。

＜「第二芸術論」を読む＞

桑原武夫氏のこの論については、私は高校生のときからその存在は知っていたが、読んだのは大学生になってからであった。驚いた、というのが第一印象であった。一体何に驚いたのかは、本当のところは今だによくわからない。内容もさることながら、「こんなことを堂々と言っている人がある。」というのが、おそらくそのときの私の気持ちに近いであろう。以来、私の現代俳句に対する考えというものは、桑原武夫氏の呪詛の言葉から逃れられない。それならば、徹底的に桑原氏に平伏する形で生徒を扇動してやれというのが、私の考えであった。そのアジェンダの文章を二つ書いた。

第三編 俳句を論ず

終戦直後に桑原武夫氏の書いたこの文章は、当時かなりの衝撃を与えたはずであるが、その後四十年以上たつて現在俳句はどういう状況にあるか、残念ながらほとんど改訂されていないと云つてよい。もう一度、桑原氏のこの文章を世の中に知らしめる必要がある。ただ、私が一つ気になる点がある。それは、桑原氏がさかんに西洋、それもフランスと比較される点である。桑原氏はフランス文学者であるから、当然といえは当然なのであるが、こういう態度は実は俳人の反発を招くのではないかと思われる。おそらくフランス文学に通曉した俳人というのはいさゝかまれである。したがって俳人はどういふ態度をとるかと言へば、いよいよかたくなに自分の殻にとじこめることになるのである。他人の批判を仰ぐと受け流すのは、得意な不誠実な態度ではなからうか、いわれ

のない言いがかりをつけられているのなるともかく、正当な批判と思われるものには責任を当てるべきである。照殺すべきではない、誠に遺憾ながらすれ違いに終わっていると引わざるを得ない。

さて、我々は俳句についてどのような態度をとるべきであろうか。桑原氏の言ふように第二芸術と認め、それならばよしとすればいいのか。ただし、氏の論をみると、氏は突極的には俳句を排撃する立場のようであるから、そこまで氏に与するか、私としては、いかんせんそこまでは無理ではないかと思つている。氏の議論は吾うなれば所詮インテリの議論であり、悲しいかな日本ではインテリというものは散して遠ざけられる氣味があるのだ。やんぬるかな！



第三編 俳句を論ず

俳句は、作品自体(句一つ)では優劣を定め難い。他の芸術、例えば小説や彫刻では絶対にかつこうことではない。また、俳人は、俳句仲間以外の者の批評を極端にきらう傾向がある。以上の二点は俳句の弱点を余すところなく露呈している。

俳句の世評を決定するのは作品ではなく、それぞれの俳句雑誌に拠る者の勢力の多寡である。それは中世職人組合的な意識である。

吾うまでもなく、芸術の価値を決定するものは作品自体の評価によらねばならない。しかるに、以上述べてきたことからわかるように、俳句の最近代性は明らかである。桑原氏の言は終戦後すぐのものであるが、ここで、現代の俳句についてはどうであろうか。精細に調査したわけではないが、基本的にはかわりがなからうと思われる。日本の大新聞のいづれにも、読者のための俳句欄(短歌欄もある)があつて、選者と呼ば

れる俳人が膨大な投句作品を選ぶということがあるが、新聞に投句する人は一体何なのだ。新聞に投句する人は我術家予備軍か？ 斯くてそんなことはない。投句する人は、四人ほどの選者のうち、自分で誰に句を読んでもらいたいかを指定することになつてゐる。私は一体どういふ理由のか理解できなかつた。が、第二芸術論を読んで理解できた。要するに俳句を作る者は群れて意識を作りたがるのだ。こういう体質はそう簡単に変わるものではない。これでは、若い才能が俳句を目標とすることはできない。俳句の命脈はもはや尽きてゐる。



私のアジテーションが成功したかどうか、生徒の意見を紹介してしめくくる。私のように桑原氏に全面降伏というのではなく、結構自分なりの考えがあるようである。

大家の作った俳句にせよ私自身にその意味、言いたいことがわからなければ無意味かなあって気がします。もしかしたら俳句は小説と同じくらい奥深さがあるのかもしれませんが、それは俳句をやっている人にしかわからないのでしょうか。どちらにせよ全然俳句に興味のなかった私が少し興味を覚えたのは、去年の今ごろでした。留学生の高校の英語の授業で俳句をやったんです。もちろん英語です。単語を五・七・五で計17語並べてつくるので日本の俳句よりは長いんですけど、ああ英語でももあるんだなあって少し感動したのを覚えています。

俳諧、俳句についてむつかしいことはわかりませんが、一つの芸術として愛好者が俳句をつくり披露し合うのはそれが素人じみてても趣味として楽しいことかもしれません。俳句の雑誌がたくさん出されているのもそのあらわれだと思います。

もう一つ思うのは第二芸術にもありましたがその俳人個人のことを知っていて俳句がわかるんじゃないかなということですね。考えてることと思っていることを17字の中に表すためにその裏が必要なんじゃないかなと思います。今まで俳句のことについてくわしく考えたことはありませんでしたが、第二芸術を読んでみてむつかしかったながらも、少し良さも悪さもわかったような気がします。

(A組 女子)

第二芸術 — いったい芸術というものに、第一も第二もあるのだろうか。著者は、俳諧という一種独特な日本的な世界をとりあげている。同好者だけがかたをよせあって特殊世界を作り、その中で楽しむ芸事。その世界でしか通用しない言葉の解釈。

もちろん私も俳句が芸術などとは思わない。むしろ著者が言うように、一つの芸事であると思う。しかしそれを、しいて芸術という名を使って「第二芸術」と呼んでいいとは思わない。

私は、芸術というものは、絵画、彫刻なら一瞬目にして、心をうつものをそれと考える。また、小説、映画なら、読み終わった時、見終わった時に心が感動でうちふるえるものだと考える。そういった中で、やはり芸術に第一も第二もないと思うわけである。

俳句というものが、かつての芭蕉のころの第一芸術から現代第二芸術に成り下がっているなどと言う必要もなく、俳句ははじめから、芸事として始まったのだから、その道を歩むべきだと思う。だから現代俳句が、著者の考えにそぐわなくてもいいのだ。現に著者がこの声明をしてから今日、俳句の体系に変化が見られたとは思わない。つまり、時がたっても一度芸術として生まれたものは、変わらないが、芸事、趣味といったものは人々の要求する、その時の社会が要求するものにに応じて変化していくものだ。その変化は、第一芸術が第二芸術に成り下がったものでもなく、変化は変化として受け入れるべきだと思う。

私は、この第二芸術という趣が気に入らなかったのだが、その著者が、「蛇足」というのだから、今回は蛇足として聞きながすことにしてやる。

(B組 男子)

ぼくは、この「第二芸術」で著者のいいたい事（つまり、現代俳句は、ヨーロッパの近代芸術より劣る — 第二芸術である）には、賛成できない。そもそも、俳句とヨーロッパの近代芸術とを比べるのが誤りである。ヨーロッパと日本の間には、いろいろな点（文化、習慣）で相違があ

り、芸術に対する考え方、取り組み方には違いがでてくるのは当然のことである。だから、日本における「芸術」の定義と、ヨーロッパにおける「芸術」の定義は異なるのである。それを作者はフランス文学者という立場からだろうが、芸術に対する意識をヨーロッパにおける「芸術」の定義で統一しようとしている。これは、明らかにおかしいと思う。例をあげると、ボクシングと相撲はどちらが真の格闘技か？ということを義論するのと同じであって、ぼくにしてみれば、この文章に書いてあることはばかばかしい。

まあ、日頃、「芸術」というものに関してあまり関心がないのでこういうふうにするのかも知れない。

結局ぼくのいいたい事は、自分にとって俳句にしても近代芸術にしても、それぞれの「芸術」における定義の中で芸術を理解している人々しかわからないもので、自分には無縁であるように思う。これは、現代俳句と近代芸術にかぎらず「芸術」一般にいえることである。

芸術のわからない立場（今の自分の立場）からこの議論を客観的に見ても、当たり前のことであるが、芸術に対して優劣をつけるのは不可能である。

(C組 男子)

<「サラダ記念日」を読む>

実は、第二芸術論についての意見の中で、ある女生徒が「ついでに言うと、俵万智という人が出した『サラダ記念日』という本の短歌は、『なんやねん』と思うような内容でした。」と書いていた。この生徒は明らかに俵万智の歌に対して反感を持っているように思われた。私は、『サラダ記念日』を読んで非常に面白がり、何人かの生徒に「面白いから読め」といっては、無理やり読ませていた。私が面白いと思うものを彼女はなぜ嫌いなのだろうか、結局は好き嫌いの問題で、説明なんてできないのだろうけれど、わざわざ言及していることに興味を持った。彼女の反応はさわやかであると感じた。新聞紙上で、夫が教師であるという女性が、俵万智に共感を示しながらも、最後に「生徒のことを歌ってほしい」と言っているのを見て感じた不快感と比べると、非常に爽快である。俵万智さん、お願いですから生徒のことを歌うのはやめて下さい。

「八月の朝」から好きな歌を選んで鑑賞文を書き、その歌のパロディーを作ってみた。

ハンバーガーショップの席を立ち上がるように男を捨ててしまおう (八月の朝)

彼女は、もう別れを彼から言われるのは時間のもんだいだと気付いていて、それならば、私から別れよう最後くらいプライドを持とうと思っている歌であると思う。

きっと、彼から別れを言われるとあきらめられない、だから自分から……というような心を表現していると思う。

☆真夜中に留守番電話流れるは聞きなれた声君のさよなら (B組 女子)

ハンバーガー屋は、腹が減ったから入る時もあるけど、時間つぶしに入る所だと考える。

そして、食べるのが終わって、(つまり、この人にとっては、愛することが終わって) いなきゃならない時間が来たから出ていく様にあっさりとした感じで、あなたとは別れるのよって言いたいけれども、実際はそんなんじゃないなくて、私の気持ちも、もっとわかって欲しかったっていう意味が込められている？

☆君つかむ時がなかなかつかめずにクルクルずしのいくらはすぎる (B組 男子)

気がつけば君の始める花模様ばかり手にしている試着室 (八月の朝)
ふと気がつくと、彼の好きな花模様の服ばかり試着している。彼に少しでも気にしてもらおうというけなげな女の子の様子を素直に歌にしています。
☆花ガラの服を着ている君のかけ今日はなんだか光って見える (A組 女子)

寄せ返す波のしぐさの優しさにいつ言われてもいいさよなら (八月の朝)
別にこの歌が好きで返歌をしたのではないけど、適当にかきやすそうだったからかいただけです。だから鑑賞文もべつにかくことはありません。波の優しさを感じ、相手の冷たさを感じざるを得なくなって、不安でいっぱいなのだろう……ということ位です。「サラダ記念日」が、芸術なら、第三芸術論がかけそうです。
☆さよならは優し海辺はさみしすぎいい加減な町がお似合い (C組 女子)

この時間君の不在を告げるベルどこで飲んで誰と酔ってる (八月の朝)
この歌を選んだのに、特別な意味はありません。でも、この歌には、女の人の気持ちが表れてると思います。いつもこの時間に電話しても彼がいなくて、回数が重なっていく度に、他に彼女がいるんじゃないか——って思う。さりげないしつがかわいいと思います。
☆この次に君が電話をくれる時居留守を使って君をあせらす (C組 女子)

☆印は生徒の作ったパロディーである。

なお、「サラダ記念日」をやっている時に、ちょうど教育実習生が二名参観に来ていて、俵万智の歌について、「自分を客観視している。」「自分の気持ちを代弁してくれているような気がする。」という感想をもらしていた。おそらく後者の感想が、俵万智の歌が世に受け入れられた最大の理由を言い当てていると思われる。

〔8〕「現代文」の内容・その3 — 漢字のテスト —

ややクイズ的な内容に傾いた。動植物の名・古語・四字熟語・熟字訓・紛らわしい漢字等、手当たり次第にやった。形式としては、書取、誤字訂正、読み等である。厳密な意味でのテストではなく、相談してもいいことにした。ワイワイ言いながら結構楽しくやれたと思っている。授業の最後に答えを言って、各人何問正答したかを自己申告させた。問題によって差はあったが、おおよそ六割程度の正答率であったろうか。一般教養国語部門という趣であった。(P 46、P 47参照。)

〔9〕おわりに

さしたる指針もないまま出発して大きな破綻もきたさなかったのは、12名という少人数講座のおかげである。私なりに苦労もあった。「困った時の教科書」という言葉がしみじみと感じられたこともある。小規模校であるが故の宿命…教材の数が多いこと…を恨めしく思ったこともある。本年度の私の場合四種類あった。また、時間割の関係で、ある生徒にとっては2時間連続私の授業ということが週に1回あった。つまり、クラス単位の授業の次が現代文の授業というわけである。

私にとっては試行錯誤の授業で、教師の側にとってみればこれからもこの仕事をしていく上で得るところが大きかったのだが、生徒にとってはどうだろうか。高二の「現代文」の授業というものは彼らにとって一生に一回限りのものである。その意味で、一学期の中間テストが終わった頃に何人かの生徒が私のところへやってきて、授業に対する不満を直接もらったことは記憶にとどめてお

かねばならない。私が「現代文」の授業でやろうとしていたこととややズレがあって、その不満を十分解消したとはとても言えないからである。

23	波殿	(47	格子	(
22	瓦	(46	頤	(
21	唐土	(45	隊	(
20	烏帽子	(44	炭	(
19	道	(43	東	(
18	閉	(42	殿	(
17	節	(41	御	(
16	地下	(40	息	(
15	衆	(39	相	(
14	乳	(38	檀	(
13	上品	(37	春	(
12	撰	(36	大	(
11	宿	(35	殿	(
10	障	(34	月	(
9	卯	(33	直	(
8	衣	(32	盛	(
7	半	(31	型	(
6	黒	(30	御	(
5	内	(29	手	(
4	長	(28	洗	(
3	長	(27	祝	(
2	押	(26	詞	(
1	日	(25	不	(
		(24	知	(
		(火	(

週刊 〇〇現代文

発行所

奈良女子大学文学部附属高等学校
二年「現代文」講座
六三〇 奈良市東紀寺町一丁目
西 〇七四二 二六 六〇番一
二五七一

48	防人	(79	母	(
49	口伝	(78	折	(
50	行幸	(80	敷	(
51	合子	(81	衛	(
52	蛇	(82	門	(
53	三位	(83	管	(
		(84	文	(
		(85	月	(
		(86	精	(
		(87	進	(
		(88	下	(
		(89	向	(
		(90	檢	(
		(91	非	(
		(92	違	(
		(93	使	(
		(94		(
		(95		(
		(96		(
		(97		(
		(98		(
		(99		(
		(100		(



選択制男女共学による体育の授業について

保健体育科 渡 辺 幸 子

はじめに

今日、老若男女を問わず日常的に運動をおこない楽しむ傾向がみられるようになってきた。これは、人びとの運動やスポーツに対する見方・考え方、必要性などの変化によるものである。すなわち、運動やスポーツは、特定の人びとがおこなうだけのものではなく、誰でもおこない楽しむことのできるものであり、また、健康や体力の大切さやその向上のためにこれへの高い関心がよせられるようになってきたからである。さらには、運動を共にする仲間との交わりやこれを通して新しい自己の発見・創造のあることを認識しはじめたことによるものである。このような変化と共に生徒の多様なニーズ、発達に対して、中学や高校における体育の授業は楽しい体育・生涯体育にむけて大きな変革が求められている。そこで、これの有効な手段として選択制の授業が取りあげられるようになった。本校でも、1982年（昭和57年度）から男女共学の授業によってはじめ今日に至っている。しかし、いまだ内容・方法等の構造化について具体的な解決をみていない。そこで、今回は高校3年の授業実践を分析するなかでこれらの問題の検討を試みた。

I. 選択制男女共学による授業とは

選択制の授業とは、山本俊彦氏によれば、「子どもたちが、自分の得意とする運動や、とくに興味をおぼえるスポーツを選んで学習することを可能にする授業のことであり、学習者が自己の能力や興味・関心などに応じて、種目や領域を選んで学習を進める授業である。」（「学校体育」1983年11月号）と述べているが、私はさらに、男女共学によって、男女それぞれの特性を理解し、互いに協力して運動することにより、質的に高いよこびや楽しさを味わわせることを期待することができると考える。

II. カリキュラムへの導入過程

本校では1973年（昭和48年）に中高六年一貫教育をきめ、これにそった体育のカリキュラムを作成した。このカリキュラムにおける体育のめざすところは、体力・技術の向上、よりよい仲間づくり、さらには生徒一人一人が現在および将来の生活の中で積極的に運動を取り入れていくことによって心身ともに健康で豊かな生活を創造していく人間を育成することであった。したがってこのカリキュラムでは特に高学年で球技の種目や時間を多くとり生涯体育へつなぐことをめざすところに特色があった。しかし、その手段・方法としての選択制に関しては、いまだ教師中心の傾向が強く、今日論じられ実践されているようなものではなかった。その後、生徒の運動に対する興味・関心、心身の発達、社会情勢などの変化や指導要領の改訂とともに内容を精選し、また生涯体育への取り組みを明確にして新しいカリキュラムを作成した。具体的には、高校3年において、親しみやすい球技を7種目とりあげ、選択制男女共学とすることにした。なお、その準備過程として高校2年でも部分的ではあるが選択制男女共学（教師による種目選択）を取り入れた。

Ⅲ. 選択制のタイプと条件

現在、選択制のタイプとしては、1. 種目内選択 2. 種目選択 3. 領域選択 の三つが考えられている。本校では、生徒の興味・関心、男女共学の可能性、施設・用具などから種目選択のタイプを取り入れている。選択種目は、卓球、バドミントン、軟式テニス、バレーボール、バスケットボール、サッカー、ソフトボールの7種目である。(本年度はソフトボールは男女差を考慮して省いた。)これにより、単元の規模・構造、学習集団、指導者、施設などを次のようにしている。単元の規模・構造は中単元(ここでは21時間)、集中型である。学習集団は、学年内1クラス(高3C組男女計38名)と複数クラス(高3A B組男女 計76名)で、いずれも男女共学である。指導者は複数(2名)であるが、1種目1名または2種目1名で分担している。施設については、卓球台5台、バドミントンコート6面、テニスコート4面、バレーボールコート4面、バスケットボールコート2面、サッカーコート1面のうち、選択種目と人数に応じて変更しながら使用している。

Ⅳ. 種目選択および学習形態

種目の選択にあたって、授業のねらい、学習のしかたをプリントによって理解させる。

1. 授業のねらい

生徒一人一人が、主体的に選択した運動種目を男女混成集団によって長期にわたり、自発的・自主的におこない、その特性に触れることにより、運動(スポーツ)のおもしろさ、楽しさ、よろこびを味わい、現在のみならず生涯を通じて、自立的に運動に親しむ基盤をつくることである。

2. 学習のしかた

- (1) サッカーとバスケットボールを除いて男女共学でおこなう。男女差を考えてチーム編成、練習やゲームの行い方、ルールなどを工夫する。
- (2) 学習の計画、個人や集団の課題、学習の反省・感想などをまとめ、次の時間に活用する。
- (3) 男女混成による小集団をつくり、役割分担にしたがい自主的におこなう。たとえば学習の計画は、個人または各グループでたて、計画・運営係で検討し、教師の指導・助言を加えて実施する。

3. 種目の選択方法

選択計画表にしたがい、各自、年間2種目以内で選択させる。なお、施設・用具の関係で人数を調整する必要が予想されるので第2希望まで記入させる。

昭和62年度 選択計画表(種目、期間、定員)

期	1期(5月～7月)	2期(9月～11月中旬)	3期(11月中旬～1月)
高 3 A B 組	軟式テニス 男女 (24人)	軟式テニス 男女 (24人)	サッカー 男 (44人)
	バドミントン 男女 (18人)	バドミントン 男女 (18人)	バドミントン 男女 (18人)
	卓球 男女 (20人)	卓球 男女 (20人)	卓球 男女 (20人)
	バレーボール 男女 (24人)	バレーボール 男女 (24人)	バスケットボール 女 (20人)
	◎バレーボール……選択希望者が12人以下の場合はなくなり、バドミントンの定員が36人となる。 ◎バスケットボール……選択希望者が10人以下の場合はなくなり、バドミントンの定員が36人となる。		

組	期間	1期(5月～7月)	2期(9月～11月中旬)	3期(11月中旬～1月)
高3 C組		軟式テニス 男女 (24人)	軟式テニス 男女 (24人)	サッカー 男 (19人)
		バドミントン 男女 (18人)	バドミントン 男女 (18人)	バドミントン 男女 (18人)
		卓球 男女 (20人)	卓球 男女 (20人)	卓球 男女 (20人)
		◎バスケットボール……選択希望者が10人以下の場合はなくなる。		バスケットボール 女 (20人)

選択希望種目の調査用紙

()組 ()番 氏名 ()

1期(5月～7月)	2期(9月～11月中旬)	3期(11月中旬～1月)
第1希望種目	第1希望種目	第1希望種目
第2希望種目	第2希望種目	第2希望種目

昭和62年度 各種目の選択決定人数 (左はA・B組、右はC組)

種目	期間		1期(5月～7月)		2期(9月～11月中旬)		3期(11月中旬～1月)	
	男	女	男	女	男	女	男	女
テニス	12	12	13	7	11	10	9	9
バドミントン	18	18	6	12	15	21	10	6
卓球	8	8	0	0	13	7	0	5
サッカー								
							20	0
							19	0

V. バドミントン選択者による授業について

1. 対象 高3 C組 18名 (女子12名 男子6名)
2. 期間 1987年5月7日～1987年7月13日 (21時間)
3. 指導者 渡辺 幸子
4. 場所 奈良女子大学文学部附属中・高校体育館
5. 指導のねらい
 - (1) 自発的・自主的に学習をすすめる。
 - (2) 個人や集団で計画をたてることできる。
 - (3) 自分たちの集団にふさわしいゲームのしかたを工夫する。
 - (4) 教え、学ぶよろこびを体験させる。

6. 内容与方法

(1) 学習計画の作成

この授業では、生徒一人一人が自己の興味・関心、欲求にもとづく計画をもつことが何よりも重要であると考え、バドミントンに関しては、既習教材であることからそれが可能であると判断し、次のようにこころみた。

① 単元計画の作成

この作成にあたっては、計画作成の意図と、主としてゲームのしかたに関するプリントを用意し、これを手がかりとして一人一人に作成させた。

これについてまとめてみると、全員がゲームを計画の中に入れており、練習は半数の9名である。(表1) ゲームの計画は、男女混合によるチーム編成やゲーム場面の計画が圧倒的に多く、男女別によるものはきわめて少ない。また、個人あるいはペア単位の単独の場合が多く、小集団における個人またはペア単位などのものは少ない。ゲームのしかたは、個人またはペア単位によるリーグ戦形式が多く、グループ内個人またはペア、さらには他グループとの対抗戦形式は少ない。(表2) 練習の計画では、その時期と時間数は、単元の初期の段階で1回、すなわち50分か授業のはじめの15分程度の場合が多い。このように、単元計画における練習時間の確保はきわめて少ない。また、これを計画内容とした者は、どちらかといえば技能の初歩的段階の者やクラブ活動の経験をもった者である。以上にみる計画をタイプ別に分類してみると、単一固定型、単純反復型、多様統一型の三つに分類することができる。(表3)

表1. 計画内容

	(人)
練習とゲーム	9
ゲームのみ	8
不明	1

表2. ゲームのしかた

		(人)
男女混合	対個人	12
	対ペア	17
	対グループ内個人またはペア	7
	対グループ	7
男女別	対個人	1
	その他	1

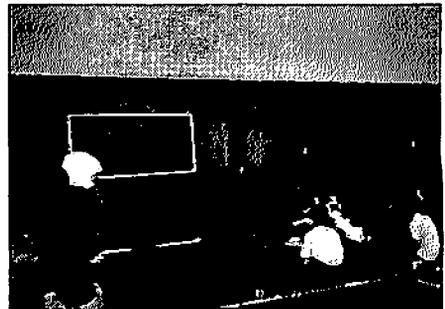
表3. 単元計画のタイプ

	(人)
単一固定型	2
単純反復型	6
多様統一型	9

② 毎時単位計画の作成への変更

各自が作成した単元計画をもとにし、計画・運営係で討議・検討し、まとめてクラスへ提案し、承認によって本単元の計画とすることをこころみた。(写真1) しかし、係のメンバー(3名)の協力関係が十分に確立されなかったこと、ゲームを中心とする計画が多くみられたことから、これを方針としてとりあげることにとどまり、細部にわたる計画をたてるまでにはいたらなかった。生徒にとって、長期にわたる計画は実際の活動とのずれが大きく、たえず修正

(写真1)



計画・運営係による計画の提案

する必要があるとの予想から十分な意味をもたないものとして受けとめられる傾向がみられた。したがってここでは「本時」の活動をベースとして、次時の計画を作成する毎時単位計画の作成へと変更した。(表4)

(2) 学習計画の実施方法

① 学習集団の編成

その1 { グループの数…… 3グループ
 グループ構成…… 1グループ6名(女子3名~4名、男子2名~3名)
 役割分担(計画・運営係1名、技術係1名、ルール係1名、用具・コート係1名、記録係2名)

その2 課題別グループ

その3 ペア単位のグループ

② 学習指導の形態

班別指導の形態と、いわゆる学級を小集団にわけ、それによって自主的に課題を解決していくグループ学習の形態をとったが、しだいに、ペアやグループのメンバーチェンジの要求が高まり、小集団による学習は形式的なものとなった。そこで、クラス(18名)を一つの集

表4. 学 習 計 画

時間	月日	内 容
1	5/7	グルーピング ゲーム(グループ内)
2	14	ゲーム(グループ内、ペアチェンジ) 役割分担
3	18	ゲーム(男女別)
4		
5	25	ゲーム(リーグ戦、ペアチェンジ)
6		
7	28	(体育大会)
8	6/1	
9		
10		
11	8	(予選リーグ、ペアチェンジ)
12		ゲーム(部制リーグⅠ)
13		(部制リーグⅡ)
14	15	ゲームと練習(希望別に)
15		
16	18	ゲーム(ペアチェンジ)
17	22	リーダーより提案(ペアについて) 否決
18		
19	7/2	ゲーム(リーグ戦、ペアチェンジ)
20	6	
21		
22	9	(短縮午前中授業のためなし)
23	13	まとめ ゲーム(グループ内)

団とみなし、2名（ペア）をその下位集団とするグループ学習とした。(写真2) なお、役割分担はそのままとし、係ごとにチームをつくり、役割に応じた活動をおこなうことにした。具体的には、次のようにおこなった。

単元の初期

1. 教師の計画によってグループごとに活動を展開する。
2. 各自が活動の反省・感想を書く。

単元中期以後

1. 各自が次の時間の計画をたて、教師の助言を加えながら計画・運営係でまとめる。
2. 課題ごとにグループをつくり活動を展開する。
3. 各自の計画がほぼ一致するようになるとペア単位で活動を展開する。
4. ペア相互の発言や行動をたしかめ用紙に記入する。授業の反省・感想も書く。

(写真2)



男女混成グループ(ペア)をつくる

7. 学習の評価について

(1) 形成的評価

① 教師による評価

少人数で、しかも、同一種目による同一場所での授業であったため、生徒の技能や行動について比較的容易に観察し評価することができた。ここでは特にゲーム場面におけるストロークの使いわけとポジションワークおよびグループワークについて評価した。

② 生徒相互による評価

生徒相互では、どのような評価がおこなわれているかを把握するために、ゲーム場面におけることばや行動の観察と記録をこころみた。また、授業終了後ペアを組んだ相手からかけられたことばや行動、相手にかけたことばや行動を記憶している限りで書かせた。表5はあるペアについてまとめたものである。

表5. ゲーム中の発言内容

(回)

項目	チーム	ベ	ア
		T君	Kさん
ほめる		10	0
はげます		2	0
指示する		10	0
なぐさめる		1	0
依頼する		1	0
あやまる		0	4

(2) 総括的評価

単元終了後、ここでは一学期末に評価項目にしたがって自己評価をおこなわせた。総括的評価は、形成的評価を基盤とし、この自己評価、教師の評価を合わせ、絶対評価によりおこなった。

<評価項目による自己評価の結果>

表6. 各種ストロークの上達状況 (人)

種類	段階	1	2	3	4	5
	スマッシュ	男	0	0	3	0
女		1	1	3	1	6
ハイクリヤー	男	0	0	1	3	1
	女	0	0	4	2	6
ドロップ	男	0	1	1	1	2
	女	0	1	2	4	5
サーブ	男	1	1	1	2	0
	女	0	1	1	4	6

男子では、スマッシュとハイクリヤー、女子では、ハイクリヤーに上達がみられるが、これ以外では、上達の程度に差がみられる。全体的にみて女子の上達がいちじるしい。

表7. 場面に応じたストロークの選択 (人)

性別 \ 段階	1	2	3	4	5
男	0	0	2	1	2
女	0	1	3	3	5

表8. 場面に応じた位置の選択 (人)

性別 \ 段階	1	2	3	4	5
男	0	0	2	0	3
女	1	0	2	2	7

表9. ゲームのしかたの理解 (人)

項目 \ 性別	男	女
他の人へ教えられる	2	6
他の人へ教えられない	2	4
わからない	0	1
記入なし	1	1

表10. 指導・助言 (人)

項目 \ 性別	男	女
よくしてあげた	1	4
あまりしてあげなかった	2	5
全くしてあげなかった	2	3

表11. リーダーへの協力 (人)

項目 \ 性別	男	女
よく協力した	0	3
ときどき協力した	4	7
あまり協力しなかった	0	1
全く協力しなかった	1	1

表12. 準備・整理運動の実施 (人)

項目 \ 性別	男	女
十分	1	1
普通	3	10
不十分	1	1

表7は場面の変化に応じて適切なストロークを選択し、活用できるかどうかを評価させたものである。表8も位置について同様に評価させたものである。場面に応じたストロークの選択・活用ができることは、場の変化に対する見透しがたかまってきたことを示すものであろう。また、位置の選択・決定は、ここでは各自のコートにおける活動範囲が明らかになったことを示すものであろう。

ゲームのしかたの理解は、ルールの理解と関係するものである。他の人へ教えられるかどうかによってみると、この理解が不足している者は女子にやや多くみられる。

指導・助言は、男子よりも女子に多くみられる。さらにこれを授業中の観察・印象によると、女子は同性、男子は同性のみならず異性へもおこなわれている。

リーダー（立案・計画係）への協力に対しては全体的に十分ではない。リーダーは選んだが協力はしないという学習集団であったことがうかがわれるが、ここではリーダーとなった者は、運動のよろこび、たのしさを味わうことはできなかったのではなからうか。

ほとんどの者が何らかの準備・整理運動をおこなっているが十分でない。今日、準備・整理運動の是非について論ぜられているが、生涯体育の立場から考えるならば、十分に行わせることを身につけさせたいものである。

以上、生徒の自己評価についてみてきたが、評価内容や基準の受けとめ方は個人によってさまざまであると思われる。今後は、さらに具体的な内容・基準を設定し評価しやすいようにしていきたいものである。

8. 授業の効果

単元終了後の授業に対する感想からこの授業の効果についてさぐってみると、男女ともに、男女共学に対する肯定的な評価がみられるが特に女子にそれが多い。(表13) この理由を資料(1)によってみると、男子にとっては女子に教えることにより女子の技能が向上していったことであり、女子はそれを受け入れ認めていることである。また、男子に挑戦することのおもしろさ、緊張感があげられる。また、男女ともにさまざまな人間関係によって学習場面にこれまで(男女別学)とは異なるふんいきが醸し出されたことによるものであると考えられる。(活気があってよい。自主性が出てくる。一緒に運動することはおもしろいなどの感想より。)しかし、男女別学を希望する者や感想を寄せなかった者の存在も見逃してはならないことである。

一応、ここでは以上の効果をあげることができるが、女子の技能の向上は、男女のどのようなかわり合いによっておこなわれたのかが今後、さらに明らかにしていかなければならない点であろうと考える。

表13. 男女共学に対する態度
(人)

態度 \ 性別	男	女
肯定	3	8
否定	0	0
不明	3	2

資料(1) 授業に対する感想

(男子)

- ・女子がうまくなった
- ・パートナー(女子)をいかに生かすかを考えるようになった。
- ・男女共学はよい。
- ・時には男女混合でおこなうのもよい。

(女子)

- ・男女共学の方が活気があってよい。
- ・男女一緒に運動できるのはおもしろい。
- ・男子が技術的な面でカバーしてくれるし、教えてくれるのでよい。
- ・男子によって能力が高められるのでおもしろい。
- ・みんなに自主性がでてくる。
- ・最初は男子がつまらなさそうにしていたが最後はみんなで楽しめるようになった。

VI. 今後の課題

以上、述べてきたように高3の選択制男女共学による体育の授業を実施してきたが、多くの問題点を含んでいることが明らかとなった。その中の主なものを次にあげ、今後、さらに実践を重ねることによって充実させていきたい。

1. 生徒が、自発・自主的学習をすすめていくためには、運動の技術、練習やゲームのしかた、グループ学習のすすめ方等に関する具体的な資料を十分に与えること。
2. 生徒による学習計画の作成にあたっては、教師の単元計画の骨子にもとづいて作成させる段階からはじめ、しだいに生徒自らによる計画の作成へとすすめた方がよい。
3. 学習指導の形態について、必修体育と選択制体育とのより一そうの関連をはかる。
4. 評価の内容・方法をさらに工夫する。
5. 各自の反省・感想・課題などを個人や集団にフィードバックさせ、有効に活用させる。
6. 運動や運動と人間、集団・組織などにかかわる理論学習を深める。

おわりに

選択制男女共学の体育は、理念としては、すばらしいものであると考えられるが、内容や方法について、私としては、いまなお試行錯誤的段階である。今後も、実践を重ねるとともに、多くの先達の実践・研究報告から学び、よい授業を創り出していきたいものと思う。

なお、この報告は、保健体育科でこの種の授業に対する話し合いや先生方の取り組みなどから学ばせていただいたことによってまとめることができたことを付記しておきたい。

- 参考文献
- 本校「研究紀要」 第15集 1973年
 - 本校「研究紀要」 第23集 1982年
 - 「学校体育」 1984年3月号 日本体育社
 - 「学校体育」 1986年11月号 日本体育社
 - 小林 篤 「体育授業の原理と実践」 1986年 杏林書院

地方都市と中心商店街 (Ⅳ)

寅 貝 和 男

1. はじめに

地方都市の問題に手をつけて6年になる。毎年毎年、一つ一つ勉強しながらの中間報告を発表してきたが、今回で一応の結論みたいなものを出した。極めて不十分な内容で、具体性に欠け、何ら解決策らしいものを出すことができなかつた不勉強を反省しつつ、一応の区切りをつけるように努めた。

この6年間、毎年数回、それぞれの都市の実態(とくに商店街の)を見るためにあちこち出かけたが、とくに東京近郊の諸都市はよく巡った。2回、3回と入ったところもあるが、地理はフィールドでの学習が大切であるから、実地見聞を重視してきた。しかしそれだけでは資料として不十分であるので、できるだけ客観的な資料を得るべく各市役所から、主として商店街関係の資料(商業診断報告書など)を提供してもらうように努めた。市役所によっては、とくに商業診断報告書は◎ということで提供していたゞけない所もいくつかあったが、多くの市役所から快く提供していたゞけたので大変助かった。とても感謝している。

地方都市といっても大都市郊外の地方都市と、大都市地域から遠くはなれた過疎地域などの地方都市とではその様子も大変異なるので、今回の小論はいろんなケースの中小都市を対象に筆を進めた。大きな相異は、大都市郊外の地方都市は主としてB型、その他の地方都市はその多くがD型、一部C型、B型もみられるというのが実情である。地方都市でもA、C型はそれぞれの地域にあっては拠点都市であるから、商店街も繁華でショッピングライフを楽しめる環境ができていところも多い。それに反してB、D型の中小都市は、その多くが人口の多少にかかわらず活気を失なってしまうのである。そしてその姿が端的に表れるのが商店街である。真昼間に歩いて、ほとんど人っ子一人通ってない商店街に出くわして、思わず息をのんだこともある。その商店街は別に一斉休業日でもなく、店はあいているのである。

最も印象に残った都市は佐久市(長野)である。市内中込地区のショッピングモールは素晴らしい。当日は秋晴れの抜けるような空の下で、この美しい(きれいな)中込グリーンモールの街路を散策してまわったが今でも忘れられない。しかし、同時に、このすばらしいショッピングモールが閑散としていたのは大変ショックであった。だが考えてみれば、人口約5万余の佐久市の、その中心人口約7,000余りの中込地区があれだけ立派でモダンな高原都市の景観をもった商店街を実現した意気に敬意を払いながらも、経済合理性の無視ないしは軽視がなかったか、と自問している次第である。

中心商業街区を整備することは大変なことである。とくに財政的にとぼしい地方中小都市にとつては並大抵のことではない。また地元商店街にとつてもなおのことである。しかし、中心商店街を改造・整備することなしに地方中小都市の立て直しはないと考えている。そのためには市役所その他の官庁、金融機関の支店、バスターミナルなど集客機能をもった諸機関の集約、分散している近隣商店街の統合・駐車場・駐輪場の整備といったことも考えなければならない。都市計画の問題で

もあるが、計画図はあっても、実際は、スプロール化されたまゝの状態では放置されている場合が少なくない。こうした現状を改革しない限り、地方中小都市の衰退を回避することはできない…というのが、あちこちの地方都市を見てまわった筆者の結論である。

一般に、地方中小都市は、人口集積でも商店街分布でも、いずれも分散的であるという点に特徴があり、課題がある。例えば、小平（東京）や座間（神奈川）などのように、他の町村を併合して別個の核を抱え込んだ都市ではなく、単一の村から町、町から市へと発展してきた都市でも、巨大都市東京の外延的エネルギーの波及を受けている都市では、私鉄郊外線の駅ごとに人口が集積し、それに対応する形で小規模な商店街を発達させるといった中心性の欠除した状態が現出し、購買力の流出という課題を避けて通れなくなっている。このように、市内の分散化傾向は町村合併都市特有の現象ではなく、単独で市制を施行した都市の場合にもしばしば見られる。いわんや、複数の町村合併によって成立した都市ではなおのことであり、それぞれ旧町村の中心集落に立地している近隣商店街の並存状態がそのまま続いているところが多く、人口の減少とともに都市機能の衰えも目立ち、黙視できないところまでに至っている都市もある。以下の小論は、こうした意図のもとに、いろんなケースの中小都市の現状を考察し、できうれば、あるべき方向性をも明らかにしたいという主旨で論じて進めていった。なお、都市類型化の基準などを次に資料として掲げた。

<資料>

都市の分類の基準

類型については前回第1集で行なった4つの型をそのまま用いる。そして今回はそれら4つの型に分類するにあたっての基準を変更した。なお、第1集で掲げた4つの類型を再び掲げる。数値は、昭和40年度国勢調査によって求めている。

- A…………市街地規模は大、周辺部の集落分布も密であるタイプ。
- B…………市街地規模は小、周辺部の集落分布は密であるタイプ。
- C…………市街地規模は大、周辺部の集落分布は粗であるタイプ。
- D…………市街地規模は小、周辺部の集落分布も粗であるタイプ。

そして、今回用いた基準は次のとおりである。

- ㊲ A・C型は人口集積の比重が1.64以上（県庁所在地の最低数値以上であるということ）。
- ㊳ B・D型は人口集積の比重が1.50以下（D I D人口でははゞ全市人口の1/3以下）。
- ㊴ A・B型はD I D以外の人口密度が全都市平均の266以上。
- ㊵ C・D型はD I D以外の市域の人口密度が266未満。

なお、1.50以上1.64未満の都市については、もう少し考察の余地を残したいが、全体的には比較的未成熟な都市が多いように思う。

以上の基準に若干の注釈を加える。まずD I Dをもたない都市については、全市域の人口密度がそのままD I Dを除く市域の人口密度となり、比重は1であるから、成熟度の最も低レベルの都市であるということになる。従ってあとは、前述の㊲・㊵を用いれば、B型またはD型への分類が可能である。また逆にD I Dが全市域を占めている都市は当然A型の究極の姿である。なおこのことに関連して、D I D人口が95%以上の場合も同様にA型に分類した。というのは、大都市郊外の面積の狭い都市の場合、残る5%未満の人々の住んでいる地域がほんの一部分に限られてしまい、それを郊外地域として設定することに意味がなくなってくるからである。

また、一つの都市に複数のD I Dが存在するときの取り扱いはいと同様に市庁所在地のD I D

でもって代表させ、いずれのD I Dも市庁所在地でないときはその中の最大のD I Dをもってその都市を代表させている。このことは小論Iでも論述したように、例えば同じ人口3万のD I Dといっても、それが単一のD I Dである場合と2つ以上のD I Dにわかれたものの合算である場合とでは、おのずとその持つ意味が異なってくるからである。一般に1つの都市にD I Dが複数で存在することは、それだけ中心市街地の機能の分化を意味する。なぜなら、分化した市街地の一つ一つはそれだけ小規模になり、当然、商店街の機能や景観も異ってくるのである。

奈良女子大学文学部附属中・高等学校研究紀要第25集(1984年)P.77より

1. 40年度国勢調査でのB・D型都市を見る。

(a) なぜ古い国勢調査結果を用いたか。

昭和55年度国勢調査でのD I Dによる人口集積でみる都市の類型化を試みたのは研究紀要の24集であった。結果は大体予想どおりに地方中小都市がB・D型に分類された。しかしA型に分類された大都市郊外の住宅都市などの商店街の分布をしらべてゆくと、分散的かつ最寄性のつよい近隣商店街が分布している実情を知るとき、これらの都市は果たしてA型か?という疑問がでてきた。これまでも述べてきたように、住宅都市など大都市郊外の中小都市は、1960年代中頃からの高度経済成長に沿って急激に都市化がすすみ、みるみるうちに宅地化し、市街地となったものが大半である。従って、これらの都市は従来の在町的な商店街のまゝで人口だけが急増し、商店街の近代化をすすめるいとまもなく都市化・スプロール化の波に呑み込まれ、無秩序な市街地をもつに至っている。

では、これらの都市が都市化の波をかぶる以前の集落分布はどうなっていた?ということでもD I D調査のはじまった頃に逆のぼって同じ方法で分類することを試みたのである。D I Dの調査がはじまったのが昭和35年の国勢調査であるが、手許には昭和40年度国勢調査「わが国の人口集中地区」(総理府統計局)があり、昭和35年度結果にもふれられているので、これを用いて調べた。主に、D I D人口が約1/3の都市について調べた結果が下の第1表である。なお、市名および行政区域については昭和60年度時点の都市に組み替えてある。

表1 B・D型都市一覧(昭和40年国勢調査によぬ試み)

B型	歌志内	多賀城	名取	天童	下館	結城	竜ヶ崎	水海道
	常陸太田	勝田	北茨城	岩井	牛久	下妻	小松	真岩
	○伊勢崎	太田	○富狭	●安岡	●所草	●加越佐	○東入佐	岩蓮東
	春日部	●坂戸	●八潮	●北新	●木更津	八千代	流山	○我孫子
	○幸旭	●三習志野	●東久留米	●鐵ヶ谷	●八日市場	●稲座	●秋川	○小孫平
	●四街道	○東大和	○厚木	○武蔵村山	●多野	●稲座	●伊勢原	●海老名
	鎌倉	○相模原	○厚木	○桑野	●大野	●黒波	●伊勢原	●海老名
	●南足柄	●綾瀬	○白山	●豊中	●更野	●羽春日	●美濃川	○碧土
	松任	●可安	藤西	●浜尾	●北江	●春日尾	●豊小	○碧土
	各務原	●安大	西府	●尾多	●江鈴	●八幡	●小張	○碧土
	豊東						●尾張旭	草津

B型	守笠 竜有 ●東 ●宗 津富	山岡 野田 予像 見士	宇井 西出 南●小 宇●つ く	治原 脇雲 国郡 佐ば	●城 泉小 倉●土 多●筑 所	陽南 野敷 佐久 野沢	枚大 阪狭 防柳 諫日	方山 西府 川早 向	富藤 井天 光八 ●松 指	田林 寺理 女浦 宿	松交 桜新 筑荒 ●加	原野 井陽 後尾 田	大姫 御鳴 行玉 都	東路 所門 橋名 城	羽加 生○観 大○宇 四○	野川 駒寺 川土 市	曳古 音
D型	美花 角上 ○笠 成水 ○飯 中津 下 亀平 ●東 室武 豊後 鹿●杵	唄卷 田山 間田 見田 川岡 田島 戸雄 高田 屋筑	芦北 東村 日勝 小矢 ●茅 美新 河内 ●大 庄安 ○鹿 竹阿 久	別上 根山 光浦 部野 濃城 野田 原芸 島田 根	○江 久●泉 長○今 ●君 小伊 瑞○名 三●江 長○中 福○日 出	別慈 井市 津松 那浪 張木 津門 村江 南水	士遠 ○本 尾大 鴨●珠 駒ケ 惠亀 三○柳 土佐 平小 大	別野 庄沢 原川 洲根 那山 田社 井水 清戸 林口	○伊 陸前 ●男 南矢 富塩 ○大 掛鳥 橋高 美宿 本西 ●国	達田 高鹿 陽板 津山 町川 羽本 梁祢 毛渡 都分	○五所 江湯 相黒 ○小 都飯 御熊 ○倉 新阿 甘○牛 ●え ●垂	原刺 沢馬 磯谷 留山 場野 吉見 南木 深の 水	む●二 ○大 ○二 藤 栃大 塩裾 舞○益 竹大 豊菊 ●串 ●西	つ戸 曲松 岡尾 月尻 野鶴 田原 洲前 池間 表	大鹿 寒い 飯新 韭佐 天綾 安○三 北伊 ○日 川●備	船角 河江 わき 能井 崎久 竜部 来次 条里 田内 前	

なお、都市名の頭に○印を付したものは比重1.41~1.50の比較的中心性の高いと考えられる都市であり、●印を付したものは、当時、DIDをもたなかった都市である。さらに、DIDの調査がはじまった昭和35年国勢調査時点にまで逆のぼって調べると、次の諸都市が加わる。

表2 B・D型都市追加分

B型	取手 上尾	●富士 寝屋 川	○七尾	●岩倉	●向日	●長岡	●八幡	●大野城
D型	十日町	○見附	糸魚川					

以上の表からもわかるように、とくにB型には住宅都市機能の高い都市が数多く見られる。一般に、これらの都市は、東京・大阪・名古屋の三大都市圏にあって都市化の波をまともに受けており、自らの内因的条件によって市街地を拡大したのではなく、大部分が、巨大都市の膨脹という外因的条件による人口急増の結果である。これらの都市は、もともとは、人口規模にして5～6,000から10,000人程度の町であったから、商店街もそれに見合ったまちの商店街の景観しかもっていないケースが多い。中心市街地の規模が小さいから、商店街の規模と内容も近隣商店街のそれであり、買回り品の多くは、市外のより大きなターミナルで求められるという実情にある。しかも、●印を付した諸都市については、調査時点ではDIDを形成するに至っておらず、人口にして5,000人にも満たない小郡邑が1ないし複数存在する準都市地域であったから、商店街の形成すらおぼつかない都市も中にはある。これらの住宅都市は、今日では、統計上ほとんどA型化しているが、商業街区の実態を見る限りB型のそれであり、都市の顔としての商店街の整備が待たれるところである。

とくに、住宅都市にあって明確に複数の核を有するものは、鎌ヶ谷、秋川、武蔵村山、小平、狭山、越谷、八千代、流山、我孫子、稲城、座間、羽曳野、交野、可児、江南、大府、松原、枚方、習志野、宗像、新座等であり、三郷、八潮、多摩、海老名、綾瀬、豊明、城陽などの都市では、中心となる街区を見出すことも困難である。一般的特徴としては、ほゞ類似の規模・内容をもった比較的短い街区延長の商店街を複数立地させており、それだけ、個々の商店街の魅力は少ない。このことが、人々を市外に流出させ、ひいてはその都市の衰微にもつながりかねない危険性をも含んでいる。そのため、いくつかの都市では再開発整備を行ない、中心商店街の育成につとめているが、多くの都市は、短い線型商店街が立地しているだけの姿のまゝで今日に至っているのが実情である。

D型の場合はさらに厳しい現状である。とくに北海道・北陸や西日本の山陰・南四国・九州などの中小の都市では人口そのものを激減させており、かつての市制の規準であった3万人を大きく割り込んでいる都市も少なくない。下の表3が人口3万人を割っている都市である。そのうち、●印を付したものがD型に属する。なお、B型には○印を付した。

表3 人口3万人未満の都市(昭和60年度国勢調査による)

●陸前高田	●尾花沢	●勝浦	●栃尾	●新井	●両津	●珠洲	○羽咋
●塩山	●韭崎	●飯山	●天竜	●鳥羽	●宮津	●江津	●高梁
●新見	●庄原	●長門	●美祿	●伊予	●安芸	●宿毛	●土佐清水
○多久	○平戸	○松浦	●牛深	●菊池	●豊後高田	●杵築	●竹田
●串間	●えびの	●阿久根	●大口	●西之表	○加世田	●垂水	●赤平
●士別	●富良野	○歌志内	●砂川	●日光	●美濃	●尾鷲	●熊野
●室戸	●山田	●津久見					

全51市のうち、D型だけで37市、B型の6市を加えると実に43市が中心市街地の小規模な都市であることがわかる。これらの諸都市はいわゆる過疎化現象がつづいており、人口減少に歯止めをかける何らかの対策が急がれるところである。たとえば商業街区の整備による活性化も必要であろう。場合によっては大型店の進出を受け入れ、共同事業などによる共存共栄の道をさぐることも必要と考える。また、工場その他の事業所の誘置、地場産業への助成などを通じ

て地域産業の発展を促す施策もさらに強力に行なわなければならないだろう。ともあれ、いろんな手をつくして人口減少を喰い止めることが肝要である。

表3は昭和40年度国勢調査結果で分類した都市が昭和60年国勢調査時点ではどのようになっているか、をよく示めているだろう。D型都市は昭和35年時点での分類によるものも含めて140市ある。そのうちの26.4%、つまり4分の1強の都市が人口3万未満となっており、3万人以上はあるが、人口を減少させている都市30市を加えると実に67市、47.9%と半数に近い都市が人口減少に見舞われていることになる。これで中心商店街が育つわけがない。こうした状態ではそれぞれの市だけでは、最早、打つ手が無いといった事ではなかるうか。当該の道県や国を含めた行政の対応が必要となってきたのである。

(b) 昭和60年国勢調査で追加されたB・D型都市

こゝでは表1、表2以外にあらたに分類された都市をはじめ、表1、表2の時点よりも比重を下げた都市も掲げている。つまり表1、2で○であったものがなくなったとか、DIDが消失したなどの都市である。また名張のようにD型→B型に移った都市もある。

表 4

B型	古川 ○滑境	石川 ○砺波	岡波 ○善通寺	勝上 ○普通寺	田田 ○伊予	北茨城 ○刈谷	羽生 ○蒲直	館山 ○名柳	野田 ○大和郡	富山 ○御	津坊
D型	夕張 ●美祿	張祿 ●阿南	今市 ○両須	津崎	武生 ●出水	大町	三木	倉吉	益田		

この表の中でいわゆる「発展した」都市は名張市である。名張市は市域全体の人口が増加しており、昭和40年に30,084であったものが、昭和60年には56,474となっており、DIDも1つから3つとなっている。これは、当市が近鉄大阪線沿線にあって、宅地造成や列車増発などで新しい住宅団地が生まれ、地域一帯の人口が急増したことによるものである。

表4に掲げた都市は、夕張・美祿などの産炭地や一部の都市を除いては、全体としては人口は増加しているのであるが、その割に中心集落があまり発達しなかったし、中には●印をつけた都市のように衰微気味の状態もみられる都市である。

もちろん昭和60年国勢調査でB・D型の類型からはずれる都市もある。次の表5がそれらの都市である。

表 5

芦戸 ○所越 ○鎌ヶ ○相模	江別 ○飯能 ○入間 ○小厚	士別 ○加須 ○蓮田 ○東大和 ○大和	歌志内 ○東松山 ○幸手 ○東久留米 ○座間	伊達 ○岩槻 ○八潮 ○秋川 ○伊勢原	五所川原 ○春日部 ○多摩 ○南足柄	大曲 ○狭山 ○佐原 ○武蔵村山 ○豊川	日光 ○草加 ○成田 ○鎌倉 ○碧南
-------------------------	-------------------------	---------------------------------	------------------------------------	---------------------------------	-----------------------------	----------------------------------	--------------------------------

○豊明 ○枚方 ○八幡 姫路 むつ ○四街道	○大府 ○河内長野 ○向日 ○加古川 ○名取 ○春日井	○江南 ○松原 ○長岡京 ○生駒 大館 舞鶴	○四日市 ○大東 ○上尾 防府 長井 ○城陽	熊野 ○羽曳野 ○取手 ○新南陽 二本松 ○泉南	○草津 ○大阪狭山 ○富士見 室戸 ○牛久 ○筑紫野	○八日市 ○藤井寺 ○岩倉 日田 ○北本	○宇治 ○交野 ○大野城 津久見 ○我孫子
---------------------------------------	--	---------------------------------------	---------------------------------------	---	---	----------------------------------	-----------------------------------

上の表5のように86の都市が比重1.50を越えており、そのうち○印を付したものが大都市郊外に位置する都市である。それらは66市を数え、全体の76.7%を占めている。都市の位置からもわかるように、大部分が大都市郊外にあって住宅都市機能をもっている。従って、前述したことであるが、昭和40年国勢調査結果による類型化を適用することはまちがっていない。それは、これらの都市の多くが、今日でも成熟した中心市街地、中心商店街を形成していない事実からも明らかである。そのことについてはこれまでの研究紀要掲載の小論で明らかにしてきたが、本稿においてもいくつかの例をあげて述べるつもりである。

(c) 昭和60年国勢調査で人口20万以上のB・D型都市をみる

人口20万といえはかなりの大都市である。かつては人口10万人以上で大都市といわれていたから、20万の都市といえは県の中核都市であり、都市内部の機能分化もすすみ、商店街もアーケード、カラー舗装、さらには買物公園化されたショッピング街などを有する都市が一般的である。では下の表6に掲げた都市はどうか、そんな観点から考察をすすめたい。

表 6

市名	面積	人口	人口密度	比重	DID数	備考
越谷	59.7	253,479	4,243.7	1.36	2	越谷、蒲生
市原	366.7	237,617	648.0	1.05	5	姉崎、五井、八幡宿
相模原	90.8	487,778	5,318.7	1.15	4	相模原、橋本、淵野辺、上溝
春日井	93.0	256,990	2,762.4	1.13	3	勝川、鳥居松、味美、高蔵寺
豊田	289.7	308,111	1,063.6	1.13	2	
枚方	64.5	382,257	5,924.6	1.09	4	枚方、牧野、中宮
姫路	271.7	452,917	1,666.9	1.34	7	姫路、飾磨、広畑、網干
加古川	137.9	227,311	1,648.3	1.25	1	
寝屋川	24.0	258,228	10,759.5	1.30	2	萱島、寝屋川、郡
倉敷	299.0	413,632	1,383.4	1.11	7	倉敷、児島、玉島
富士	215.3	214,448	995.9	1.24	5	富士、吉原
四日市	197.1	263,001	1,334.2	1.46	3	四日市、富田
いわき	1,230.0	350,569	285.0	1.11	7	平、常磐、内郷、磐城、勿来
所沢	71.8	275,168	3,830.3	1.39	2	

※比重は昭和40年国勢調査結果で算出した。

表6の都市のうち、倉敷・富士・いわきの3市は備考に書いた都市が合併して成立しており、出発点から大きな別々の都市の複合体である。例えば倉敷の場合、旧倉敷市自体が倉敷と水島という2つの核心地を有していた上に、玉島市、それに味野・下津井などから成る児島市を合併しているので、昭和40年当時で、現市域の範囲では7つのDIDを持っていた。いわき市においても同じことが言える。備考に記した5つの都市が合併して成立したので、平が他の都市よりもやゝ人口において勝るものの、人口分布は分散的である。一方、富士市は、旧富士市と吉原市が合併して成立した。それぞれ昭和40年国勢調査の人口で富士が53,247人、吉原が90,224人と、吉原に比重が大きい複合都市である。次の表7にこれら3市のDIDをまとめた。

倉敷のI、いわきのIともに人口は約3万人、他のDIDよりは大きいものの、頭抜けて大きいわけではない。比重はともに1.11と極めて小さい。これら二つの都市は、昭和60年国勢調査結果での比重でも倉敷I（倉敷+水島）が1.15、いわきI（平+内郷）が1.18と低い数値をしめしている。それだけ、この二つの大都市における中心市街地の比重は小さいといわなければならない。

一般に昭和40年国勢調査時点でDID人口3万クラスの都市をみると、能代、古河、栃木、佐野、国立、柏崎、新発田、新湊、敦賀、上田、岡谷、高山、富士宮、磐田、松阪、高砂、海南、都城、名瀬、椎内、留萌、千歳といったところで、昭和60年国調時の人口で都城（13.2万人）が最も大きな都市であり、海南や名瀬のように5万人前後の都市もある。とても35万～40万人の大都市の中心市街地でないことがわかるだろう。そのことは表6の他の都市にもあてはまる。

それぞれの都市の中心となるDIDの人口をみると越谷(22,907)、市原(5,689)、相模原(31,266)、所沢(26,947)、春日井(16,299)、豊田(13,845)、枚方(13,017)、加古川(22,373)などで、比較的規模の大きい寝屋川もふくめて中小都市クラスの中心市街地だといわざるをえない。もっとも、四日市(79,894)や姫路(106,365)はさすがに地方中核都市クラスの中心市街地をもっており、B・D型

の中では成熟した中心市街地が形成されている都市である。

相模原と春日井については「地方都市と中心商店街(Ⅲ)」(研究紀要 第27集・1986年)でくわしく考察した。そして春日井市については「味美・勝川・鳥居松・高蔵寺ニュータウンの四地区が並存する複核都市である」とし、さらに「25万都市としては数少ない商業地拡散型、

表 7

	DID人口	割合(%)	地区名	比重
①倉敷	96,819	100.0		
I	30,027	31.0	倉敷	1.11
II	18,306	18.9	水島	
III	5,674	5.9		
IV	15,258	15.8	沖熊他	
V	13,551	14.0	味美	
VI	5,585	5.8	下津井他	
VII	8,418	8.7	玉島	
②いわき	125,690	100.0		
I	34,837	27.7	平	1.11
II	15,643	12.4	内郷	
III	24,720	19.7	常磐	
IV	28,669	22.8	小名浜	
V	8,895	7.1	江名	
VI	5,237	4.2	勿来	
VII	7,689	6.1	四倉	
③富士	55,444	100.0		
I	33,116	59.7	吉原	1.24
II	22,328	40.3	富士	

商業中心機能の未形成な都市である」と結論づけた。また相模原市についてはJR線や小田急線などの駅を中心に7つのセンター（①橋本地区、②JR相模原・西門地区、③相模大野地区、④渕野辺地区、⑤上溝地区、⑥小田急相模原地区、⑦東林間地区）を特化し、なおかつ、問題点を次のように指摘した。なお、新しい資料もふくめて再掲・再論する。

- (1) 市全体の核となるべき中心商店街が存在しない。
- (2) 広い吸収力（集客能力）をもつ中心的な商業施設が不足している。
- (3) 全体に最寄品中心の商業地であり、買回り品の多くは町田・東京等で購入されている。
- (4) 交通施設の未整備が目立ち、安全性・利便性に欠ける。

こうした問題点は市域が広く、商業集積地が分散しており、町田等と強力に対抗できる中心商店街をもたない相模原市の宿命かも知れない。相模原市は前述したように、7つのセンターからなるB型都市である。

越谷、市原、豊田等については、簡単に言えば、市原は八幡宿・五井・姉崎の3つの町を中心とする複層の都市であり、越谷は越ヶ谷・蒲生・大袋地区に人口や商業街区が集積する複層構造をもっている。そして豊田は旧挙母町を中心とする単核ではあるが、近年、周辺部に人口集積の著しいB型都市である。

最後に人口15万人以上というかなりの大きな都市を掲げておこう。なお人口は昭和60年度国勢調査結果・中心のD I D人口・比重等については昭和40年度国勢調査結果によっているのはこれまでと同様である。

表8 人口15万人以上、20万人未満のB型都市

市名	面積	人口	人口密度	D I D数	中心D I D人口	比重	備考
草加	27.6	194,205	7,049.2	2	33,485	1.49	
鈴鹿	195.9	164,936	842.0	2	6,085	1.06	神戸
宇治	67.3	165,411	2,458.2	3	19,043	1.33	
春日部	38.0	171,890	4,528.2	1	13,354	1.40	
小平	20.9	158,673	7,610.2	3	33,193	1.22	一橋学園
大和	28.6	177,669	6,214.4	2	18,642	1.26	
厚木	92.9	175,600	1,891.0	1	14,733	1.42	
上尾	45.6	178,587	3,916.4	※ 5	※ 32,987	※ 1.26	

※上尾については昭和35年国勢調査で算出している。

表8の都市のうち、鈴鹿と小平についてはそれぞれ「地方都市と中心商店街」のⅡおよびⅢで詳述した。鈴鹿の場合は、地区別の商店数で白子・鈴鹿・牧田の3地区が俤出しており、当市の三極化をしめすものであることを指摘してきた。

他方、小平についても次のように論述した。（研究紀要第27集 P. 186より）

ここで商店街の景観を簡単に述べる。

⑦ 小川駅付近

駅西側の駅前商栄会は西武国分寺線に平行に南北につづく線形商店街である。店舗集積は、「通り」の西側はまずまずであるが東側は切断が多い。とくに気になったのは店舗の老朽化したものが目立ち、商店街としての訴求性に欠ける。道幅は狭く歩車道の区分はない。

これに対して駅の北側から西へ伸びる中宿商店街は中々まとまりのある商店街で、商店街の両端と中ほどの計3か所にアーチが立っており、東端と中ほどのアーチの間はアーケード街となっている。店舗集積もまず良好で、商店街としての訴求性も高い。ただ、この附近全般に言えることは、小平市のほとんどの商業街区がそうであるように、自然発生的な近隣商業街区である。

④ 一橋学園駅付近

駅を中心に東西南北に商店街が伸びている。最も繁華な景観を見せているのは駅北口から北へ伸びる学園一番街とそれにつづく学園坂商店街で、それぞれに店舗密度は高い。次いで駅北口から東にのびる学園東中央通り商店会で、駅に近い西部は金融機関の集積もあってよく賑っていた。しかし商店街の東部は店舗密度は低く、いたる所で切断が目立った。そして何よりも車輛の通行が激しく、幅 1.5m ほどの歩道があるが、おちついて買物する雰囲気はない。

駅の西側を南北にのびる駅前商店街および南口商店街は、あわせて約 1,000m の街区延長を持つ商店街である。店舗集積はアーチの区間は高い集積がみられるが、その他は工場、空き地、駐車場、民家などによる切断が目立ち、とくに街区の南の方にその傾向が著しい。

前述した学園東中央通り商店街を西武多摩湖線の踏切を渡って西へつづくのが西商店街であるが、当然のことながら車輛の通行は激しい。それに対して店舗集積はきわめて低く、商店街というものはばかりである。

⑤ 花小金井駅付近

中心となるのは花小金井駅前と駅東側を南北に貫く通りで、西武新宿線北側が花小金井商業会、南側はせいぶ通り商店会である。最も賑うのは駅前通りと西武線北側の花小金井駅前通りの南部で、いずれも花小金井商業会に属する。また、駅前通り西端には核店舗西友があり、顧客をよく集めている。ただ、拓大一高による切断が大きく、逆Lの角の部分が切断された形になっている。せいぶ通りは店舗集積は低く、通りも閑散としていた。

「商店数では小川駅周辺が 200 店、小平駅周辺が 104 店、一ツ橋学園駅周辺で 294 店、花小金井駅周辺で 162 店となっており、これらの商店街区のうち大型店を立地させているのが一ツ橋学園駅周辺を除く 3 つの街区となっている。そしてバスターミナルとしては小平駅や花小金井がまとまっている。このように見てゆくと、これらの各駅周辺のいずれが中心街区と認められるかという「難問」に答えるのはとても困難である。業種構成を見てもいずれも近隣性が強く、ほとんどの商店街で最寄品店の割合が買回品店の割合を上まわっている。研究紀要第 27 集（1986 年）の P. 185 に小平市商店会リストを載せておいたが、それを見ても一つを除く全てが近隣型商店街として位置付けされている。…以上が小平市に関する商店街の要約である。

さて、表 8 でもわかるように、これら 15 万都市も、中心の D I D は 3.3 万人までで、鈴鹿の中心をなす神戸の D I D は約 6,000 人である。また、鈴鹿以外は東京や京都の郊外に位置する衛星都市であり、住宅団地群が林立している。そして人口が急増し、市街地が拡大して A 型化したのであるが、中心となる商業街区は大きく変化しているわけではない。せいぜい駅前に大型店が建ち、駅前通りが整備されている程度である。人口 6～7 万の日田（大分）や掛川（静岡）などと同じパターンといえるだろう。例えばこのグループでは最も人口が多い草加市を簡単にみよう。

草加市（埼玉）は東京 23 区の北側に隣接して位置し、かつては奥州・日光街道の宿場町を基

盤に発達した都市である。都心まで50分という東京近接性と交通条件の便利さゆえに、今日では東京の住宅衛星都市としての特色をもっている。しかも、こうした立地条件ゆえに急激な都市化の進行による交通・道路網などの都市基盤整備や市街地整備は立ち遅れている。

しかるに草加市の商業集積は、市街地形成、鉄道駅（新田、松原団地、草加、谷塚の4駅）および大型店の進出などによって分散している状況である。また、草加市の中心商業地であった草加駅前および本通り商店街は、駅前整備の遅れや環境変化（モータリゼーションの進展など）への対応が不十分なことから、商業力を弱体化させており、現在は草加市の中心商店街というべき商業地が見当たらない状況にある。これでは購買力の市外流出が進むことも考えられ、早急に魅力ある中心商業地の整備が必要となっている。

草加市の商店街は東武鉄道の上記4駅を核としてその周辺に分布しており、いわば4極分散型となっている。それら商店街の分布・形成上の特徴をみると、次のようにまとめられる。

- (1) 駅周辺と大型店周辺とに商業集積が分散している。
- (2) 松原団地内の商店街をのぞき、大部分の商店街が自然発生的な路線型商店街で、歩車道区分のある商店街が少ないことから、歩行安全性が阻害されている。
- (3) 大型店の出店後、その周辺に商業集積がなされ、商店街の形成がみられる。
- (4) 市周辺部住宅地の商店街は、地区単位で形成されているものが多い。

商店街の業種構成から判断すると、草加駅・新田駅付近の商店街に比較的買回性の強い商店街もみられるが、市内の商店街の大部分は最寄品主体となっている。

以上のような特徴は何も草加市だけのものではない。大都市郊外の住宅都市機能の高い中小都市はほとんどこのような分布・形成上の特徴をみることができる。ともあれ、巨大都市周辺に発達した人口急増の都市は、人口規模こそ府県単位の中核都市としてのものをもっているが、多くの都市では、その市域内の中心商業地すらも形成させられていないのが実態である。そのため、人口は増加しているが、購買力はどんどん流出し、文字どおり食べて寝るだけの機能しかもたない都市となってしまったというのが現状である。

2. 国土地理院地形図（2.5万分の1）で見るB・D型中小都市

この項では、B・D型都市の各都市域内の市街地を含めた集落分布の特徴はどのようなものかを見てゆきたい。こゝでは、実際にあちこちのB・D型の地方都市の市街地附近の図を掲載したが、とくに、B・D型都市の概略が把握できるように配列した。図はいずれも国土地理院発行の2.5万分の1地形図を50%に縮小したものを使用している。なお、図中、実線で囲んだり黒くぬりつぶしたりした部分が地形図で「建物の密集地」とされた箇所、いわゆる密集市街地の部分である。

(a) 地形図にあらわれたB型都市

次頁の図1は高崎線に沿って発達した鴻巣市と北本市で、いずれもかつての中仙道の宿駅起源の町である。次頁の図1でもわかるように、鴻巣市街地（A）は駅前と旧中仙道沿いにかかなり大きな規模で広がっているが、北本市街地（B）は駅前から旧中仙道に至る小規模なものにとどまっている。昭和40年当時の国勢調査結果でも、鴻巣市は16,013人のDIDDを有していたが、北本市のDIDDは形成されていなかった。現在は、北本市、鴻巣市ともに中心市街地のDIDDは3万人余りの規模であるが、景観上は鴻巣市の方がはるかに繁華であり、その意味では次頁の図1はそのことを正しく反映しているといえよう。北本市はまぎれもないB型都市である。

次頁の図2、図3は武蔵村山市および小郡市のものである。いずれも青梅街道や県道甘木一鳥栖線沿いに発達した小規模な市街地が古い集落であるが、近年、それとは別個に住宅団地群が立

図1 鴻巣市・北本市(埼玉)

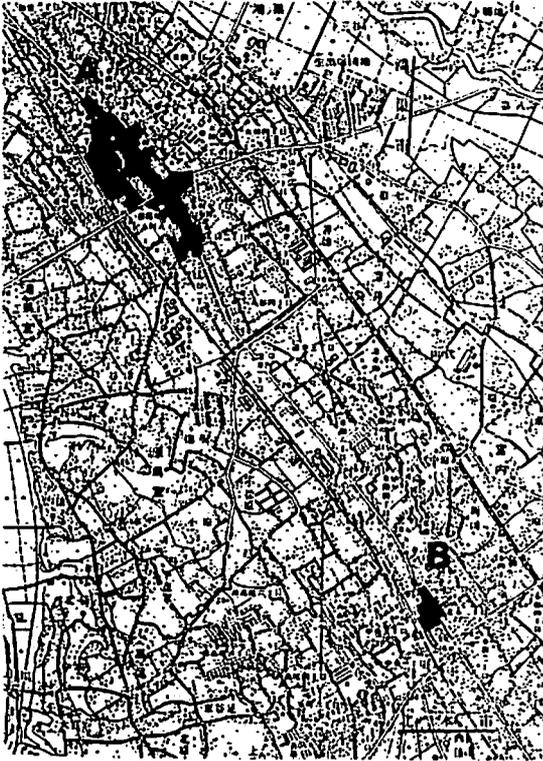


図2 武蔵村山市(東京)

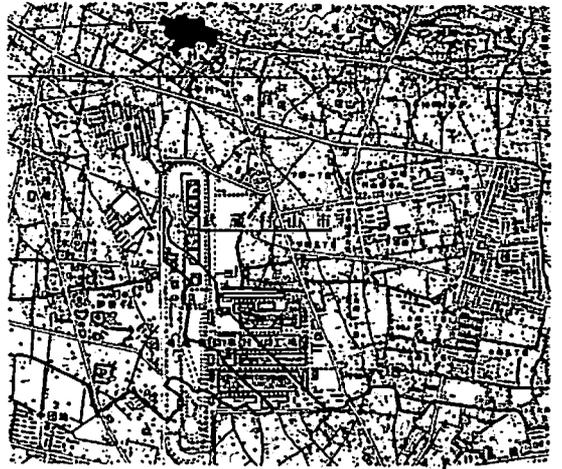


図3 小郡市(福岡)



地し、住宅都市機能を高めている。この両市は、昭和40年国勢調査時点においてはD I Dを形成しておらず、今日においても明確な中心商業地の形成がみられない。小郡市においては、西鉄小郡駅前から西の方へ、街区延長は短いものの、やゝ繁華な商店街が形成されている。

次頁の図4は名古屋市南部、知多半島の入口の位置にある製鉄都市東海である。上野町(名和)と横須賀町が合併して成立した都市であるが、市街地も北端の名和と南端の横須賀に集積しており、またD I Dもこの2つの市街地に形成された複眼の都市である。その後、名古屋市の人口ドーナツ化が、東海市内丘陵部の荒尾・富木島・加木屋地区の人口増をもたらし、急激に都市化が進んだ。その結果、市域内の人口分布は平均化し、昭和50年には早くも4か所にD I Dが分散することになった。他方、都市機能・商店街機能は旧来の上野町、横須賀町の機能のまゝであり、その整備は大幅に立ち遅れている。近年、○印で囲んだ名鉄の結節点にあたる太田川駅付近に交通ターミナルとしての機能が増加し、大型店の進出もみられるが、現状ではまだ商店数も少なく、中心商店街の役割を果すまでには至っていない。

また、名和や横須賀には古くから街道沿いに商店街がみられるが、ともに車輛の通過量の多いこと、店舗訴求性に欠けること、店舗密度が低いこと等、いずれもが中心商店街の位置を占める

にはほど遠いのが実情である。製鉄工業都市としては我国有数の都市であるが、商業面での都市機能は極めて低いといわざるを得ない。

図5、図6には市域内に密集市街地を形成していないタイプの都市のものを掲げた。八潮市・城陽市ともそれぞれ東京や京都に近く、巨大都市の外延的な都市の一つである。

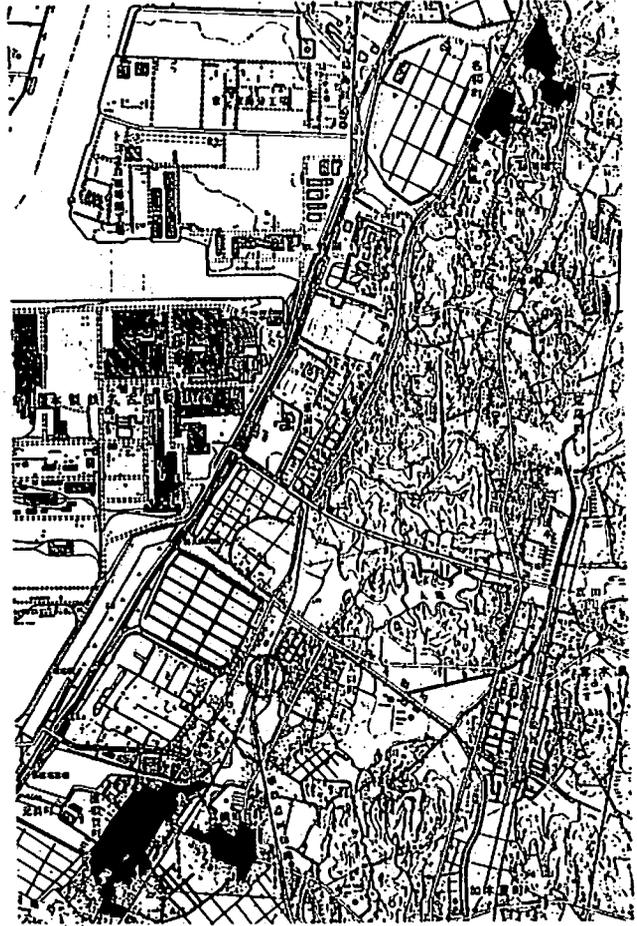
八潮市は、埼玉県東南部にあり、東京に隣接している。次頁図5からもわかるように中川によって形成されたデルタ地帯の一角で、古くから農業地帯として発達し、東京近郊の早場米の産地として知られたところである。昭和31年八条・八幡・潮止の三村が合併して八潮村が誕生したが、39年に町制、47年に市制を施き、村から町、町から市へと急速な変貌をとげて発展した。しかし、鉄道や広域幹線などの交通条件に恵まれず、また、市の中心市街地の形成がおくれており、その都市的発展は周辺都市にくらべて緩慢である。

昭和61年度八潮市広域商業診断報告書(P.32)によると、八潮市の商業ゾーンは市内で5つのブロックに分散しており、中心部のゾーンでも4商店街が放射状に分散して立地しているため、商店密度は極めて低く、三郷市と同様、各商店街区に中心性がみられず弱体である、とした上で、各商店街は、生活型の近隣型商業機能を分担しており、地区型機能を分担している商店街もないため、安全性・利便性・快適性・情報性に欠け、草加市や三郷市への流出となって現れていると指摘している。

ほぼ同様のことが、図6の城陽市にもあてはまる。城陽も昭和30年前半までは純農村として推移してきたが、京都・大阪のベッドタウンとして人口が急増し、昭和47年5月に市制を施している。次頁の図でも、密集市街地は全く見られず、住宅団地の分布を表す規則的な点描市街地が至るところに立地しているのが読みとれる。

たゞ、城陽と八潮の相違は、城陽市にはJR線と近鉄線が通っており、前述したごとく、この両線によって住宅都市化していることである。市内の商業集積は、主として、JR奈良線と近鉄京都線の各駅前であり、街区延長は短いものの、繁華な装いをこらしている商店街もみられる。

図4 東海市(愛知)



もっとも、人口急増による自然発生的な商店街であるため、核となる商店街の形成は充分でなく、いずれも最寄品中心の近隣商店街の段階にとどまっている。この点では八潮と類似している。なお、昭和40年国勢調査時点では、城陽・八潮ともにD I Dは形成されていなかった。

(b) 地方のD型都市をみる

次の図7～9は地方の小都市の一類型である。いずれも密集市街地が小規模で、今日でもあまり面的な拡がりを見せていない。そして図7および図9の都市は、昭和40年国勢調査時点ではD I Dの形成が見られなかったところであること、図9の備前市は、昭和60年国調の時点でもD I Dはない。また備前市は、図からもわかるように㊸片上、㊹伊部の二つの密集市街地が見られるが、もう一つ市の北東部に三石市街地が立地しており、小規模ながら三つの市街地から

図6 城陽市(京都)

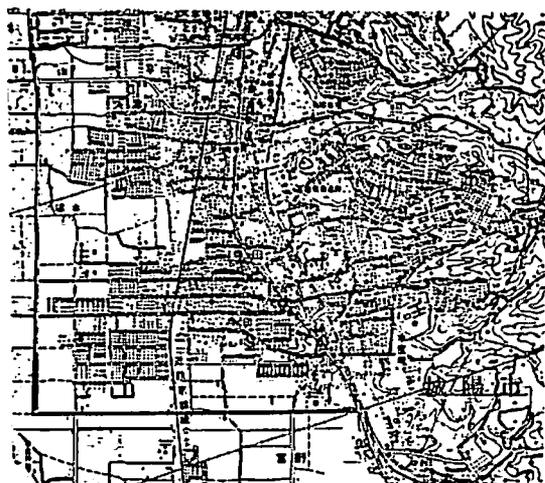


図5 八潮市(埼玉)



成り立っている複核の都市である。

裾野市は静岡県東部の文字どおり富士の裾野にひらけた農工都市である。市は積極的な工業振興を行ない、相次ぐ自動車産業

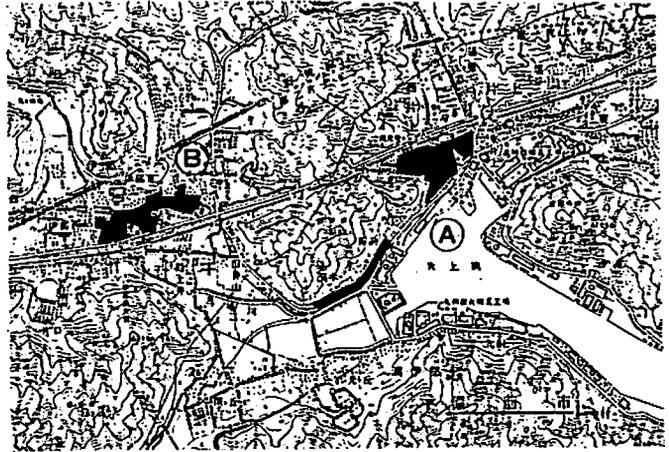
図7 裾野市(静岡)



図8 平田市(島根)



図9 備前市(岡山)



を基幹とする企業の進出によって、従来の農村型都市から工業・住宅都市的な機能を強めてきた。人口も順調に増加し、昭和40年国調で24,983人あったのが、昭和60年時点では45,149人となり、この20年間に44.7%も増加した。

中心となる商業街区は裾野駅前を中心に三つの商店街があり、市内の中心商業街区を形成している。中でも県道、裾野・富士宮線の南北両側に立地した街区200m程の「緑町駅前通り商店街」は商店密度も高く、地区型の準買回性の商店街としての性格をもっている。しかし、これとても、道路の幅が狭く、整備された歩道もない上に、国道246号線から三島方面へ抜ける唯一の産業道路ということもあって、大型車輛を含む自動車の交通量が多く、交通渋滞もしばしばで、商店街の安全性、快適性に欠ける問題点がある。さらに店舗の老朽化、駐車場の問題、店舗数(42店)の少なさもあって集客力も弱い。人口の急増に商店街の整備が追いつけない現状がみられ、中心商店街としての魅力に欠けている。

図8の平田市は、島根半島西部の穀倉地帯出雲平野にあって、面積127.4㎢、人口約3.1万人の農工都市である。中心となる旧平田町は明治22年に早くも町制を施しており、当時の人口は6,167人であったが、その後の発展は緩慢で、今日の平田町のD I D人口は7,154人(昭60)にすぎない。昭和30年1月に市制を施している。市街地の歴史が古く、簸川平野の中心集落としての位置は高い。それだけに商業集積もよくまとまっていて集結度も高い。人口約7,000の平田市街地に8商店会、269店舗が集中している。たゞ全般的に店舗が古く、せまいことと近代化の遅れもあって沈滞気味である。

図9は備前市で、前述のように①片上と②伊部さらに北東部に三石の小市街地をもつ複核都市である。しかも、いずれもD I Dの形成にまでは至っておらず、小核心地分散型の都市である。人口も停滞気味というよりは減少傾向にあり、昭和40年国調時点で備前町と三石町の合計が32,775人であったものが、昭和60年国調時点では32,243人である。次頁の表9をみてもわかるように、備前市の地区別人口では伊部・片上・伊里・三石の4地区に集積がみられるが、商店街の形成は片上・伊里・三石の3地区であり、商店密度の点でまとまっているのは片上のみである。三石は耐火レンガの町であり、通りに面してレンガ工場や関連の事務所が並んでいる。また、伊里は漁村集落であり、入江に臨む片側商店街である。片上地区の商店街はアーケード街となって

いるが、街区も短かく、業種も少ないのが難点である。

次頁の図10～12はいずれも典型的な二極構造となっている。これは、いずれも旧町村時代からの市街地で、それぞれの市街地④と⑤はほゞ類似の面的な広がりをもっている。これらの密集市街地の中で北茨城市の市街地は昭和60年国勢調査時点では共にD I Dではない。それぞれの市街地は、むつ市は④田名部・⑤大湊、北茨城市は④大津・⑤磯原、南陽市は④宮内・⑤赤湯である。人口規模をみると、むつ市では田名部 5,121人、大湊 9,304人、北茨城市では大津 5,709人、南陽市では宮内 7,002人（いずれも昭和40年国勢調査）である。今日では、むつ市では田名部 17,165人、大湊 8,441人、南陽市では宮内 8,306人、赤湯 5,923人である。こゝでは田名部の発展がみられるが、その他の5つの市街地は停滞気味である。

むつ市の場合、かつては大湊の方が人口も多かったが、田名部に大型店が次々と進出し、下北半島一帯から顧客を集めるようになって急速に発展し、市街地も旧市街地から西の方へ拡大して、人口にして約1.7万人の規模のD I Dを形成するに至った。今日、商業力では田名部70%に対して大湊は30%である。最近の同市における広域商店街診断においても、田名部が広域型、大湊が近隣型として位置付けられている。

北茨城市では大津、磯原ともに中心市街地としての面的な規模が不十分である。D I Dは大津市街がぎりぎりのところであるが、駅からはなれている大津よりも、駅前市街地の磯原には市役所や金融機関（3行）もあり、将来的には中心性が期待される。

北茨城市は昭和31年に磯原町・大津町・平潟町と3村が合併して成立した複核都市である。以来同市は長い間、市の玄関口としての顔を持たずに来たわけで、磯原地区にしても商業街区としての魅力に欠けるために、購買力は高萩や日立、あるいは平方面への流出している。それは、磯原市街そのものが人口が少なく小規模な市街地であり、そこに立地する商店街も古くからの線型商店街で、しかも鉄道によって東西に分断されている、といったことから、店舗密度が低く、業種構成も不十分であり、歩道のない狭い道路や駐車場施設の不備など昔ながらの近隣商店街が持っている課題が残されたまゝになっていることへの消費者の不満から起因する現象である。

行政側は、磯原を市の中心商業地区に改造する計画であり、すでに駅西商店街の街区整備が進められている。しかし、高萩・日立・平などへの流失を喰い止めるためには、既存の商店街の魅力アップはもとよりのこと、有力な大型店を核店舗として立地させることが必要である。それは、何も北茨城市の消費者だけの要望ではなく、ほとんどの地方中小都市で第一に聞かれる要望である。その意味でも、現在の北茨城市には中心商業街区はない、といわざるを得ない。

南陽市は、昭和42年に宮内町、赤湯町、和郷村の2町1村の合併により誕生した。都市機能は宮内・赤湯の2地区に分散しており、2極構造の都市となっている。これらは商業集積の面でも、同様に、宮内・赤湯の2極構造となっており、一般の同規模都市に見られるような中心地としての集積は見られず、いわば人口11,000人のまちと15,000人のまちがそれぞれ中心性をもった寄合的性格が強い。従って、「南陽市の中心商店街」として名実共に評価できる商店街はなく、宮内・赤湯にそれぞれの中心商店街が形成されている。例えば赤湯・宮内のそれぞれの同地区内での購

表9 備前市地区別人口分布(昭55年)

地区名	人口	世帯数
計	33,032	9,642
西鶴山	1,448	408
香登	3,358	1,014
伊部	7,268	2,095
片山	5,789	1,804
伊里	8,028	2,220
東鶴山	2,447	678
三石	4,694	1,423

図10 むつ市(青森)



図11 北茨城市(茨城)



図12 南陽市(山形)



買率をみると、赤湯が79.6%、宮内が79.4%と全く類似しており、赤湯・宮内それぞれが独自の商圏を確立していることを意味している。

このように見てくると、D型の地方中小都市についていえることは、全体的に人口を減少させていると同時に市街地の人口も停滞もしくは減少気味なことで、下北半島全域を背後地とし、大型店を集中させて商業街区を活性化させた田名部を除いては、軒並、のびなやんでいるのが実情である。次の項では、B型やD型の諸都市のいくつかについて具体的に考察し、今後の方向性をみつめたいと考えている。いずれにしろ、老朽化した在町時代の線型商店街のまゝでは、もはや、地方中小都市の発展はあり得ないことだけは確かであり、問題はどのように改造・リフレッシュするか、ということになるだろう。

3. B型都市の数例について考察する

ここではB型都市のいくつかについて詳細に考察しよう。集落分布の特徴として中心性が希薄であることはこれまでに見てきたとおりであるが、それぞれの都市がどのような人口・集落分布をしているかを考察すると、その都市の中心商店街の特徴も明らかになってくる。

図13 東大和市(東京)



図14-A 人口密度(57.1.1現在)および商店街分布

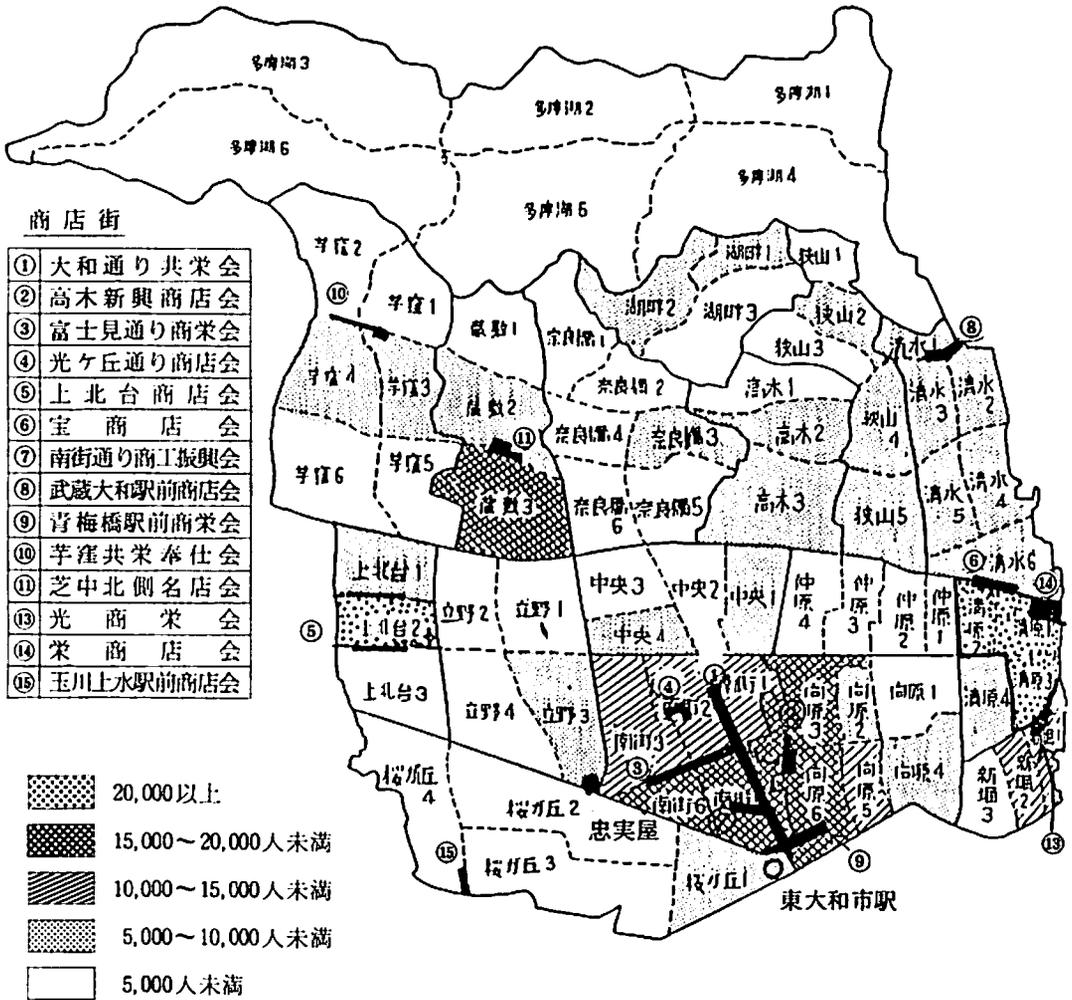
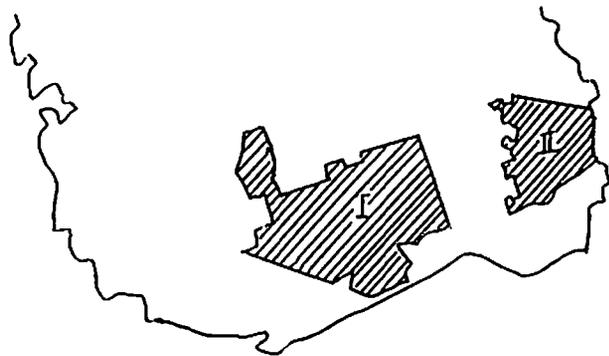


図14-B 昭和40年度国調でのD I D(当時 大和町)



(a) 東大和市（東京）

東大和市は都心から西方3.5kmの武蔵野の一角に位置し、狭山丘陵南ろくをその地域としている。市内には都心と直結した青梅街道、新青梅街道が走り、産業および交通の要となっている。前頁の図13でもわかるように、集落は狭山丘陵に沿って東西に連なる本村と、西武拝島線の北側の密集市街地および住宅団地群とにわかれ、中央部の新青梅街道沿いは畑地や樹園地も残り、南北の間であって空地的な役割をはたしている。昭和45年、大和町は単独で市制を施行し、東大和市となった。

前頁の図14-Aに町丁別人口密度と商店街分布を、図14-Bに昭和40年国勢調査時点でのDIDD分布をしめした。前頁の図13とともに比較して見ていただきたい。集落分布—人口集積—商店街分布—DIDD分布との関係の密接さがよく理解されるだろう。とくに人口密度の高い地域はその大部分が住宅団地によるものであり、東大和市は住宅都市機能が顕著であるといえる。市の昭和57年の統計によると、市の総人口に対する住宅団地人口は実に41.9%を占める。また、昭和40年度国勢調査段階では2か所にDIDDが分布していたが、今日の密集市街地とはほぼ一致している。商店街も主としてこれらの地域に分布しているが、いずれも住宅団地を背景として集積し、自然発生的な性格をもっている。全体としては村山貯水地をかゝっている多摩湖一帯、市内中央部の新青梅街道南部一帯、工場や大和空軍施設跡地をひかえた桜ヶ丘一帯をのぞけば、人口密度5,000人以上という高密度地域が全市的に分布している。しかし、人口集積やDIDD分布、それに商店街分布から、市の核心地域は南街と新堀である。そこでこれらの地域の商業集積はどうか、をこれから検討していきたい。

次頁の表10は、市内に分布する全商店街（区）の商業集積の実態と規模を表わしたものである。なお、純商度というのは、商店街における商店戸数の割合であり、これが低いということは、商店街が一般住宅や工場等で切断されていることを意味する。全体的に純商度はあまり高くない。とくに南街通り商工振興会は30%未満という、商店街とはいえない状況である。一部の団地内商店街は高い集積度を保っているが、その他の多くの商店街では住宅や駐車場、工場等で分断されており、街区にまとまりがなく、商店街としての魅力に欠ける。

次に業種構成をながめてみよう。まず目につくことは、買回品構成の割合が極めて低いことである。最寄品構成に比して買回品構成が高くなっているところはほとんどない。大和通り共栄会、富士見通り商栄会、上北台商店会がほんのわずか高いだけで、いずれをとっても地区中心的な機能をはたしうる街区ではない。業種構成からは、市内の商業街区はすべて近隣商店街のそれである。

市内の商店街は住宅団地の後追いの形で自然発生的に分散立地した。従って、多少の規模の大小はあるものの、回遊性を促すに足る面的な広がりには乏しく、ほとんどが路線型商店街となっている。商店街が分散し、しかもそれぞれの商店街が業種構成や回遊性に欠ける線型商店街であり、そして、今一つ、核店舗を欠いているとなれば、そこにあるのは、最早、市外のターミナル地区への流出だけである。実際、東大和市の交通体系はそのようになっている。とくにバス路線では立川と久米川駅（東村山市）間、立川—東村山駅間、立川—長円寺（武蔵村山市）間の便の通過経路になっており、南街—立川間のバス便も多い。ということは、立川への交通が至便であり、買回り品を中心に立川への購買力の流出が非常に大きいことを意味している。それゆえ、市内に中心商業街区が成熟しないのである。市内の大型店舗に忠実屋がある。しかし、位置的には南街の西のはずれにあるため商店街と相互の関連性に乏しく、核店舗ともなり得ていない。こうしたあれこれの状況から、南街が地区型の中心商業地であるとはいえないのである。しかし、将来に

表 10 商業集積の実態と規模

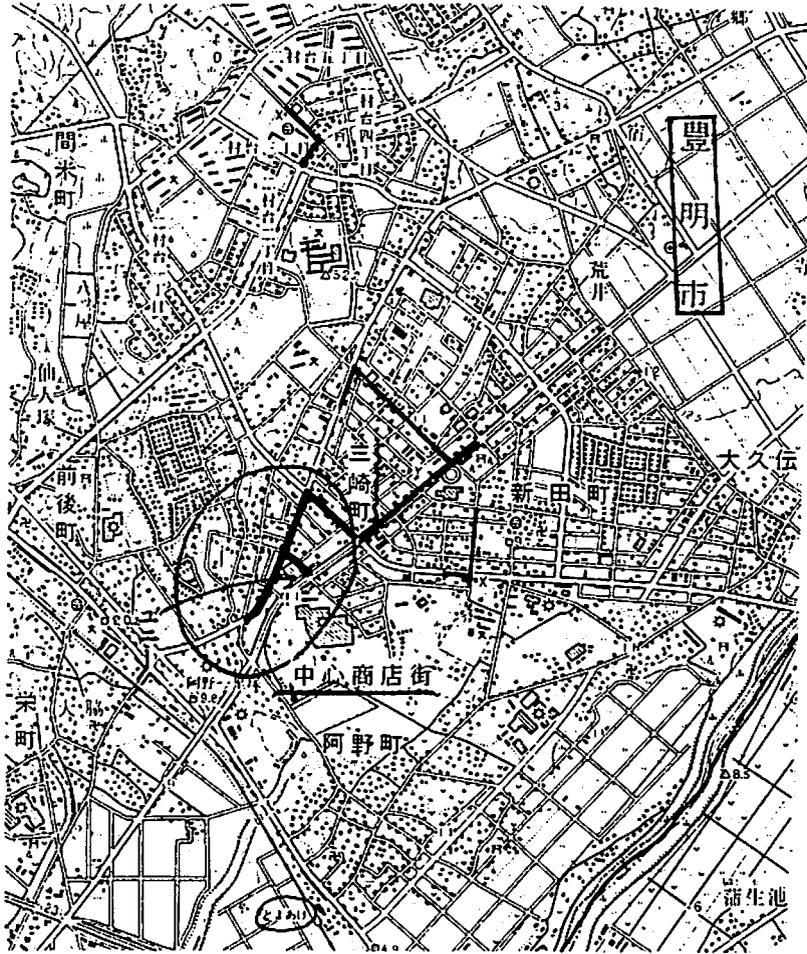
ブロック別	項目 商店街名	構成建物数	業種の充足性							
			最寄品構成比(%)	買回品構成比(%)	飲食サービス構成比(%)	業務・卸売構成比(%)	非商店構成比(%)	純商度(%)	過去3年	
									増加店舗数	減少店舗数
東大和市駅周辺	大和通り共栄会	143	21.0	21.7	37.1	1.4	18.9	81.1	10	6
	高木新興商店会	90	47.8	14.4	16.7	-	21.1	78.9	10	15
	富士見通り商栄会	92	19.6	22.8	29.4	3.3	25.0	75.0	7	4
	光ヶ丘通り商店会	54	24.1	11.1	26.0	1.8	37.0	63.0	1	2
	南街通り商工振興会	134	4.7	5.8	18.8	0.5	70.2	29.8	8	0
	青梅橋駅前商栄会	60	8.3	8.3	51.7	1.7	30.0	70.0	3	3
東京街道団地	宝商店会	73	15.1	8.2	30.1	5.5	41.1	58.9	7	6
	光商店会	62	40.3	12.9	25.8	-	21.0	79.0	2	4
	栄商店会	90	50.0	20.0	16.7	-	13.3	86.7	7	6
西南	上北台商店会	47	25.5	25.6	38.3	2.1	8.5	91.5	4	3
	玉川上水駅前商店会	11	9.1	18.2	36.4	-	36.4	63.6	1	0
新青梅街道以北	武蔵大和駅前商店会	48	37.5	12.5	25.0	-	25.0	74.5	6	5
	芋窪奉仕会 (芋窪共栄奉仕会)	79	32.9	13.9	11.4	3.8	38.0	62.0	5	2
	芝中北側名店街	21	38.1	33.3	23.8	-	4.8	95.2	1	2
	蔵敷奉仕会	20	14.3	3.6	3.6	7.1	71.4	28.6	0	0
合計		1,089	24.6	14.5	25.5	1.7	33.7	66.3	72	58

向けては、南街を中心商業地区として育成すべきであることは勿論である。それは、市域の南端にあるとはいえ、西武拝島線東大和市駅をひかえているからである。

(b) 豊明市（愛知）

豊明市は名古屋市の東南部に隣接し、名古屋市中心部より15km圏の至近距離に位置している。名古屋鉄道本線で名古屋市と結び付く交通至便な立地ゆえに、今日では丘陵部一帯に宅地化がすすみ、都市の性格も農業都市から住宅都市へと大きく変化した。明治39年以来、現在の区域が豊明村として推移してきたが、昭和32年に町制、昭和48年に市制を施行した。次頁の図15は豊明市の地形図（2.5万分の1）であるが、密集市街地はない。中心となる地区は三崎町であり、市役所も置かれているが、全体的に市街地の成熟度は緩慢である。

図15 豊明市(愛知)



上図では、商店街が形成されている街路を太い実線で示しておいた。とくに大きく○で囲んだ街区が中心となるべき商業街区である。なお、この図ではみえないが、名鉄名古屋本線の前後駅付近にやゝはっきりした線型の商店街がある。あとは市役所付近と二村台地区の団地に商店街の分布がみられる。これらについては後述したい。

次の頁に同市の地区別人口密度図を示す。市内における人口集積の様子が読みとれる。いずれの都市の場合もそうであるが、人口密度がとび抜けて高いのは団地を立地させている地区である。当豊明市においても桜ヶ丘と二村台の住宅団地をかかえている地区の人口密度が高い。三崎地区は市役所の所在地であり、人口の集積、商業街区の形成などで中心的な地区となりつつある。

豊明市の商店街を業種別に見たのが次頁下の表11である。市内の代表的な3地区をまとめたものであるが、やはり三崎地区が店舗数も多く、買回品店の割合も高い。しかし、この三崎地区でも、業種構成の割合が圧倒的に高いのが飲食店、パチンコなどのサービス業種店であり、専門店街としてのまとまりがない。

市内各地の商店街の全般的な特徴は、

- ① 商店密度が低い。
- ② 歩車道分離の不備。
- ③ 線型商店街にとどまり、面的な広がり欠ける。

ということになり、商業地として未熟な状態にあるといえよう。従って、ウィンドウショッピングを楽しむ、ゆっくり回遊して楽しむといった商店街のもつべきアメニティに欠け、商店街としての魅力・訴求力を有していない。そのほか、前述したように小規模な商店街が市内各所に分散立地していることで、中心性の欠除ともつながっている。

豊明市は、昭和40年国勢調査時点ではD I Dは形成・設置されていなかった。昭和45年国勢調査時点ではじめて名鉄前後駅附近に人口約 7,000 人余りのD I Dが設定されている。そして昭和50年には前後駅附近のD I Dが拡大し、あらたに二村台地区にD I Dが設定された。その時点においても市庁附近はD I Dには含まれていない。三崎町地区がD I Dに含まれるのは昭和55年国勢調査時点からである。このことから推しても、豊明市の核心街区の形成が遅れていることを知ることができる。従って、今日の三崎地区の商業街区の形成が未熟であろうことは充分予測のたつことである。

現実に豊明市の中心商店街とみなされる街区が形成されたのは大型店ユニーが進出してからである。

図16 地区別人口密度

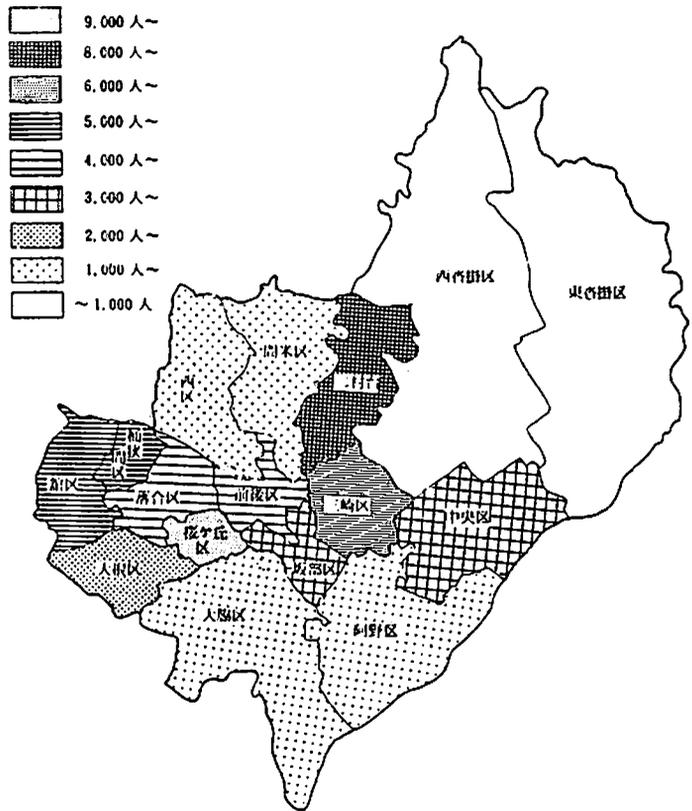


表 11

	前後地区 (%)		三崎地区 (%)		団地地区 (%)		計 (%)	
買回品	24	29.3	52	27.5	12	21.4	88	26.9
最寄品	32	39.0	30	15.9	24	42.9	86	26.3
サービス	26	31.7	106	56.1	20	35.7	152	46.5
総合店	—	—	1	0.5	—	—	1	0.3
計	82	100.0	189	100.0	56	100.0	327	100.0

下に三崎町の中心商業街区の構成図をしめす。

図17-1 三崎町の中心商業街区(1)

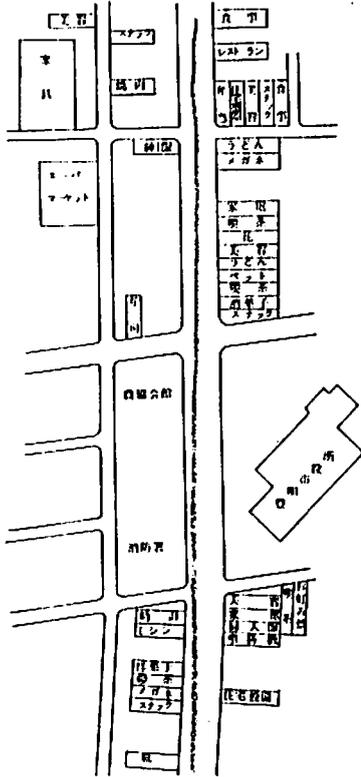
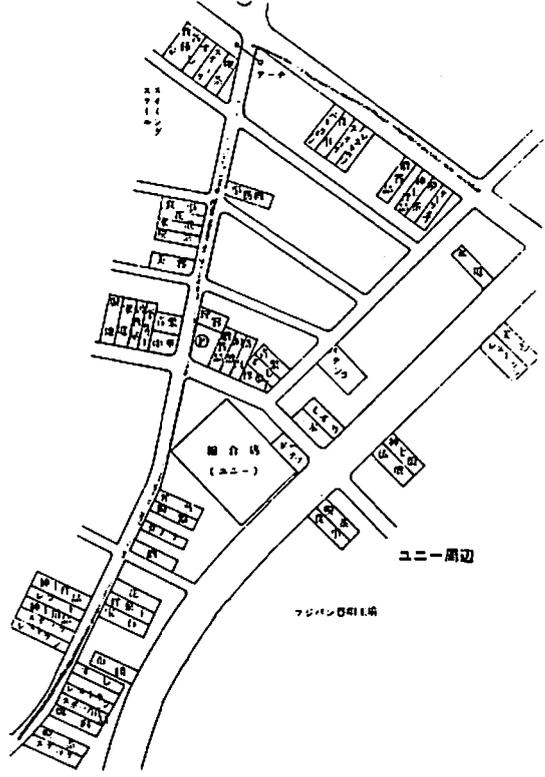


図17-2 三崎町の中心商業街区(2)



上の二つの図が三崎町に広がる中心商業街区の構成図である。商店街としては未成熟であることがよくわかる。まず第1に、いずれも商店密度が低く、各所で分断されている。いわゆる商店が軒を連ねるといった状況ではない。第2に、業種構成の上でも不十分であり、買回店も準最寄性の商店が多い。さらにそれを上まわるサービス（飲食店・美容・スナックなど）業種の店舗がみられ、買回商店街として地区中心性に欠ける。第3に、市役所やユニーを中心に商店が広範囲に分布しており、一つの商店街としてのまとまりに欠ける。そのほか、図17-2の街区には歩道がなく、また両者ともに店舗訴求力に乏しい。こうした数々の問題点があり、中心商店街としての位置付けをするには、なおしばらくの時間を要する。豊明市も、大都市郊外の住宅都市に多いB型都市の一つである。

(c) 八潮市（埼玉）

八潮市は埼玉県東南部に位置し、東京都に隣接している。古くから農耕地帯として発達し、東京近郊の早場米の産地として知られたところである。

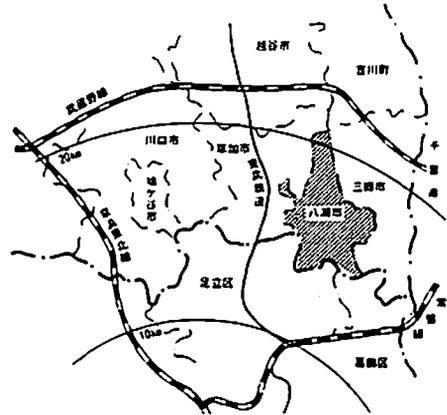
昭和31年、八条・八幡・潮止の三村が合併して八潮村が誕生したが、39年に町制が施かれ、更に47年に現在の八潮市となるなど村から町へ、町から市へと急速な変貌をとげて発展してきた。

しかし次頁の右図を見てもわかるように、鉄道や広域幹線などの交通条件に恵まれず、また、市の中心的市街地の形成がおくれており、その都市的發展は周辺諸都市にくらべて緩慢である。

次頁の図19は八潮市の商店街分布図であるが、いずれも住宅地やそれに接する道路沿いに分散

的に自然発生した近隣型のものである。各商店街（会）の規模は小さく、全般的に住宅その他の非店舗が混在していて店舗率が低く、商店街として、まとまりに欠けている。またその多くは道路幅員6～8m狭く一部をのぞいては歩車道の区分がなく、車輛通行の過密化に伴って歩行者の安全性が阻害されており、上記店舗の分散と相まって商店街区内の回遊性はなく、従って、その活気、盛り上りに欠けている。第二種大型店はバルコ通りや中馬場中央名店会などに位置しているが、街区とのつながりは必ずしも緊密とはいえず、それら商店街の核としての機能は弱い。総じて、八潮市の商店街は小規模、分散的であり、中心的機能をもつものではなく、街区そのものまとまりに欠けて、商店街としての機能も未熟である。

図18 八潮市位置図



下の表12は八潮市内の商店街の業種構成をしめすものである。表からもわかるように大部分が最寄品主体の商店街である。なかにはバルコ通りのように買回品店が最寄品店を上まわっているところもあるが、買回品店の取扱い商品の大部分が最寄性の強い実用買回品であって、実質的に

表12 商店街(会)の形成状況

商店街名	会員(商店)数	街区総延長(m)	道路幅員(m)	歩の車区分況	業種構成					計
					買回品	最寄品			非店舗	
新町商店会	25	約150	6	一部分離	3	9	3	10	-	25
南後谷商店会	34	" 350	6	なし	4	15	3	9	3	34
バルコ通り商店会	41	" 500	8	"	14	7	1	14	5	41
中央通り商店会	43	" 500	8	"	12	16	5	10	-	43
中馬場中央名店会	14	" 150	6	"	5	6	-	3	-	14
大曾根商栄会	40	" 400	8~10	一部分離	13	27	-	-	-	40
南川崎商店会	9	" 350	6	なし	2	7	-	-	-	9
上木大道商店会	23	" 200	6	"	4	11	-	7	1	23
上大瀬商栄会	12	" 200	6	"	-	9	2	1	-	12
大瀬・古新田商栄会	42	" 400	6	"	8	13	3	6	12	42
中央公園通り商店会	20	" 300	6	"	3	-	2	15	-	20
伊草商店会	29	" 200	6	"	5	8	1	15	-	29

(注) 中央公園通り及び伊草商店会会員数及び業種構成は商店街店舗配置図により、上記以外の会員数、業種構成は56年度「埼玉県商業経営実態調査」による。

図19 商店街位置図

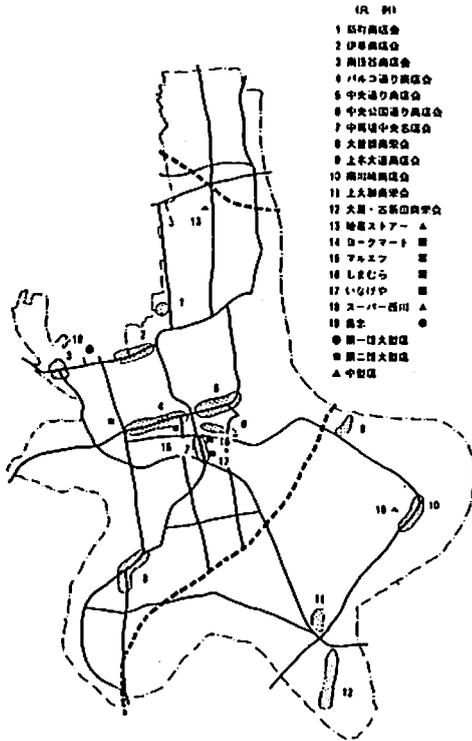


図20 商店街(会)の業種構成

商店街(会)	百貨店	洋品店	洋・服店	飲食・サービス	雑貨店
新町商店会	17.0	28.0	10.0	21.0	43.0
南信濃	11.0	46.0	0.0	28.0	15.0
パルコ通り	24.1	15.1	7.4	34.1	22.7
中央通り	22.0	31.5	11.6	22.2	-
中興中中央名店会	25.7	42.0	-	21.4	-
大曾根西交会	32.6	-	67.6	-	-
南川崎商学会	22.2	-	37.9	-	-
上大瀬	17.4	41.5	20.4	4.3	-
上大瀬西交会	-	25.5	-	18.7	5.5
大淵・古新田	18.0	31.0	14.3	29.8	-
中央公園通り商店会	15.0	10.0	-	78.0	-
伊豆	17.2	31.0	7.4	61.7	-
12商店会	22.0	20.0	0.0	27.1	5.0

(注) 中央公園通り及び伊豆西交会多用途店は商店街の拡大計画により、上記の計は編年改訂後算出。経費費控除済の値による。

は近隣居住者を対象とした最寄機能の商店街である。とくに大曾根、南川崎、上大瀬などの商店街は、店舗の2/3～3/4が最寄品店ということで、近隣型機能さえ十分に発揮できない状態である。

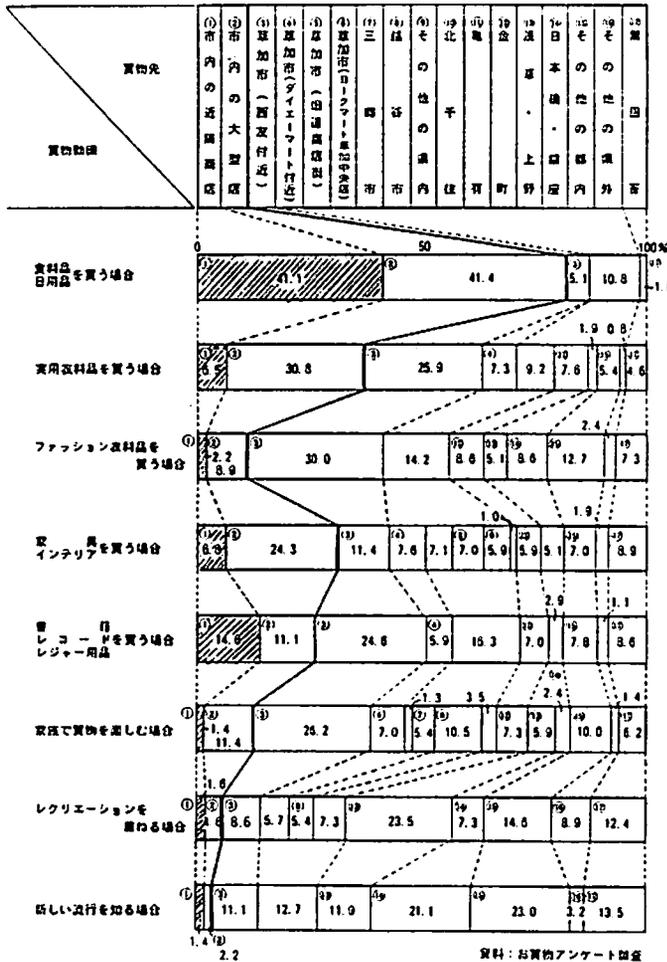
上の図19は、商店街の分布を示めたものである。そして上右の図20は前頁の表12の業種構成の部分を示したものである。この二つの図と、前頁の表12をあわせて見ることによって八潮市の商業的機能の特徴が明らかになってくる。それは、

- ① 商店街の分布が分散的である。
- ② 商店街の業種構成は最寄品主体である。
- ③ 街区延長はそれなりにあるが、それに見合った商店数を充たしていない。
- ④ 歩車道の区分がほとんどなく、安全性に欠ける。

こうした特徴は、八潮市の商業的機能の弱さを表すものであるが、これらのマイナス要因から求められる結論は、まず第1に、商店街に魅力がないということ、第2に、中心商店街の形成が未だみられないということである。そうした結果、購買力の流出という現象をひきおこすことになる。次頁の図21を見よう。買物動機と買物先をグラフ化したものである。それを見ると、食料品や日用品を買う場合は近くの店や市内の大型店で80%以上買われているが、それ以外は、圧倒的に市外での購買となって表れている。つまり、圧倒的な購買力の流出がみられるということだ。これによっても、いかに八潮市内の商業機能が未成熟であるかがわかるだろう。特に市内の一般商店にそれが顕著である。

八潮市は、昭和40年時点では、D I Dは形成されていなかった。つまり、D I Dの形成をもたら

図21 買物動機と買物先



すような核となる集落がなかったということである。もともとは純農村であった地域だから当然のことであるが、東京に隣接していることから急激な市街化をみたのである。そして都市化はスプロール的に進行し、中心市街地の整備・育成のいとまもなく市街地化した。DIDの設定は昭和45年に人口約6,000人余りをもって行なわれている。従って、核となる中心商業地が形成されていないのは当然かも知れない。しかし、昭和61年1月の商業診断報告書にも示めされている（P.97）ように、一般市民が商店街に求めているものは第1にディスカウントストア、第2に大型総合スーパー、第3にデパートであり、この3つが群を抜いて高い率をしめしている。こゝに総合的な大型の核店舗を導入し、中心商業地区との回遊性を実現する必要を認めるのである。勿論、そのために導入する大型店の位置を十分検討

する必要があるが、大型店の導入と中心商業地区の近代化とを同時に実現しないと、図21のような厳しい状況を克服することは不可能なことだと考える。

(d) 玉名市（熊本）

熊本県北西部の穀倉地帯に位置する玉名市は、古くからの港町であった高瀬・伊倉・大浜の3町を中心に築山村など12ヶ町村の合併によって昭和29年に市制を施した。高瀬・伊倉は中世以来の菊池川沿いの港町であり、大浜は菊池川の河口都市として栄えたいずれも歴史的に古い町である。しかし、明治24年の鉄道開通で伊倉・大浜は地域の一在町にとどまり、高瀬のみが発展した。だが高瀬の場合も、駅舎は市街地から西へおよそ1kmはなれた弥富村地内に設けられている。こうした経過の中で、玉名市の商業街区は次の頁の図に示めたように④高瀬地区、⑤駅前・亀甲・繁根木地区、⑥西部地区に分布・発達している。そして、大浜、伊倉にも近隣商業地が見られる。

高瀬は次頁の図でもわかるように、古くからの市街地内に商店街があり、玉名市の中心商業街区となっている。駅前・亀甲・繁根木街区は、高瀬市街地と玉名駅を結ぶ線型の商業街区である。西部街区は3地区の中では最も新しく、玉名高をはじめ3校やバスセンターをもつ商業街区で、

背後に住宅地をひかえている。その他、伊倉地区にも古くからの商店街がみられる。

次の頁に商店街形成の現状について掲げた。玉名市の昭和59年度商業診断報告書をもとに、筆者の巡検の結果、加筆・訂正をしている。

玉名市街の商業街区は前述したように、右図の①、②、③の3つの地区に分けることができる。それぞれに環境条件、性格に違いがあり、特色をもっている。

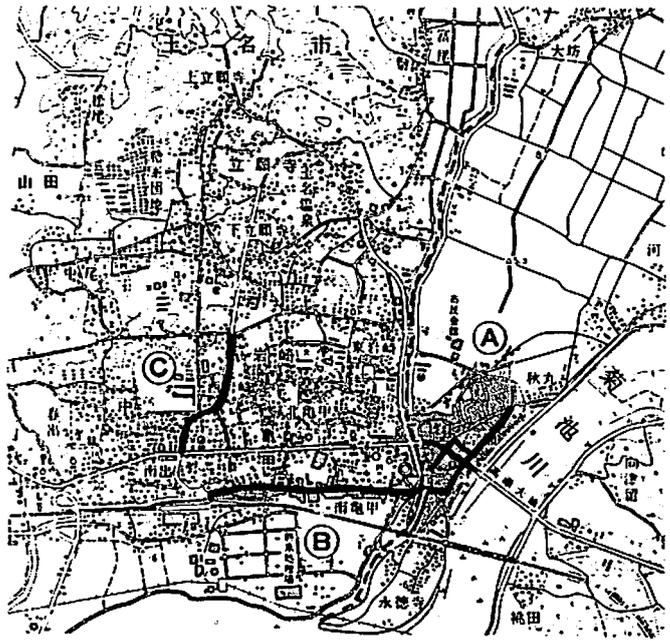
まず①高瀬地区であるが、菊池川と繁根木川にはさまれた小デルタ地帯に立地した歴史的な小核心地である。従って商店街には老舗も多く見られ、古くからの玉名市の中心的商業地であり、大型店と商店街とによる面的な拡がりもある。

業種も買回性商品販売を中心とする商店が多く、それに加えて飲食業、サービス業もそろっており、業種的には充実している。問題の第1は、安全性に関してである。とくに本町・中町・下町を貫通する道路幅が8~9mであるが、国道208号線との出入りのため車輛の通行量が極めて多く、とても落ちついて買物ができる状態ではない、という実情である。歩道はなく、白線で区切られた狭いスペースがあるが、常態的な車の侵入や路上駐車のため、その役目は果していない。中町商店街など、店格もよく、老舗が並んでいて風格もあるが、おびただしい車の交通量で安全性と快適性はふっとんでしまう。セットバック等による歩道の確保が最大の課題であると判断した。第2には、とくに本町商店街の店舗の老朽化である。道路事情に加えて、街区に訴求性がなく、魅力が著しくそこなわれている。

全般的には、この地区は金融機関の支店も3店あり、サン・リブなどの核店舗もあって中心商業地としての機能を有しているが、西側に寿屋の核店舗ができ、西部地区にも若者向けの魅力ある店舗も集積しつつある、となれば、やがて中心商業地としての位置付けは低下してくるよう思う。

②駅前通り(亀甲・繁根木を含む)地区は、交通核としてのJR玉名駅と直結するため、確実な人の流れが期待できる街区である。この街区は高瀬地区までの道路沿いに路線状に形成されており、背後に大型店である寿屋もあって、動線のメリットを充分生かせるはずの街区である。道路幅は広く、繁根木通り以外は12mあり、現実に両側にカラー舗装の歩道が設けられている。そして、駅前通りと亀甲通りの西半は簡易アーケードを設けており、街区の西部に一体感がみられる。たゞ問題点は、全体的に街区が長く、しかも繁根木通りと亀甲通りの一部は店舗にバラツキが大きい上に、民家・空き店舗・寺院などによる切断も目立ち、商業街区としての訴求性に欠ける点

図22 玉名市要部(5万分の1地形図)



(…は繁根木川)

が大きいことである。筆者が巡検した時点では、繁根木通りが高瀬地区と駅前通り地区の切断区間になっていたように見えたのである。

他方、**◎西部地区**は背後に住宅団地など人口増加地区をひかえた新しい商店街である。また学校が3校あり、バスセンターや公立玉名病院などの集客機関もあって人の流れが期待できる地区である。比較的新しい街区であり、西部中央通りでは店舗の集積は不十分であるが、とくに玉高正門通り・玉高通りの区間は集積も進み、店格も比較的良好で商店街らしい景観となっている。道路幅が広く15m位あるため片側商店街的になっているが、両側の歩道は幅広く、かつレンガ舗装の立派なものであり、植樹もされており、統一された街路灯とも相まってアメニティのある街区となっている。

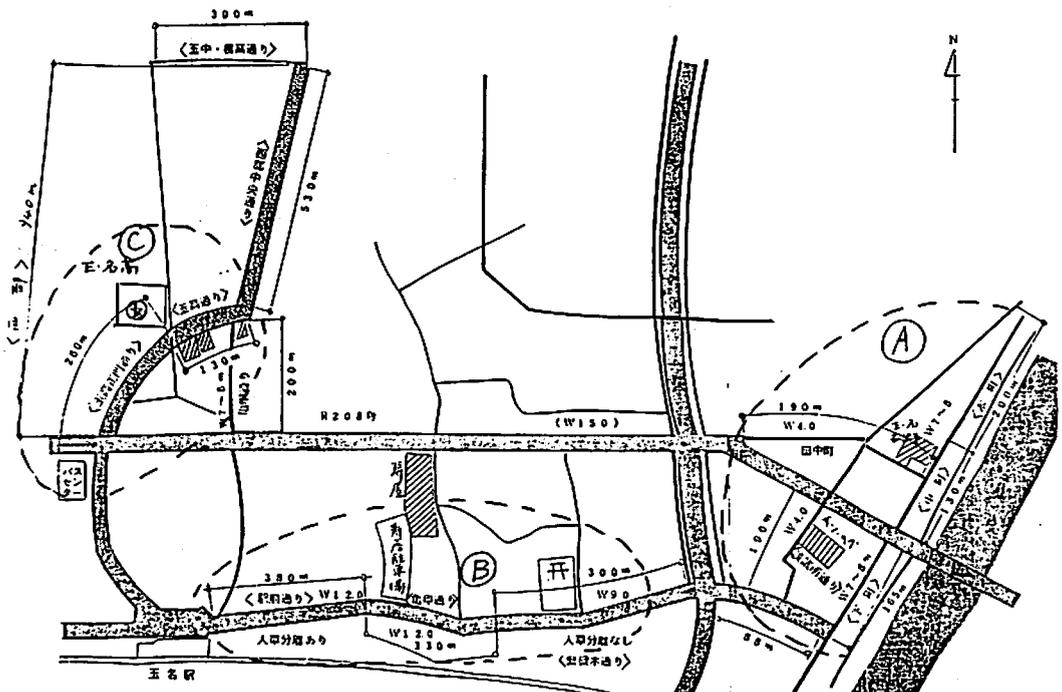
下に商店街の形成と形状を示めた。……線で示めた**①～③**の3地区に分けることができる。従って、単核集中型の街区形成ではなく、全体的に分散化する傾向が拡大しているといえよう。今後は、国道208号線沿いに各種の大型店の出店計画もあり、商業街区の分散化はさらに進むも

表13 玉名市商業街区別業種構成

()は構成比(昭和63年4月現在)

街 区	買 回 品	最 寄 品	飲 食・ 娯 楽	サ ー ビ ス 業	そ の 他	計
高 瀬	77 (43.0)	43 (24.0)	29 (16.2)	14 (7.8)	16 (8.9)	179
駅 通 り	60 (39.5)	37 (24.3)	25 (16.4)	15 (9.9)	15 (9.9)	152
西 部	32 (34.8)	20 (21.7)	20 (21.7)	13 (14.1)	7 (7.6)	92
伊 倉	17 (24.6)	28 (40.6)	0 (0.0)	13 (18.9)	11 (15.9)	69

図24 商店街の形成と形状



のと思われる。また、西部地区での住宅団地立地等による人口増加も進んでおり、こうした人口集積の変化も、玉名市の商業街区拡散の大きな背景となりつつある。いずれにしろ、それぞれの立地の条件が異った特色ある商業街区が分散して立地していることで、玉名市の都市機能の複雑さを示めすことになったといえる。

最後に玉名市商業街区の業種構成を見よう。前頁の表13がそれである。

商店数からは高瀬地区や駅通り地区の二極型であるが、西部地区の商業街区の発展は、玉名市の商業街区のバランスを大きくかえつつある。駅通りはすでに買回品店中心の街区になっているし、西部地区は店舗が新しく訴求性が高い。高瀬地区の商業街区がセットバックによって歩道を確保し、安全性とアメニティの高い街区に改造されない限り、市内における商業街区の分散化が一層すすみ、三極てい立の様相を呈してくるだろう。ひいては玉名市の多心化傾向を進め、より高度の商業街区形成が阻害される心配がある。

(e) 相模原市（神奈川）

最後に研究紀要27集でも論述した相模原市について再論したい。大都市である相模原の人口集積、商業街区集積が極めて特色があるからである。もともと上溝以外に核的な街区のなかった相模原市が、巨大都市東京の郊外にあって急速な都市化の中で多核都市の様相を呈したその中味が中々吟味に足るものだからである。

相模原台地北部に位置し、東京都と隣接する相模原市は、今日では人口約48万人を数える大都市である。昭和60年10月現在では48.3万人で船橋に次いで全国で22位、新潟・静岡・姫路・長崎・金沢市などより上位に位置している。この相模原も明治時代には一面の桑畑であり、その台地上にしかけていた横浜鉄道線（現在のJR横浜線）も、諏訪湖畔の生糸を横浜港にはこぶためのものであったということから、まさに日本のシルクロードの一部であったといつてよい。明治39年測量の地形図をみると、現在の相模原市域にみられるまとまった集落は、上溝のみであった。その後のこの地域の発展は、昭和に入ってから急速に進められた軍都化と切り離せない。現在でも、かつての陸軍工廠や陸軍通信学校、陸軍部隊駐屯地、陸軍病院などの施設が駐留米軍や一部私大の施設として所われており、この町の沿革の特徴を物語っている。

当時、この地域には相原村・上溝村・大野村・田名村・麻溝村・新磯村があったが、軍部の便宜のために相模原町にまとめられたのである。昭和28年の同じ図幅をみても市街地らしいものはみあたらず、上溝に町役場がおかれていたことがわかる。それでも台地の真中に相模原住宅の団地ができ、横浜線の渕野辺駅前には駅前集落が形成されつつあった。相模原町は昭和29年11月に市制を施した。その後は、発展のテンポは急速に早まり、昭和42年の図幅では横浜線の橋本・相模原・渕野辺・小田急線の小田急相模原駅等を拠点とした市街地が形成されている。そして台地の内部は工業団地が形成され、現在では関東地方でも屈指の内陸工業都市として発展している。

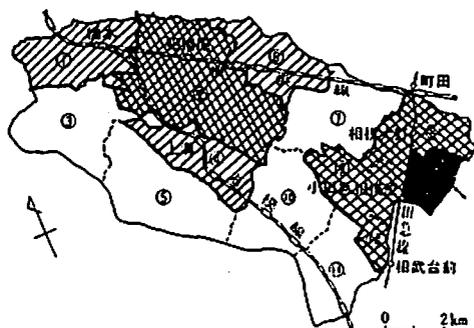
今日の相模原市は、大きく二分することができる。一つは横浜線に沿った橋本・相模原・渕野辺を含む地域であり、今一つは小田急線の相模大野・小田急相模原・東林間を含む地域である。まず、その点を次頁の上図で確認しよう。左図が人口密度図、右図が商店(小売商)密度図である。

図25と図26を見比べれば、本庁地区と小田急沿線地区に大きく2分されていることがよくわかる。そして、人口集積と商店集積も実に相関が高いこともわかる。しかし、もう少し詳細に見るならば、相模原市は7つのセンターをもった複核都市であることがわかるのである。その前に相模原市のD I D分布で昭和40年国調によってながめてみたい。次頁の図27をみよう。昭和40年当時の相模原市にはD I Dは4か所分布していた。そのうち最大のものが本庁地区にあったIで、ここには相模原・渕野辺の二つの市街地が含まれている。次いで大きいのがIIの相模台地区、東

図25 人口密度図(本庁・出張所別)



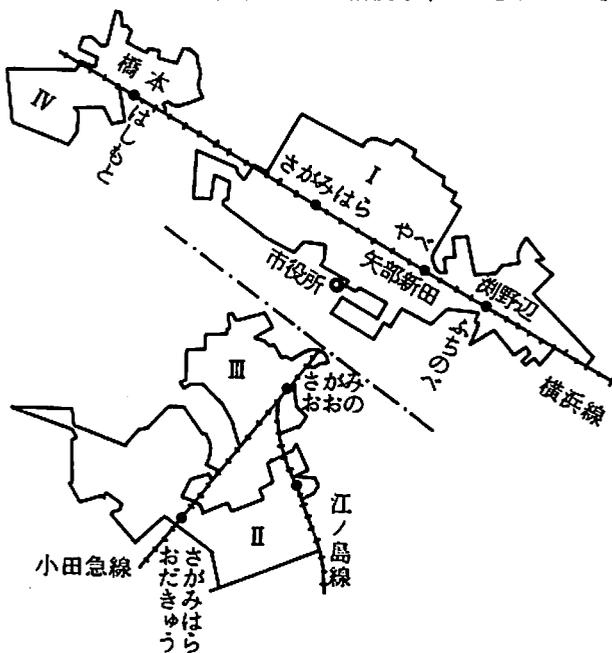
図26 商店密度図(本庁・出張所別)



平均以上
 7,000 以上
 10,000 以上

平均以上
 70 以上
 100 以上

図27 昭和40年国勢調査による相模原市D I Dについて



地区	面積	人口	人口密度	D I D人口	割合%	D I Dを除く市域人口密度	比重
全 市	90.8	163,381	1,799.4	72,751	44.5		
①				31,266	19.1	1,565.3	1.15
II				19,751	12.1		
III				11,904	7.3		
IV				9,830	6.0		

注 { ① : 市役所所在地
 比重 : 人口密度 ÷ D I Dを除く市域の人口密度
 1.15 : B型

林間地区、そしてⅢが相模大野、Ⅳが橋本市街である。そこで、市庁所在地でもあるⅠを中心として比重を求めると1.15となり、完全なB類型都市をみる事ができた。今日では相模原一帯に家屋や工場が分布して、ほぼ連担した状態が出現しているが、商店街分布をみる限りは、やはり7つのセンターを見い出さざるを得ないのである。よく相模原市は「へそ」のない町だといわれるが、まさにその通りで、商店街分布からもそのことが言える。前頁の図28は相模原市域の商店街分布をあらわしたものである。

図中に番号を付した商業地域がそれであるが、①橋本、②相模原、③澗野辺、④上溝、⑤相模大野、⑥小田急相模原、⑦東林間と7つの商業集積地を見い出すことができる。これらはいずれも鉄道の駅を拠点にした商店街を形成しており、相模原市は、ほぼ駅の数だけセンターがあるといいかえることもできよう。ところで、相模原市では、次頁にしめした図29からもわかるように橋本・相模原（西門を含む）・相模大野を中心商業地に、澗野辺・上溝・東林間・小田急相模原を地区中心商業地とする商業機能の配置計画を立てている（「相模原市商業振興ビジョン」P.24）ので、これら7つの拠点についてもう少し考察しよう。

下にこれら7つのセンターの業種構成に関する表を掲げる。図28とともに御覧いただきたい。

表14 相模原市主要駅地区別商業街業種構成一覧

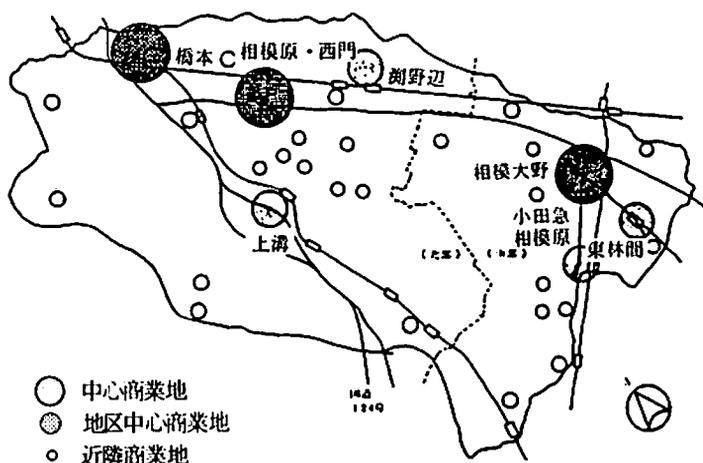
	街 区	商店数	買回品店 (%)		最寄品店 (%)		業 務 (%)		飲食・サービス (%)		そ の 他 (%)	
①	橋 本	274	66	24.1	51	18.6	15	5.5	86	31.4	56	20.4
②	*J R 相 模 原	281	57	20.3	98	34.9	1	0.4	66	23.5	59	21.0
③	澗 野 辺	331	68	20.5	71	21.5	8	2.4	71	21.5	113	34.1
④	上 溝	158	49	31.0	46	29.1	5	3.2	42	26.6	16	10.1
⑤	相 模 大 野	265	47	17.7	46	17.4	2	0.8	99	37.4	71	26.8
⑥	小田急相模原	335	89	26.5	55	16.4	10	3.0	114	34.0	68	20.3
⑦	東 林 間	176	53	30.1	38	21.6	0	0.0	61	34.7	24	13.6

昭和62年度 相模原市商店会一覧より算出

* J R 相模原には西門地区を含む

上の表と前頁の図28とは番号で対応しているので対比して見てほしい。①の4、②の10～13をのぞけば、それぞれ駅に向かう商店街になっていることがわかるだろう。要するに前頁の図28の①～⑦に分散した形で商店街が集積しているのである。その業種構成が上の表である。商店数が最も多いグループは⑥と③である。但し③には大規模店がみられない。売場面積について見ると、① 19,738㎡、② 35,943㎡、③ 2,367㎡、④ 6,938㎡、⑤ 7,239㎡、⑥ 14,638㎡、⑦ 4,342㎡（いずれも昭和57年現在）となり、①、②、⑥が規模が大きい。①にはユニー、イトーヨーカドー、②にはダイエー、相模原ポポロ、忠実屋、④には忠実屋、⑥にはイトーヨーカドーなどの大型店がある。また業種構成上、比較的買回性の高いのが⑥と①である。このように見てゆくと、比較的中心性の高いのが⑥小田急相模原と①橋本であり、次いで②のJ R 相模原ということになるだろう。なお、②は直接駅と結びついていない西門地区を含んでいる。西門地区にあるグリーンプラザさがみはらは「通り」の幅が広く、その両側を買物公園化した美しい街区である。しかし現状では、相模原駅との間につながりがなく、一般の事務所や民家、空き地などによる分断が目立つ。それに道幅が広すぎ、中央は交通量の激しい通りになっており、片側商店街的機能しか果たせていない。こうした諸々の条件を考えあわせると商店街としては小田急相模原の機能が大きい。いず

図29 商業機能の配置計画



れにせよ、人口50万近い大都市としては、核となるべき中心性を有していないのが現状であり、左図のような商業機能の配置計画にもかかわらず、相模原・西門、相模大野の商業機能は未成熟である。

こうした多心都市ゆえに町田・東京への流出が多く、業種構成上でも最寄性が強く、それと商店数の割に一般の買回品店、最寄品店の数が少なく、商店密度が低い。それに

反して飲食・サービス、その他の店舗の割合が高いことをみても、一般の買物客の街区内での買回性に欠けていることがわかるのである。

かくして、相模原市についても中心性機能を高めた街区の設定、建設が必要であるが、市当局は、既に見てきたように、橋本・相模原・相模大野を中心商業街区とする構想をもっている。これは鉄道のターミナル性と官庁機能の集中によるものである。しかし筆者はJR相模原地区は中心商業街区としては不適當であり、橋本・相模大野・小田急相模原の3地区が適當と考えている。最大の理由は人口集積という観点であり、とくに小田急相模原は隣接する座間市からの流入をも誘導できる位置にあり、現存する商店街区としては最も繁華であることを考慮してのことである。そしてJR相模原は行政・業務中枢街区として整備し、公園街区を併せ持つ地域にするのが適當と考える。商業街区としては地区中心商業地にとどめたいものだ。

(f) 市原市(千葉)ほか

東京湾に面した千葉県中部にある石油化学コンビナートの中心都市・市原市も同様、B型都市の一典型である。もともと多くの町村の合併によって生まれた都市であるから多核的になるのは当然であるが、今日、五井を中心とした「核づくり基本計画」なるものも作成され、21世紀に向けた将来構想が打ち出されている。

市原市は昭和38年5月、市原町(八幡)、五井町、三和町、姉崎町、市津町の5町が合併して成立し、その後南総町(牛久、鶴舞他)、加茂村を編入して今日に至っている。従って、制定当初から寄り合い世帯的な都市であったわけだが、東京湾沿岸部に広大な石油化学コンビナートの建設が進んだことで急速に発展し、昭和60年10月現在で23.8万人の大都市となった。市原市を構成している旧町村のうち、明治時代にはすでに、明治22年の八幡町にはじまり、鶴舞、五井、姉崎等が町制を施しており、大正13年には牛久も町制を施していた。こうした多核都市であるが、今日では東京湾岸の八幡・五井・姉崎の市街が大きく拡がり、それぞれ地区中心的な役割を果たしている。また市城南部では小湊鉄道沿いの牛久がその役割を担っており、商業街区も以上の4地区を中心に分布している。次頁に市原市の町別人口等に関する表を掲げた。

次頁の表からもわかるように、地区別では五井・市原・姉崎の三地区がほゞてい立する形にな

表15 市原市地区別人口等一覧(昭和60年10月)

地区	面積	人口	人口密度	小売店数	飲食・サービス他	備考
五井	45.9	51,552	1,123	628	416	
市原	29.3	58,553	1,998	471	228	八幡
姉崎	33.3	45,934	1,379	404	209	
三和	39.9	17,738	445	160	40	
市津	51.5	15,288	297	96	28	
南総	77.1	26,091	338	270	82	牛久他
加茂	83.7	9,052	108	92	30	
辰己	1.6	13,925	8,703	107	39	団地
計	366.7	238,133	649	2,228	1,598	

っている。人口集積では市原地区が最も進んでいるが、小売店数や駅のターミナル性は五井地区が中心的である。次いでは人口規模と小売店数から南総地区の集積が高い。

次に五井・八幡・姉崎の市街地の商業街区に関する資料をみると、五井185、八幡130、姉崎97となっており、それぞれJR内房線五井、八幡宿、姉ヶ崎の各駅に対応する。

大字別人口では五井17,240、八幡10,563、姉崎12,405となっており、五井がやゝ規模が大きい。従って市原市の玄関としての役割は五井地区が担う構想は妥当といえる。たゞし現状では、五井地区が市の中心的な役割を担っているとはいえず、旧町別の地区中心的な機能にとどまっている。次の頁に消費者の買物行動を通して見た地区別の中心性動向をみると、このことは納得できよう。

次頁の二つの買物出向状況の表をみると、とくに最寄品では、消費者の居住地区内の商業街区の利用率が高く、五井地区70.1%、市原地区91.0%、姉崎地区81.9%などとなっており、その他三和地区、南総地区、加茂地区でも自地区内での買物の割合が最も高くなっている。しかし、五井地区の郊外部では4分の1が市原地区へ流出しているのが注目される。また買回品では多少の動向に変化があり、三和・南総・加茂などの内陸部の地区から五井地区の中心部への流出が多く見られる。そして市原地区の郊外部からも五井地区の中心部へやゝ多くの出向がみられる。こうした変化にもかかわらず、全体的にはそれぞれの地区中心部での買物が中心となっており、その中心性はやゝ五井地区で高い(82.1%)ものの地区毎の独立性は高い。

以上の結果から、市原市内の五井・市原・姉崎各地区はほぼ並存する形での商業機能を有していると見ることができる。ついでながら、比較的五井地区が高いのは、イトーヨーカドー五井店の吸引力によることが大きく、市原地区では、地区内の八幡ショッピングセンターと同じ位の集客力を有していることもわかっている(市原市商業予測調査P.27)。それに対して五井地区の一般の商店会利用は、他地区からはほとんど入っていない。

問題点はいくつかある。市原市は東京湾岸の石油化学コンビナート造成によって急激な人口増をみたが、商業機能は旧来の在町的な街道沿いの貧弱な街区であったため、消費者の多くは千葉市へ流出した。とくに消費能力の高い進出企業の従業員からは苦情も出たし、地元商店街の努力だけでは追いつかないような市原工業化の急激な進展、それに伴う人口急増だったといえる。今日においても、駅前をのぞく商業街区は木更津街道沿いの路線型商店街であり、その面だけから見れば五井も姉崎も八幡宿もさほど変わらない。むしろ八幡宿がこの3地区の中では最も繁華である。こうした点からみても、市原市の核づくりは、街区の根本的改造が必要であり、核店舗のさらなる導入とともに安全性や快適性を一層高めた町並みをつくり出さなければならない。

最後に市原市のD I D分布の特徴を見ておこう。市原市が成立したのは昭和38年であるが、人口集中地区は昭和40年に八幡、辰己台の二か所に設けられた。そして昭和45年国勢調査時になっ

表 16 最寄品の買物出向状況

(出向者数 = 100、単位：%)

地区	出向者数	五井地区			市原地区			姉崎地区			三和地区	市津地区	南総地区	加茂地区	市原市内その他	市原地区	千葉市	袖ヶ浦町	その他
		五井中心部	五井郊外部	市原中心部	市原郊外部	姉崎中心部	姉崎郊外部												
全体	5,838	24.8	24.0	0.8	41.4	26.4	15.0	17.7	13.3	4.4	3.0	1.0	4.8	1.1	2.5	3.7	2.5	0.3	1.0
五井地区	1,359	70.1	67.0	3.0	19.1	14.6	4.6	1.4	1.3	0.1	0.2	-	-	-	8.2	1.0	0.4	0.1	0.4
五井中心部	678	80.5	80.5	-	13.6	13.6	-	0.9	0.6	0.3	-	-	-	-	4.7	0.3	-	-	0.3
五井郊外部	681	59.6	53.6	6.0	24.7	15.6	9.1	1.9	1.9	-	0.4	-	-	-	11.7	1.6	0.7	0.3	0.6
市原地区	2,080	6.3	6.3	-	91.0	55.6	35.4	0.0	0.0	-	-	-	-	-	0.7	1.9	1.3	-	0.6
市原中心部	527	4.7	4.7	-	90.9	90.1	0.8	-	-	-	-	-	-	-	1.9	2.5	1.7	-	0.8
市原郊外部	1,553	6.9	6.9	-	91.0	43.9	47.1	0.1	0.1	-	-	-	-	-	0.3	1.7	1.2	-	0.6
姉崎地区	1,202	9.7	9.7	-	4.7	4.7	-	81.9	61.0	20.9	-	-	-	-	0.5	3.3	0.7	1.0	1.6
姉崎中心部	531	6.6	6.6	-	5.6	5.6	-	85.7	83.4	2.3	-	-	-	-	0.6	1.5	0.9	0.2	0.4
姉崎郊外部	671	12.1	12.1	-	3.9	3.9	-	78.8	43.2	35.6	-	-	-	-	0.4	4.8	0.6	1.6	2.5
三和地区	404	37.4	37.1	0.2	13.1	11.4	1.7	5.0	3.5	1.5	40.3	-	2.0	-	0.5	1.7	1.2	0.2	0.2
市津地区	283	3.5	3.5	-	42.0	18.4	23.7	-	-	-	-	20.8	-	-	2.1	31.4	29.3	-	2.1
南総地区	396	18.4	17.7	0.8	7.1	6.3	0.8	2.8	2.8	-	2.5	-	64.4	-	4.8	3.8	-	-	1.0
加茂地区	114	11.4	11.4	-	6.1	6.1	-	-	-	-	-	-	14.0	57.0	4.4	7.0	-	-	7.8

* ○印はもっとも出向率の高い買物場所

表 17 買回品の買物出向状況

(出向者数 = 100、単位：%)

地区	出向者数	五井地区			市原地区			姉崎地区			三和地区	市津地区	南総地区	加茂地区	市原市内その他	市原地区	千葉市	袖ヶ浦町	その他
		五井中心部	五井郊外部	市原中心部	市原郊外部	姉崎中心部	姉崎郊外部												
全体	4,005	40.8	40.8	0.0	19.4	15.6	3.8	14.1	13.8	0.3	0.6	1.1	3.5	0.6	2.0	17.8	12.8	0.1	4.9
五井地区	960	82.1	82.0	0.1	5.7	5.5	0.2	0.6	0.6	-	-	-	-	-	6.1	5.4	3.6	0.1	1.7
五井中心部	480	84.8	84.8	-	3.1	3.1	-	0.4	0.4	-	-	-	-	-	6.7	5.0	3.5	-	1.5
五井郊外部	480	79.4	79.2	0.2	8.3	7.9	0.4	0.8	0.8	-	-	-	-	-	5.6	5.8	3.8	0.2	1.9
市原地区	1,301	29.1	29.1	-	48.4	40.0	8.5	-	-	-	-	-	-	-	0.8	21.6	18.1	0.1	3.5
市原中心部	343	13.7	13.7	-	66.2	66.2	-	-	-	-	-	-	-	-	2.9	17.2	13.7	-	3.5
市原郊外部	958	34.7	34.7	-	42.1	30.6	11.5	-	-	-	-	-	-	-	0.1	23.2	19.6	0.1	3.4
姉崎地区	796	13.1	13.1	-	0.5	0.4	0.1	68.0	67.0	1.6	-	-	-	-	1.0	16.8	9.5	0.3	7.0
姉崎中心部	323	11.5	11.5	-	0.6	0.6	-	66.6	66.6	-	-	-	-	-	1.2	20.1	12.7	-	7.4
姉崎郊外部	473	14.2	14.2	-	0.4	0.2	0.2	70.2	67.2	2.7	-	-	-	-	0.8	14.6	7.4	0.4	6.8
三和地区	240	65.8	65.8	-	8.3	8.3	-	2.1	2.1	-	10.8	-	1.3	-	11.7	7.1	-	-	4.6
市津地区	240	12.9	12.9	-	22.9	7.9	15.0	-	-	-	-	17.9	-	-	46.3	38.3	-	-	7.9
南総地区	349	39.0	39.0	-	2.9	2.0	0.9	2.0	2.0	-	-	-	34.7	-	0.6	20.9	14.0	0.3	6.6
加茂地区	119	32.8	32.8	-	2.5	2.5	-	-	-	-	-	-	15.1	21.0	0.8	27.7	6.7	-	21.0

* ○印はもっとも出向率の高い場所

て、八幡・辰己台に加えて五井・姉崎他一か所に設けられている。その時の各D I Dの人口をみると八幡（16,636人）、辰己台（16,246）、五井（8,179人）、姉崎（6,510人）他となっており、五井の中心性は無い。従って、中心核設定の必要はこの点からも理解できる。

4. D型都市のケース

この類似の都市は市街地規模が小さく、周辺の集落分布も粗であるタイプにも複核都市があり、例えば美祿（吉則・伊佐）、えびの（飯野・加久藤・京町）、南陽（赤湯・宮内）、東根（東根・神町）、日南（油津・鉄肥）などが例示できるが、先にあげたB型にくらべると単核都市の方が多い。そして、周辺部が山地、原野等人口分布の希薄な地域の中において比較的求心性の高い中心市街地をもっている都市が目立つ。例えば表1の○印以外の都市の中にも北上・日光・飯能・成田・氷見・大月・鹿屋・小松・下田・陵部・平田・大田・伊万里などであった。これらの都市の街区はいずれもかなり規模が大きく、いくつかの街区にはアーケード街もみられた。そしてこれらの都市では、いわゆる都市の「へそ」がはっきりしているわけで、この「へそ」を中心とした都市計画、区画整理、商店街の美化・修景を加えることで、コミュニティセンターとして求心性を高めることが可能となる。

しかし、また、多くのD型都市は過疎地域に分布している。つまり、その地域全体が人口減少によって機能に支障をきたしているのであるから、地域全体（あるいは県全体）としての過疎対策なしにその都市の活性化はあり得ないことにもなる。こゝでは、そうしたいくつかの都市も含め、D型都市のかかえる問題点を明らかにし、その中でも活性化をみている都市と衰退をつづけている都市を考察しながら考えてゆきたい。

(a) 富津市（千葉）

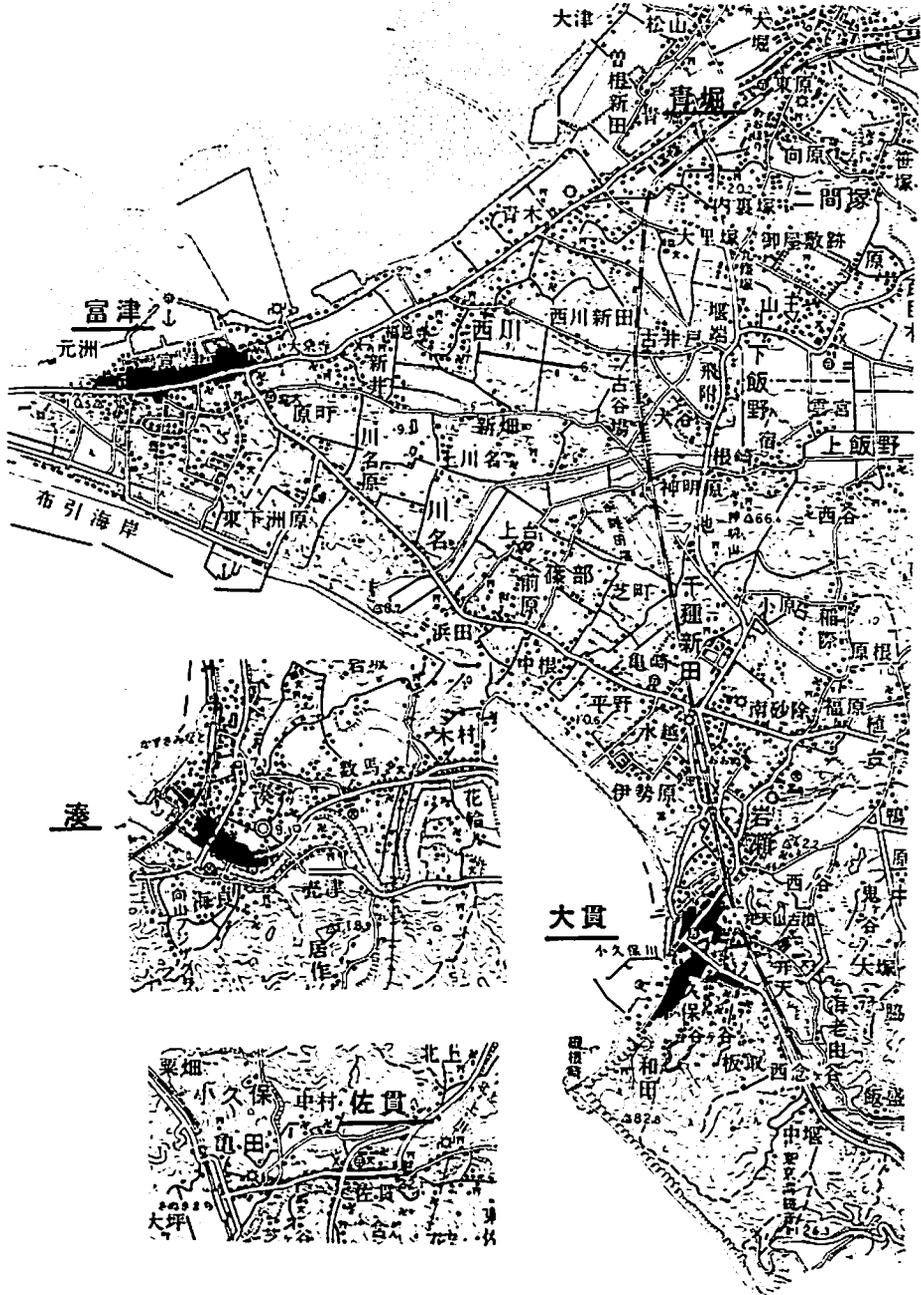
千葉県中部の東京湾に臨む多心都市・富津は、昭和46年に市制を施き、以来、房総半島から東

表18 富津市地区別人口等一覧
(昭和60年国勢調査による)

地区名	面積(㎢)	人 口	人口密度	S55国調との増減	商 店 数		備 考
					小売商	その他	
富 津	6.98	7,625	1,092	△ 207	112	56	S55のD I D
青 堀	10.67	8,347	782	968	137	29	
飯 野	8.24	6,263	60	38	42	9	
大 貫	19.90	12,789	643	185	172	22	
佐 貫	13.65	4,045	296	△ 7	64	4	
湊	20.69	5,849	283	△ 141	132	11	市 役 所
天神山	24.08	2,404	100	32	19	6	
竹 岡	15.11	3,211	213	△ 14	41	5	
金 谷	11.09	2,236	202	△ 107	62	3	
環	44.79	2,696	60	△ 68	36	1	
関 豊	28.13	1,312	47	△ 4	11	1	
計	203.33	56,777	279	675	828	147	

△：減少

図 30 富津市



京湾に突き出した富津州から房総丘陵に至る広い範囲を市域にもち、美しい海や緑の丘陵を背景に、東京や千葉方面からの行楽地として発展し、今日に至っている。JR内房線で行くと青堀・大貫・佐貫町・上総湊・竹岡・浜金谷と市内の駅が並び、ほゞそれらに対応する形で、小規模ながら市街地が分布している。他に、富津市では最もまとまった市街地であり、昭和50年度国勢調査時点ではD I Dの設定もみた富津市街（人口5,992人）があるが、昭和55年国勢調査以降は準人口集中地区へと後退している。前頁の表18は、市内の地区別人口等の一覧である。

表18をみてわかるように、人口で5,000を越えているのが富津・青堀・飯野・大貫・湊の5地区である。人口が最も多く、1万人を越えているのが大貫地区である。しかし、備考にも示めたように、当市の核的な中心は湊であり、富津にもかつてD I Dが設定されていた。従ってこの表を見る限り、中心的な役割をもった地区を規定することはできない。

前頁の図は富津市の5万分の1の地形図である。市域が広いので湊・佐貫の中心部を海の部分に掲げた。富津市は、密集市街地が富津・大貫・湊地区に見られる。商店街もこれら3地区を青堀地区に比較的まとまった規模で分布しているが、いずれも決定的に中心性を保持しているわけではない。下の表19をみればわかるが、全般に街区延長が長く、その割に商店分布が粗く、店舗密度が30%台と低い。筆者もこれらの街区については巡検したが、いずれも買回品店が少なく、その買回品店も最寄性の強い薬局、化粧品店、生花、衣料品店などが目立っている。

表19 富津市の主な商業地区

地区名	街区延長	商店数	買回品店(%)	最寄品店(%)	飲食・サービス(%)	その他(%)	店舗密度(%)
青堀地区	2,435	108	35 (32.4)	31 (28.7)	33 (30.6)	9 (8.3)	37.4
富津 "	1,850	81	21 (25.9)	26 (32.1)	24 (29.6)	10 (12.3)	30.8
大貫 "	3,317	130	44 (33.8)	42 (32.4)	35 (26.9)	9 (6.9)	32.7
湊 "	3,619	159	46 (28.9)	47 (29.6)	43 (27.0)	23 (14.5)	37.3

前頁の図30からもわかるように、富津市の主要な街区は広い市域に分散している。そして、それぞれの街区の商業的な集積状況、業種構成面からみても、いずれも近隣商店街の域を出たものではない。さらに巡検してわかったことだが、とくに大貫・湊地区は街区内での切断が目立ち、一つの商店街としてのまとまりを認めることはできなかった。比較的まとまっていた青堀地区の街区も、一般の民家等による切断があちこちにある上に店舗の老朽化も目立ち、さらには国道16号線沿いとあって大型トラック等車輛の通行量が多く、著しく安全性に欠けていた。富津地区はもともと漁村であり、食料品店・食堂・魚屋・菓子店等日々の店舗が並んでいた。

たゞし、富津市にとっての好条件は、東京に比較的近いことである。このことが東京方面からの企業の施設の進出を容易にし、現実に東京電力富津火力発電所がすでに操業をはじめており、さらには新日鉄総合研究所の設置もきまるなど産業面でも明かるいきざしが見えている。そして、科学技術の最先端をいくバイオテクノロジー研究の中でも、今もっとも注目されている海洋性バイオの研究施設が、将来富津市に続々とやってくる予定もあり、これらの施設の進出に伴う消費の増大と、多様化に対応した新しい商業核の育成が、今後の富津市の課題となるだろう。

(b) 日南市（宮崎）

宮崎市南部に隣接し、東は太平洋の日向灘に面しているものの三方を山や丘陵で囲まれた林業と漁業の町である。全市面積の50%近くが山林で、「鉄肥杉」の産地として全国的に有名である。

宮崎市とは隣接しているものの、宮崎からは日南線で約48km、普通で1時間20分、快速でも1時間余りかかる。また、国道220号線でも宮崎まで52kmあり、宮崎の影響は受けながらも一つの独立した経済圏を持ちうる位置にある。まず下に掲げた地区別人口等の表を見よう。

表20 日南市・地区別人口等一覧

(人口等は昭和58年末現在)

地区名	面積	人口	人口密度	S55との増減	※小売商	※飲食	備考
𪗇肥	42	8,222	195.8	△ 132	182	85	城下町
吾田	28	19,382	692.2	463	368	92	市役所
油津	4	9,053	2,263.2	△ 653	379	221	漁港
東郷	24	5,518	229.9	266	51	10	
鷓戸	66	1,697	25.7	△ 106	43	18	
細田	27	5,733	212.3	10	92	8	
大窪	18	646	35.9	△ 68			
酒谷	86	2,176	25.3	△ 53	30	0	
計	295	52,427	777.7	△ 273	1,145	434	

(※小売商・飲食店数は昭和57年の事業所統計調査による。)

上の表20を見るとわかるように、日南市の地区別人口では吾田・油津・𪗇肥の3地区に集積している。もともと日南市は、昭和24年に𪗇肥・吾田・油津・東郷の四ヶ町村が合併して市制を施行するまでは、𪗇肥杉による林業の町であり、旧城下町であった𪗇肥と、漁港都市油津がこの地方の小中心地であった。しかし、王子製紙などのある吾田地区に市役所をはじめとする諸官庁が統合されるとこの地区に人口の集積が進み、逆にかつての小核心地であった𪗇肥や油津の人口が減少することになる。こうして市内は、日南線の𪗇肥・日南・油津のそれぞれの駅毎に市街地が集積し、商店街も立地している。次にその分布図を示す。

次頁の図が日南市要部である。斜線部分は密集市街地であり、太く描いた黒の線部分が商店街の位置を示めている。やはり、歴史的に古い𪗇肥や油津の市街地が大きい。吾田地区には住宅団地が進出し、人口が増えている。このように、日南市要部は𪗇肥・日南の古い核心地の間に日南駅を中心とした新しい核心地が形成され、三極分散型の都市となっている。それだけ、特定市街地の中心性は希薄となる可能性がある。次に主な商店街の業種構成を示す。

表21 日南市主要商店街の業種構成一覧

商店街	買回品%	最寄品%	特殊専門店%	飲食・サービス他%	計	備考※
𪗇肥	36(45.0)	24(30.0)	5(6.2)	15(18.8)	80	民家33・大型店1
中央	29(40.3)	9(12.5)	7(9.7)	27(37.5)	72	(事務所8)・大型店2
銀天街	37(52.9)	8(11.4)	12(17.1)	13(18.6)	70	民家5
五番街	19(38.0)	13(26.0)	3(6.0)	15(30.0)	50	大型店3
岩崎一丁目	11(39.3)	10(35.7)	1(3.6)	6(21.4)	28	民家8

※民家・大型店の数は各商店街の合計に含まれていない。

図31 日南市商店街位置図



次に日南市に占めるそれぞれの商店街の販売シェアをみよう。下の表がそれであるが、上段に消費者ニーズ調査の結果によるもの(A)、下段に小売店経営実態調査と大型店調査の結果からその商店街の販売額ベースで算出したもの(B)をあげた。

下の表を見てわかることは、消費者が買物先イメージとしてあげているのでは銀天街がトップ

表22 日南市に占める販売シェア(%)

	蛭肥	中央	銀天街	五番街	岩崎一丁目	大堂津
A	7.8	5.7	11.9	5.4	3.8	2.0
B	6.5	8.0	5.2	3.6	3.2	1.6

であり、実際の売上げ割合から見ると中央商店街がトップである。中央商店街は外販では市内一の実績を上げている商店街であるが、来街イメージは5.7%とさほどよくないようだ。銀天街は来街イメ

ージは中々良いのであるが、表2でもわかるように圧倒的な買回品店の構成になっており、現実にはひんぱんに買う商品ではないので、売上げの面では第3位となっている。アーケードも設置されており、カラー舗装も行なわれた立派な商店街であるが、大型店の進出によって人の流れが変わり、アーケード街はガラとした状態となっている。

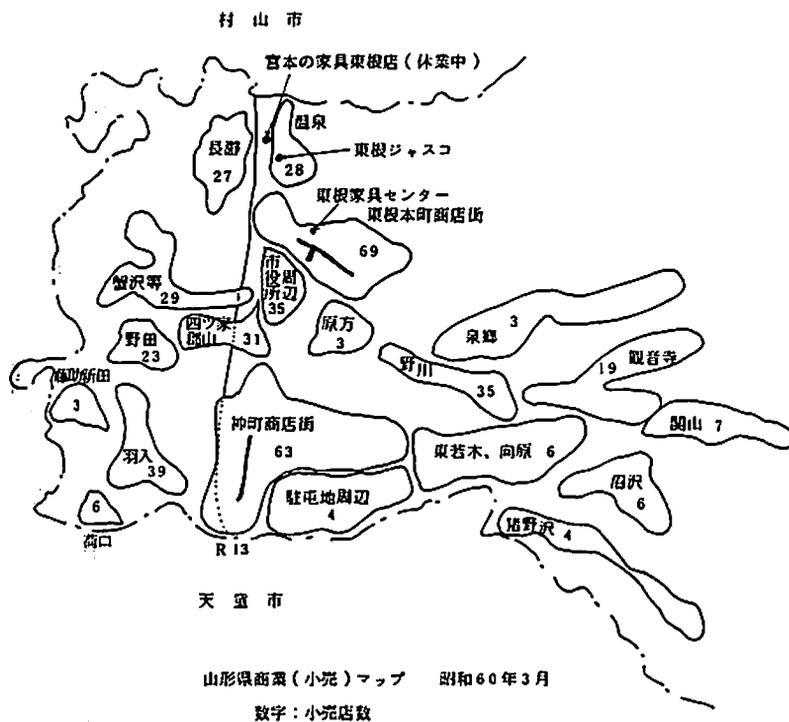
消費者の買物先調査では油津地区が最も多いのであるが、販売シェアの面から見ると個々の商店街は中央や鉄肥を下まわり、来街者の多くを2つの大型店に吸収されているようである。従って、油津の中心性が高いのは日南山形屋と寿屋油津店の二つの大型店の吸引力に負うところが大きい。最寄品や最寄性買回品などはむしろ鉄肥や中央商店街と、あとは大型店・一般商店での買う割合が高く、毎日性・週間性の商品に関する業種を揃えることによってバランスのとれた街区にすることが油津の一般商店街にとって必要なことである。

現実には油津や鉄肥の人口減少、それに対する吾田の人口増という現象からも、日南市の中心がやがて吾田地区に移動するのではないかと、そして、現在はイメージのよくない中央商店街であるが、広大な原野の広がる吾田地区に、商業機能の面でもあらたな中心核が形成されるべきだと考える。現状は、さきにも述べたように、油津にやゝ比重がかかっているが、三極てい立型のD型都市である。

(c) 東根市(山形)

東根市は山形盆地東側(奥羽山脈側)の三大扇状地のうち、最北の乱(みだれ)川扇状地北部一帯に位置し、人口約4.1万余りの農工都市として発達している。昭和33年、東根・神町と長湊

図32 市内商店街と大型店の配置



・小田島・大富・高崎・東郷の2町5村が合併して市制を施行した。今日、山形空港も設けられており、山形県の空の玄関として発展しつつある。

東根市の地区別人口は次のとおりである。数字は昭和59年現在である。なお()内は昭和50年度を100とした指数である。

東根 12,295 (111.4)、神町 9,143 (95.3)、東郷 4,197 (99.6)、高崎 2,380 (98.6)、大富 4,256 (111.0)、小田島 5,848 (120.2)、長瀬 3,325 (101.5)であるが、人口規模ではやはり東根と神町が特化できよう。次に東根市内の商店分布をみよう。前頁の図32がそれである。

商店街区としては東根本町と神町があり、他に温泉地区に東根ジャスコの大型店がある。商店街はいずれも店舗数にして60~70店ほどの中規模のものであるが、前頁の図32からもわかるように、全体としては商店分布は分散的である。

そのうち東根本町商店街は、JR奥羽本線東根駅から東南方向でおよそ1.5km~2kmの距離にある。従って、立地条件としては駅前商店街ではなく、古くからの市場町から発達してきた街区である。現に一日町・三日町・六日町・八日町などの地名が残っており、関山街道沿いに月に12回市が開かれたという記録(村差出明細帳)からも市場町起源の集落であったことを知ることができる。

下に市内の「地区別小売業の力」に関する表を掲げた。それを見ると、それぞれの商業地区の力が微弱であることがわかる。つまり小売販売額シェアで見れば、東根本町 10.7%、温泉(ジャスコを含む) 15.7%、神町 14.9%であり、完全に商圈が分散している様子がわかる。それは、東根市内において商業核となる街区がないということであり、それゆえ、核となるべき街区の構築がすすめられており、既存の商業街区についてはいずれも近隣商店街として位置付けられているのである。昭和60年度の東根本町商店街診断報告書は、タイトルに「地域に根ざしたサバイバル

表 22 東根市地区別小売業の力

昭和57年商業統計

	A 商店 数 店	B 従 業 員 数 人	C 売 場 面 積 ㎡	D 小 売 販 売 額 万円	経 営 規 模			販 売 効 率	
					E(D/A) 1店当 り販売 高 万円	F(C/A) 1店当 り売場 面積 ㎡	G(B/A) 1店当 り従業 員数 人	H(D/B) 従業員 1人当 り販売 高 万円	I(D/3.3C) 坪当り 販売高 万円
東根本町地区	(13.7) 79	(14.4) 285	(14.1) 3,984	(10.7) 252,708	3,199	50.4	3.61	887	209
東根温泉地区 (ジャスコ含む)	(5.5) 32	(13.0) 258	(21.9) 6,201	(15.7) 368,422	11,513	193.8	8.06	1,428	196
神町地区	(11.4) 66	(12.4) 246	(11.5) 3,247	(14.9) 349,610	5,297	49.2	3.73	1,421	355
そ の 他	(69.3) 400	(60.3) 1,196	(52.6) 14,887	(58.7) 1,380,895	3,452	37.2	2.99	1,155	306
計	(100.0) 577	(100.0) 1,985	(100.0) 28,319	(100.0) 2,351,635	4,076	49.1	3.44	1,185	274

() 市計を100としたときの構成比

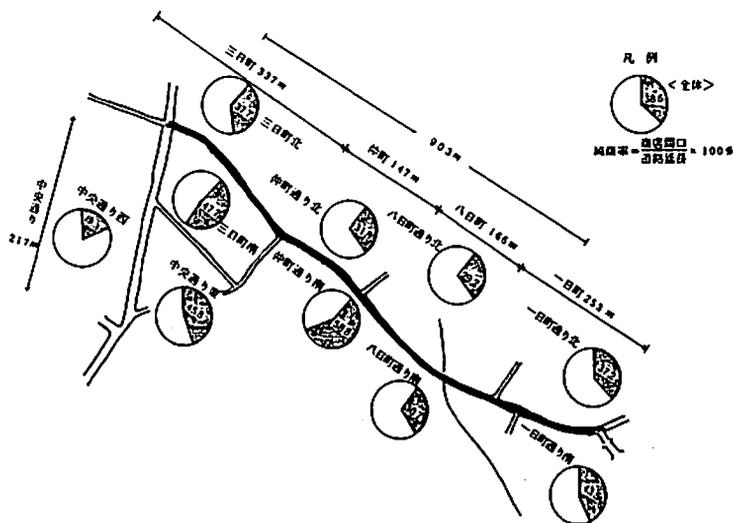
の途」と銘打ち、こうした地方都市の生き残り策を訴えているのが印象深かった。ちなみに、東根市内の人々の買物動向をみても、東根地区 24.0%、天童市 20.6%、山形市 12.9%、ジャスコ 12.0%、神町地区 11.7%という割合になっており、やはり分散型の様相を呈している。

商業街区が分散するということは、ショッピングゾーンとしてのまとまりと活力に欠けることであり、その意味でも現在計画されている「新都心づくり」は、周辺の市や町の商圏に対抗し得る魅力ある新商店街の形成のためにも極めて有効な方策である。

さて、現状での最も大きな商店街は東根本町商店街であるが、下の図33は当商店街の形状および純商率を示めたものである。これを見てすぐにわかることは、当商店街の道路が曲りくねって

おり、純商率も低いことから、自然発生的な路線型商店街である、ということだ。よく地方の農村の中心集落にみられる商店街のや、規模の大きなものと考えてよい。街区延長が東西部分だけで約900m、南北方向を含めると1,100m余りという長さであり、買物動線としては長すぎる。しかも、民家・駐車場など非商店家屋による切断が

図33 東根本町商店街の形状と純商率



目立ち、消費者にとって利用のしにくい街区となっている。筆者が巡検したときにも感じたことであるが、道幅がせまく街区の見通しがつきにくい形状であり、その上、奥羽本線東根駅からは2km近く離れており、当商店街によほど買回性の高い商店が軒を連らねているのでなければわざわざやっては来ないような実情である。そして、その業種構成であるが、全体として最寄品中心であり、その割合でも最寄品店が43.9%、買回品店が30.3%、特殊専門店が10.6%、飲食・サービス店が15.2%となっていて、最寄品店が4割以上という街区となっている。こうした点からみても、当商店街が東根市の中心商店街とはなり得ないことは当然であり、今少し店舗集積を高め、最寄品の品揃えを豊かにすることで近隣商店街として地域住民の利用価値を高める工夫することが肝要であると判断した。

このように、東根市についてみても、現状では核心地をもたないD型都市であるといえるが、当市の場合、「新都心」の必要性を深く認識しており、市役所周辺地区をそのために改造するプランが実行に移されつつあることは「サバイバルの途」として高く評価できる。

5. 地方中小都の問題点と改造の方向

以上、B型・D型のいくつかの都市についての考察を行なったわけだが、簡単にまとめると次のような特徴（問題点）を指摘することができる。

まず第1は、商業街区が未成熟であること、つまり、多くの都市で、旧町村時代の路線型商店街のまゝの姿で今日に至っているという問題である。さらに商店街が国道や主要地方道など交通量の多い道路沿いに形成されている場合、とくに安全性に欠けることおびたしい。それでも歩車道の区分があれば幾分ましな方で、白線による区分、側溝蓋部分だけの歩道となると歩くだけで精一杯であり、おちおち買物などを楽しむどころではないというのが実情であり、こうした商店街が非常に多かったことに驚いている。少なくとも歩道の確保を第1として整備する必要がある。第2には、店舗集積に欠け、業種構成もアンバランスなことである。しかも店舗の老朽化した街区も多く、魅力を著しく低下させている。第3には、核店舗がないかあっても地元商店街とは相互の補完性を持っていないケースが目立つ。買物客の回遊性を高め、地元商店街との共存共栄が計られる形で大型店を導入することによって街区の活気を取りもどすことは一つの方策である。第4には、鉄道、国道・主要地方道などの幹線道路、河川、倉庫や工場、空き地、駐車場等による切断が目立ち、店舗の連担から引き出される商店街としての統一性に欠け、アメニティが低いことである。これらは、商店街の多くが自然発生的であったことに起因するものであるが、店舗集積を高め、魅力ある商業街区の構築につとめなければならない。そして切断部分の一部に最寄核店舗やポケットパークなどを配し、顧客の来街を促したい。そして第5には駐車場の確保である。今日のようなモータリゼーションの進んだ時代において、駐車場の確保は商店街にとって必要不可欠の条件である。クルマ社会の今日、来街者の半数以上がクルマでやってくるという街区も少なくない。

上記のように、主に5つの点について問題点として掲げたのであるが、それぞれには相関性があり、これらの問題点を抱括した形での街区の改造が必要とされる都市も多い。そして筆者があちこち巡って気付いた最大の特徴は、ほとんど例外なく大型店が賑っていたことである。なぜ大型店が賑うのか、商店街改造のポイントはここにある。まず第1に選択性がある。つまり、あれこれ見比べて買物ができること。第2に利便性が高いことである。最近の大型店は駐車場を備えたものが多く、また店内はワンストップショッピングゾーンとして極めて便利に配置されている。第3に安全性が高いことは言うまでもない。第4に快適性が高いことである。休憩所、遊戯場、飲食街、トイレ、催し場などが配置されており、コンデショニングも含めてアメニティを高めている。一般の商店街にもモールが設けられ、集客機能を高めている都市もあるが、それは極めて例外的であり、多くの資金を必要とするこのような街区の改造は中々進みそうにないのが現状である。

一つの方法は、例えば島根県の三刀屋町で地元の商店街が金を出しあって800台分の大駐車場をもったショッピングセンターを国道沿いに建設し、流出していた人々を地元へ引きもどすことに成功した例がある。そこでは「歩くだけでも楽しい」ショッピングセンターを演出、市民生活の交流の場としての役割を果たさせている、とのことである。そして出雲市ともある程度対抗できる吸引力を持っているということであるから、地方中小都市の失地回復の一つのモデルケースとなり得るだろう。要は、消費者側の多様なニーズに対応できる商店街でなければならないということだ。そして行政側も、小売業の位置が重要であり、小売業をその町の産業であるという考え方に立って、町づくりの中で商店街整備をしていく必要があるし、逆に商店街の整備を町の活性化につなげることも可能であると考え。こうした商業と町づくりを一体にした構想こそ、地方中小都市のサバイバルのために今一番必要なことではなからうか。あちこちの地方中小都市を見てまわった筆者の確信である。そのためにも、行政と小売業者たちが一体となって中心商店街の構築に全力をあげてもらいたいという願いを結論に、この小論を閉じることにする。

6. あとがき

同一タイトルで4回にわたって小論を重ねた。不備な点を補いながらの論述であったので、同じ内容が重複する箇所もあって申し訳けなく思う。小論の目的はたゞ一つ、停滞もしくは衰微しつつある地方の中小都市の現状と問題点を明らかにしつつ、その解決の途をさぐろうとすることである。そのため全国各地の中小都市を巡り、かつ、当既市役所より資料の提供をうけた。そして、それらの都市を巡って痛感したことは、地方都市の中心街の衰退が予想をはるかに超えていたことで、閑古島の鳴く商店街の何と多くあったことか、と今さらながらに驚いている。その都市に商業に代わる産業、特産物などを有している場合、それなりに都市機能を保つこともできるが、中心街区が衰退すると、その都市自体が衰退の途をたどると思われるところも少なくないのである。そういった所では、商店街の整備もなされておらず、中にはゴースタウンと見逃えるほどの都市もあった。

B・D型の都市として分類した都市は最初の分類より幾分増えているが、我国の全市部の比重が1.9と高く、若干、上方に修正したためである。いずれにしろ、都市とはいってもかなり多くの都市が、その実態において都市的機能を有していないか、有していてもその割合が小さいものが目立つのである。そして、都市を人口だけで判断することの誤りも数多く見てきた。人口総数順に都市を並べることが各種の資料でよく見られるが、これは大きな誤りである。とくに大都市郊外に立地する諸都市は、人口規模の割には中心市街地形成において未熟なものが多い。それは既に何度か論述したように、急速な宅地化、都市化に伴って人口は急増したが、中心市街地の発達テンポがそれに伴わないという実態によるものである。今一つは、都市の成立過程において複数の小中心地を包括して成立している場合も同様である。いわゆる複核都市とか多心都市とかいわれる都市で、人口規模の割には中心市街地の発達が不十分な実態がみられる。

このような都市を市街地再開発によって生まれ変わらせることができることよいためであるが、何分にも多額の費用を伴う事業であり、とくに伝統的な商店街の再開発の場合は、なおさらそれら商店街の商店主たちの合意作りが困難であるという問題もある。それに、商店街を含む町並が景観的に優れたものである場合、町並保存という要素も大切である。いずれにしろ、地方都市の生き残りをかけた開発の途は何か、それは今後共追求してゆきたい課題である。

終りにあたり、掲載した当該の市をはじめ、全国の多くの都市から提供を受けた資料がこの小論作成に大変役立ったことを付記して感謝の意を表したい。筆者の地方都市「研究」はまだまだ続けたいが、これまでの不十分さを補うには更に一層の努力と各方面からの御指導が必要と考えている。

今年の研究活動

研究調査部

- (1) 研究紀要の発行 特集を組まず、個人研究の収録とする。
- (2) 授業研究 希望者による授業公開、
(今年度は公開研究会のため開催は1回のみ)
63年1月13日(水)～1月19日(木)、合評会1月21日、
授業者：芳村昭男先生、国語(古文)高1、
谷本文男先生、国語(漢文)高1、
吉田信也先生、数学、中1、
- (3) 校内研究会 第1回：7月9日、本校の研究体制について研究調査部からの提案(アンケートをもとに、1；校内研究会、2；授業公開、3；公開授業研究会、4；研究紀要、5；研究テーマについて提案、討議。
第2回：12月9日、研究の報告、
(1) 「環境教育の実践について」理科(中道先生)。
(2) 「自主的学習の実践」社会科(吉田 裕先生)。
- (4) 教科担当者会議 一学期：6月2日～19日に各学年で行われる。
二学期：希望学年のみ実施。
- (5) 標準学力テスト
従来の標準学力テストは実施しないことに決定(62年12月)、中学生を対象とした五教科を軸とする学力診断テストについて研究調査部より提案するが、合意をみず、教科主任会の今後の討に委ねる。
- (6) 全附連、高等学校研究大会への参加(筑波大附属高)
本校の発表：理科部会、「中・高における環境教育(その1)」
中道、林、藤川、藤田、屋鋪、矢野の各先生。
保健体育部会、「本校の選択制男女共学における体育の授業について」渡辺先生。
- (7) 公開研究会の開催
数学科、社会科の二教科で公開研究会が奈良県教育委員会、奈良市教育委員会の後援を得て開催される。
第1日(11月19日、木)：数学(中2)、社会(中2)(高2)の公開授業。
講演「教育改革とこれからの教育実践研究」
奈良女子大学 教授 山田 昇
第2日(11月20日、金)：数学(中2)の公開授業。
参加者89名(数学47名、社会科42名、大学教官をはじめとして高等学校、中学校、小学校の教諭から大学生まで、幅広い参加者があった。

公開授業

数学 19日(木)

公開授業①② 中学2年A組 題材「一次関数」 授業者：吉田信也
公開授業③④ 中学2年C組 題材「一次関数」 授業者：野寄睦美
(奈教大院)

20日(金)

公開授業⑤⑥ 中学2年B組 題材「一次関数」 授業者：松本博史
研究協議助言者 神戸大学 助教授 船越俊介
奈良教育大学 助教授 重松敬一
奈良女子大学 助教授 杉峰英恵

社会 19日(木)

公開授業① 中学2年B組 題材「江戸時代の村」 授業者：勝山元照
公開授業② 高校2年は組 題材「近世村落の構造」 授業者：勝山元照

研究紀要 第29集

昭和63年7月31日発行

発行者 奈良女子大学文学部
附属中・高等学校
校長 新 睦人

〒630 奈良市東紀寺町1-60-1

TEL・0742(06)2571